

問題児たちが異世界から来るそうですよ？
出来損ないの陰陽師の
異世界録

カオス隊員

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

現代に一人の陰陽師がいた。

その陰陽師は符呪は基本程度しか出来ず、お祓いもろくに出来ないことから周りから『出来損ないの陰陽師』だと言われ続けた。だが、その陰陽師は果てしない闇と罪を背負いながらも前に進み、人知れずに世界を救った経験を持っておりその実力は世界最強。そんな陰陽師に一通の手紙が上空から舞い降ってきた。それが一神崎龍騎《かんざきりゅうき》が箱庭の世界に降り立つきっかけだったのだ。正史には存在していなかった陰陽師が箱庭の世界に降り立つ時、物語が向かう場所は希望か？それとも絶望か？

目次

くYES!ウサギが呼びました!く

プロローグ

第一章

第二章

第三章

第四章

第五章

第六章

第七章

第八章

第九章

第十章

1

11

31

57

83

109

137

159

186

209

238

第十一章

第十二章

第十三章

第十四章

第十五章

第十六章

259

281

304

327

346

368

「YES！ウサギが呼びました！」
プロローグ

——2XXX年、某都市の夜の都会。

初冬の候、だんだんと寒さが身にしみる季節になりつつあるものの多くの人が賑わい、暗闇の夜を照らしていた。

「今日は一段と賑やかだな、この街は」

都会に立ち並ぶビルの中でも高い分類に入るビルの屋上から街の様子を見下ろしている人影。

紺色のブレザーに灰色のズボン、首には紅のペンダントをぶら下げている。

服装から推測すると、この人物は男性であり学生である。整った容姿に風になびかせる黒髪、澄んだ蒼い瞳。

少年、『かんざきりゆうき神崎龍騎』は、人で混雑している景色を上空に視界を移した。

「そういえば、後もう少し時が経ったらクリスマスだったけ？まあ、独り身の俺には関係ない行事だけだな」

誰かと会話しているかのように呟く。しかし、龍騎以外にこの屋上には誰もいない。それでも龍騎は口を開け、更に呟きだす。そこに何かがいるかのように……。

「そういうえば元々クリスマスはキリストの降誕を祝う祭りだったけ？まあ、今の現代ではそんなこと意識している人なんて宗教者ぐらいしかいないだろうけどな」

そこで会話を一時止め、後方に振り返る。すると、そこには先ほどは龍騎しかいなかった屋上に大きな一つの影が増えていた。三mはある巨体にゴリラを彷彿させる剛腕。その影はどう見ても人間の形をしていなく獣に近い形をしており、影の周りには黒い負の瘴気が漂っていた。普通はその姿に恐怖、もしくは動揺の一つでもするものだが龍騎は臆せず会話を続ける。

「……………で、お前はクリスマスに関連がある生物なのか？どう見てもそんな立派な存在

には見えないけどな」

カラカラと笑う龍騎。影は龍騎の問いを聞いていないのか、返答もせず無言で左腕をゆつくりと上げていく。剛腕に瘴気が集まり姿を変えていく。その剛腕は熊に似た形になり、鋭い爪が怪しく輝く。その行為は龍騎の生命を刈り取ると思われる行動だ。勿論、そのまま勢いよく振り落とされると普通の人間には一溜まりもないだろう。しかし、龍騎は焦り・恐怖といった表情はなく、それどころか挑発しているかのように目の前の影に軽薄な笑顔を浮かべる。

「もしくは——怨念で実体化して、暴れるしか能がない堕ちた怨霊か?」

「GEEEEEEYAAAAAaaaaa!!」

影は怒り狂うように雄叫びを上げ、龍騎に剛腕を振り落とした。その一撃は屋上のタイルに大きな罅が出来、ビルを揺るがす程の威力であった。砂埃が上がり、影の視界を遮るが左腕から地面のような硬い感触を感じると龍騎を潰したと確信し、狂ったかのように影は笑い出す。

「……………おいおい、何勝ち誇った顔をしているんだ？ろくに確認もせず勝利を確信することは死亡フラグだぜ？」

だが、振り落とした腕から龍騎の声が響き渡る。砂埃が止むと、目の前には龍騎が片手で五芒星の魔法陣を展開させており、それが影の一撃を止めていた。まさか止められると思っていなかった影は己の一撃を止めた人間に戸惑いの表情で見つめる。それを見た龍騎は少し面白そうに軽薄な笑みを浮かべる。

「へえ……………、お前そんな感情があったのか。普通の怨霊は怒りが大半を占めているんだけどな。……………まあ、それはどうでもいいとして、まさかこの程度の威力で（仮）にも陰陽師である俺を倒せると思っているのか？そうだとしたら、そこそこ強いと思っていただが期待はずれだったな」

先程まで軽薄な笑顔を浮かべていた表情が消え、露骨に落胆したといった溜息をこぼす。その態度に不快と感じた影は左腕に更に力を入れて龍騎を魔法陣ごと押し潰そうとする。その力はタイルの罅がさらに広がり、影の足元は陥没していくほどであった――

——が、龍騎は苦悶の満ちた顔をしておらず、むしろ余裕の表情で影を見つめていた。影は怯えもしない目の前の人間に殺気を込めた視線で睨みつける。

「GRRRRRRRRRRrrrrrrrrrr……！」

「……………面倒になってきた。さっさと終わらせて報酬貰いに行きますか」

そう言った龍騎は、展開していた魔法陣で影の剛腕を受け流すようにずらし、影の体を崩させる。影は急に受け流されたことで重心を取ることが出来ずに、何とかしようと踏ん張るが対処することも出来ず、龍騎の狙い通りに体勢を大きく崩れて隙だらけになった。

その隙を龍騎は見逃さず、魔法陣を破棄して影の懐まで一瞬で接近し、右腕に眩い紅蓮色の霊力を纏わせて影の腹部を殴りつける。影は体勢を崩した状態での一撃を耐えられるはずもなく、そのまま貯水タンクまで吹き飛んでいった。龍騎が強打した一撃は強い衝撃を受けた貯水タンクが大きく凹み、影の腹部に抉られたかのような酷い火傷を負わせていた。その傷を見るからに今の一撃は凄まじい威力を物語っていた。

その一撃を受けて瀕死寸前になった影だが唸り声を上げながら龍騎を睨みつけ、身体を動かそうとする。しかし、重傷を負っている影はもう動けるほどの力は残っていないのか睨みつけることしか出来なかった。だが、影の目はまだ死んでいなかった。

「ほう……………、実力の差を見せつけたのに、まだ俺を倒そうとしているのか」

龍騎はそんな影の目を見て感心する。重傷であるのに関わらず、実力が格段に上である自分にまだ戦おうとしているのだ。本来、この手の怨霊は獣に近い生存本能を起こし即座に逃走を謀ろうとするもののだが、この怨霊は醜い逃走もせず今にも攻撃をしてきそうな迫力があつたのだ。

「その気迫は認めるが、こっちも仕事なんでね。恨みたければ存分に恨んでくれ」

そう言いながら未だに眩い紅蓮色の光を放つ右腕が更に強く輝きだし、龍騎はゆっくりと歩きながら影に近づいていく。影は本能的にあの光は己を消滅させるほどの威力がある危険なものと感じ取っていた。近づいてくる人間から距離を取らなければなら

ないと身体を動かそうとするがその前に龍騎が影の目の前まで接近していた。

「久しぶりに面白いものが見れたよ。来世ではいい人生を送れることを祈るぜ」

そう言いながら右腕で影の顔面を掴み取る。すると、炎が影を包み込み抵抗もできずにこの世から消え去っていった。龍騎はそれを見送りながら荒れた屋上に視界をを移し、今回二度目の溜息をこぼす。

「……………はあ、依頼者のもとに行く前にまずは後片付けだな」

龍騎はまたズボンのポケットから模様が描かれている御札を取り出し、罅割れた屋上のタイルと大破した貯水タンクに貼り付ける。すると、凄まじい勢いで壊れていた所が修復されていき、修復が終了した時には戦闘が始まる前の状態に戻っていた。役目が終わった御札は発火し、そのまま灰となって消えていった。

「修復終了つと……………。さてと、依頼達成の報告をしに行くか」

少し面倒くさそうに思いながら、その場から背を向け離れよう歩き出す龍騎。

「……………ん？」

何か感じ取ったのか龍騎は歩みを止め、上空を見上げる。視界に入ってきたものは一枚の封書であり、不自然な軌道を描きながら龍騎の手元に収まった。封書を確認してみると達筆で『神崎龍騎殿へ』と書かれていた。周囲を見回し、人の気配を探るが誰もいなかったので龍騎は諦め、封書を解析することを専念することにした。

「この封書に何かしらの力を感じるな……………。おそらく転移系統の術式が付与されているんだらう。今この封書を開くと送り主が指定した場所まで飛ばされることは確実。明らかに罠としか思えないな」

封書から感じる不思議な力を解析し終え、そう結論つけて封書を凝視する。罠と分かった今なら危険なこの封書は捨てるべきだらう。だが、龍騎はむしろ面白いものを見たかのように笑みを浮かべ、手紙の封に手を掛ける。

「ハッ、おもしれえ！どこの誰かは知らないが、この挑戦受けて立つてやる！」

そのまま手紙の封を切り、中に書かれている文章を読んだ。

『悩み多し異才を持つ少年少女に告げる。

その才能^{ギフト}を試すことを望むのならば、

己の家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨て、

我らの“箱庭”に来られたし』

☆

「うおっ!?!」

龍騎の視界は間を置かずに開けた。

龍騎は上空4000mほどの位置で投げ出されていた。しかし、特に慌てることなく周囲を見回すと、眼前には見た事のない風景が広がっていた。視線の先に広がる地平線

は、世界の果てを彷彿させる断崖絶壁に眼下に見えるのは巨大な天幕に覆われた未知の都市があった。

「……………まさか異世界に転移されるとは思わなかったな」

その光景に呆然とした龍騎はまだ上空にすることを忘れ、そのまま湖に大きい水柱を立てるのであった。

この日、箱庭に『出来損ないの陰陽師』が降り立ったのであった。

第一章

「……………転移場所が上空とはまた派手にやってくれるな。下が湖じゃなかったら死ぬところだったぞ」

そう言いながら、俺こと神崎龍騎は陸地に上がりながら濡れた服を乾かそうとポケッ卜から札を取り出す。勿論、札には加護を付与させているから濡れることはない。札に靈力を加え術式を発動させると、俺の周りから温かい風が吹いた。

その風が俺の服を乾かしていき、乾き終わった頃には役目が終えた札はそのまま発火して燃え尽きてしまった。

さてと……………、どうやらここに呼び出されたのは俺だけではないようだ。視線の先には俺と同じ年ぐらいの二人の金髪の少年と黒髪の少女が罵詈雑言を吐き捨てて、まだ湖の中にいる茶髪の少女が一人と三毛猫が一匹が陸地を目指し泳いでいた。三人とも

見た目は一般人だが、かなりの力を保有しているようだ。特にヘッドホンを付けた金髪の少年は、ずば抜けている。とりあえず情報を得るためにもあの二人に話しかけるとするか。

「し、信じられないわ！まさか問答無用で引き摺り込んだ挙句、空に放り出すなんて！」

「右に同じだクソツタレ。場合によっちゃその場でゲームオーバーだぜコレ。石の中に呼び出された方がまだ親切だ」

「いや、石の中に呼び出されたら身動き出来ないだろう……」

「俺は問題ない」

「そう。身勝手ね」

二人は互いに鼻を鳴らして服の端を絞り出す。後ろを振り返ってみると先ほどの茶髪の少女と三毛猫が岸に上がっていた。三毛猫は全身を震わせて水をはじき、少女も同

じように服を絞りながら、

「此処………、どこだろう？」

「さあな。まあ、世界の果てっぽいものが見えたし、どこぞの大亀の背中じゃねえか？」

「確実に此処は異世界だろうし、その可能性は否定はできないな」

茶髪の少女の眩きに金髪の少年が応え、俺がさらにそれを応える。まあ、流石に大亀の背中はないだろうけどな。そんな気配もないし。

適当に服を絞り終えた金髪の少年は軽く曲がつたくせっぱねの髪の毛を掻きあげながら俺達に質疑を問いかけてきた。

「まず間違いないだろうけど、一応確認しとくぞ。もしかしてお前達にも変な手紙が？」

「そうだけど、まずは『オマエ』って呼び方を訂正して。——私は久遠飛鳥よ。以後

は気を付けて。それで何故か既に服が乾いている貴方とこの猫を抱きかかえている貴女は？」

「……………春日部耀。以下同文」

「俺は神崎龍騎だ。服が乾いているのは企業秘密ということだ」

「そう。よろしく春日部さん、神崎君。最後に、野蛮で凶暴そうなその貴女は？」

「高圧的な自己紹介をありがとよ。見たまんま野蛮で凶暴な逆廻十六夜です。粗野で凶悪で快樂主義と三拍子そろった駄目人間なので、用法と用量を守った上で適切な態度で接してくれお嬢様」

「そう。取扱説明書をくれたら考えてあげるわ、十六夜君」

「ハハ、マジかよ。今度作つとくから覚悟しとけ、お嬢様」

心からケラケラと笑っている逆廻に傲慢そうに顔を背ける久遠さんに我関せずと無関心を装う春日部さん。

俺はそんな三人を見ながら頭の中で手に入った情報で今の状況を整理していた。どうやら俺を呼び出した理由は暗殺とかの類ではないようだ。まず、暗殺するには罫や上空からの転落死というのがお粗末すぎるし、他の三人を呼び出す動機がない。そうなる俺は三人と同じ理由でここまで転移させたのだろう。これは勘だが、おそらく俺や三人が保有している力を借りたくて異世界から呼び出してきたとしたら辻褃が合う。まあ、現段階では大体こんな感じだろう。後は呼び出してきた召喚者にも話を聞けばいいしな。

「で、呼び出されたはいいけどなんで誰もいねんだよ。この状況だと、招待状に書かれていた箱庭とかいうものの説明をする人間が現れるもんじゃねえのか？」

「そうね。なんの説明もないままでは動きようがないもの」

「……………。この状況に対して落ち着きすぎているのもどうかと思うけど」

「いや、それは春日部さんにも言えることだけどな？」

てか、本当に落ち着きすぎなんですかこの三人。普通、こういう時ってパニックになつたりとかするもんじゃないのか？それとも俺がおかしいのか？いや、パニックになりすぎて暴れられたり単独行動をしでかす奴らよりかはいいけどさ。

そんなことを考えていると、ふと逆廻が溜息交じりに呟いた。

「——仕方ねえな。こうなつたら、そこに隠れている奴にでも話を聞くか？」

逆廻の呟きに反応して草むらの物陰からガサッと物音が聞こえてきた。おいおい……、言い当てられたからって気を乱して物音なんて起こしたら隠れている意味ないだろうに……。まあ、全員気付いていたみたいだろうし最初から意味なんてなかったんだろうがな。

「なんだ、貴方も気付いていたの？」

「当然。かくれんぼじゃ負けなしだぜ？お前らも気付いていたんだろ？」

「気配がだだ漏れだしな。あんなの気付いてくださいと言っているもんだ」

「風上に立たれたら嫌でもわかる」

「……………へえ？面白いなお前ら」

そう言って軽薄そうに笑う逆廻だが目は全く笑っていない。他の二人も理不尽な招集を受けた腹いせに殺気のこもった冷やかな視線で物音が聞こえてきた方向に向けていた。当然、俺も上空4000mからのスカイダイビングにはかなりイラついているので草むらごと燃やしてやろうかと思っている。

しばらくすると、観念したのか草むらから十五、六歳に見えるウサ耳の少女が出て来た。扇情的なミニスカートにガーターベルトを着用しており、明らかにその手の方をウケを狙っていると思えない服装をしていた。ウサ耳少女はビクビクと震えながら

俺達を説得しようと言しかけてきた。

「や、やだなあ御四人様。そんな狼みたいに怖い顔で見られると黒ウサギは死んじやいますよ？ええ、ええ、古来より孤独と狼はウサギの天敵でございます。そんな黒ウサギの脆弱な心臓に免じてここは一つ穩便に御話を聞いていただけたら嬉しいでございますヨ？」

「断る」

「却下」

「お断りします」

「断固拒否する」

「あつは、取りつくシマもないですな♪」

俺達の返答に両手を上げ降参のポーズをとるウサ耳少女だが、その眼だけは冷静に俺達を値踏みしているのが分かる。反省の色が全く見えないので少し痛い目を見てもらおうとポケットに入っている札に手を掛けるが、春日部さんが不思議そうにウサ耳少女

の隣に立ったのでとりあえずお仕置きは後回しにするとしよう。

そして、ウサ耳少女の隣に立った春日部さんはそのまま黒いウサ耳を根っこから驚掴み、

「えい」

「フギャー！」

力いっぱい引つ張ったのであった。それより、ウサ耳少女よ。いくら痛かったからって女性がそんな悲鳴を出すのはどうかと思うんだが？てか、あれ本物だったんだな。

「ちよ、ちよつとお待ちを！触るまでなら黙って受け入れますが、まさか初対面で遠慮無用に黒ウサギの素敵耳を引き抜きに掛かるとは、どういう了見ですか!?!」

「好奇心の為せる業」

「自由にも程があります！」

「へえ？このウサ耳って本物なのか？」

春日部さんの手から離れたのは良かったものの、今度は逆廻が右から掴んで引つ張り、

「……………。じゃあ私も」

左は久遠さんが掴んで引つ張り出す。

「…:@p;:おいくjyhtgrふえdwさzdxcfvgbhñjmkっ!」

左右に力いっぱい引つ張られたウサ耳少女は、言葉にならない悲鳴を上げる。ウサ耳少女は必死に抗議をするが二人はお構いなしに引つ張り続ける。二人に抗議しても無駄だと理解したウサ耳少女は視線で俺に助けを求めてきた。それに気付いてしまった俺は溜息をつきながら、渋々とウサ耳少女のもとに近づいていく。その行動にウサ耳少

女が救世主が降臨したかのような視線で俺を見つめてくる。そして、俺はウサ耳少女の目の前まで接近し、今まで固く閉じていた口をゆっくりと開いた。

「……………なあ、ウサ耳少女よ。やっぱりその服装ってその手の方を狙って着ているのか？」

「裏切られたああああああああああつ!？」と絶望したような表情を浮かべるウサ耳少女。何を勘違いしてんだろうか？俺が受けた仕打ちに対して謝罪すらしていないのに許すはずがないだろ。情け？なにそれ、おいしいの？

「な、何ですかその手の方って！それと、私には黒ウサギといったちゃんとした名前が――」

「本当に外れないな、コレ」

「ええ。どうやら本物みたいね」

再度、ウサ耳少女こと黒ウサギのウサ耳が逆廻と久遠さんによつて今度は引きちぎれる勢いで引つ張られ、黒ウサギの絶叫が近隣に木霊したのであった。

そして、しばらく湖周辺では三人による黒ウサギのウサ耳いじりと一人の言葉責めと黒ウサギの悲鳴と絶叫が続くのであった。

☆☆☆
☆

「——あ、あり得ない。あり得ないのですよ。まさか話を聞いてもらうために小一時間も消費してしまうとは。学級崩壊とはきつとこのような状況を言うに違いないのです」

「いいからさっさと進めろ」

結局あの後、そろそろ此処の情報が欲しいのと流石に小一時間も経つと言葉責めも飽きてしまったので、三人を説得をして話を聞いてもらえる状況を作ることに成功したのであった。俺や他の三人は黒ウサギの前の岸部に座り込み、彼女の話聞くために耳を

傾ける。

黒ウサギは気を取り直して咳払いをし、両手を広げて、

「それではいいですか、御四人様。定例文で言いますよ？言いますよ？さあ、言いますよ！
ようこそ、 “箱庭の世界” へ！我々は御四人様にギフトを与えられた者達だけが参加できる『ギフトゲーム』への参加資格をプレゼンさせていただこうかと召喚いたしました
！」

「ギフトゲーム？」

「そうです！既に気付いていらつしやるでしょうが、御四人様は皆、普通の人間ではございません！その特異な力は様々な修羅神仏から、悪魔から、精霊から、星から与えられた恩恵でございます。『ギフトゲーム』はその “恩恵” を用いて競い合うためのゲーム。そしてこの箱庭の世界は強大な力を持つギフト保持者がオモシロオカシク生活できる為に造られたステージなのでございますよ！」

両手を広げて箱庭をアピールする黒ウサギ。すると、久遠さんが質問するために挙手をした。

「まず初歩的な質問からしていい？ 貴女の言う “我々” とは貴女を含めた誰かなの？」

「YES！ 異世界から呼び出されたギフト保持者は箱庭で生活するにあたって、数多とある “コミュニティ” に必ず属していただきます♪」

「嫌だね」

「面倒だな」

「属していただけます！ そして『ギフトゲーム』の勝者はゲームの “主催者”^{ホスト} が提示した賞品をゲットできるといってもシンプルな構造となっております」

「…………… “主催者” って誰？」

「様々ですね。暇を持て余した修羅神仏が人を試すための試練と称して開催されるゲー

ムもあれば、コミュニティの力を誇示するために独自開催するグループもございます。特徴として、前者は自由参加が多いですが「主催者」が修羅神仏なだけあって凶悪かつ難解なものが多く、命の危険もあるでしょう。しかし、見返りは大きいです。「主催者」次第ですが、新たな「恩恵」^{ギフト}を手にすることも夢ではありません。後者は参加のためにチップを用意する必要があります。参加者が敗退すればそれらはすべて「主催者」のコミュニティに寄贈されるシステムです」

「その「主催者」って誰にもなれるのか？」

「賞品さえ用意がすることさえできれば誰でもなれます。修羅神仏や「コミュニティ」は勿論のこと、商店街のご主人様でも「主催者」になることが出来ます」

「なるほどな……、じゃあチップは何を使うんだ？」

「それも様々ですね。金品・土地・利権・名誉・人間……そしてギフトを賭けあうことも可能です。新たな才能を他人から奪えばより高度なギフトゲームに挑むことも可能です。ただし、ギフトを賭けた戦いに負ければ当然——ご自身の才能も失われる

のであしからず」

黒ウサギは愛嬌たっぷりの笑顔に黒い影を見せる。……まあ、さっきの苛めを受けてからの挑発をしてくる度胸は認めるけど、それが俺達の癪に障ってまた同じ事の繰り返しになることは考えていないのか？そんなどうでもいいことが脳裏をよぎると、今度は久遠さんが挑発的な声音で問いかける。

「そう。なら最後にもう一つだけ質問させてもらっていいかしら？」

「どうぞどうぞ♪」

「ゲームそのものはどうやって始められるの？」

「コミュニティ同士のゲームを除けば、それぞれの期日内に登録していただければOK！商店街でも商店が小規模のゲームを開催しているのでよかったですら参加していただくさいな」

久遠さんは黒ウサギの発言に片眉をピクリとあげる。

「……………つまり『ギフトゲーム』とはこの世界の法そのもの、と考えてもいいかしら？」

久遠さんの問いに「お？」と驚く黒ウサギ。

「ふふん？中々鋭いですね。しかしそれは八割正解の二割間違いです。我々の世界でも強盗や窃盗は禁止ですし、金品による物々交換も存在しています。ギフトを用いた犯罪などもつてのほか！そんな不逞な輩は悉く処罰します——が、しかし！『ギフトゲーム』の本質は全く逆！一方の勝者だけが全てを手にするシステムです。店頭に置かれてある商品も、店側が提示したゲームをクリアすればタダで手にすることも可能だということですね」

「そう。中々野蛮ね」

「ごもつとも。しかし『主催者』は全て自己責任でゲームを開催しております。つまり奪われるのが嫌な腰抜けは初めからゲームに参加しなければいいだけの話でございま

す」

黒ウサギは一通りの説明を終えたのか、一枚の封書を取り出した。

「さて。皆さんの召喚を依頼した黒ウサギには、箱庭の世界における全ての質問に答える義務がございます。が、それら全てを語るには少々お時間がかかるでしょう。新たな同土候補である皆さんを何時までも野外に出しておくのは忍びない。ここから先は我らのコミュニケーションでお話させていただきたいのですが……よろしいですか？」

ふむ……、最低限知りたい情報は知ることができたが、まだ明かされていない重要な部分は何点かあるな。多分、聞かれると不味いものなのではぐらかしているんだろうが……別に今聞かなくてもいいことだし後にすることにしよう。

「待てよ。まだ俺が質問してないだろ」

今まで静聴していた逆廻が威圧的な声を上げて立ち上がる。顔を見ると、ずっと刻まれている軽薄な笑顔が無くなっていった。それに気付いた黒ウサギは、構えるように聞き

返した。

「……………どういった質問です？ルールですか？ゲームそのものですか？」

「そんなのはどうでもいい。腹の底からどうでもいいぜ、黒ウサギ。ここでオマエに向かつてルールを聞いただしたところで何かが変わるわけじゃねえんだ。世界のルールを変えようとするのは革命家の仕事であって、プレイヤーの仕事じゃねえ。俺が聞きたいの……………たった一つ、手紙に書いてあったことだけだ」

逆廻は視線を黒ウサギから外し、俺達三人を見回し、次に巨大な天幕によって覆われた都市に向ける。

逆廻は何もかも見下すような視線で一言、

「この世界は……………面白いか？」

『』

……俺としたことが一番聞いておかなきゃいけないことを忘れていたな。他の二人も無言で黒ウサギの返事を待つ。俺達を呼んだ手紙にはこう書かれていた。

『家族を、友人を、財産を世界の全てを捨てて箱庭に來い』と。

俺達は本当に全て捨ててこの箱庭に來たのだ。それに見合うだけの催し物があるのかどうかこそ、俺達にとって一番重要なことだった。

黒ウサギは一瞬、虚を突かれて呆然とするが、その表情はすぐに笑顔に変わっていき、

「——YES。『ギフトゲーム』は人を超えた者たちだけが参加できる神魔の遊戯。箱庭の外界より格段に面白いと、黒ウサギは保証いたします♪」

第二章

——箱庭二二〇五三八〇外門。ペリベット通り・噴水広場前。

「ジン坊っちゃーン！新しい方を連れてきましたよー！」

あれから黒ウサギのコミュニティまで案内することになり、黒ウサギが先導して俺達は巨大な天幕に覆われた未知の都市に向かった。しばらく歩き続けると都市の入口に着き、その入口の前では、小さな体躯に似合わないダボダボなローブを着た幼い少年が待ち構えていた。

「お帰り、黒ウサギ。そちらの三人が？」

「はいな、こちらの御四人様が——」

こちらに振り返る黒ウサギだが、ある事実が気が付くと固まりだした。そう、少年が言った通り、黒ウサギに付いてきているのは三人しかいないのだ。

「……………え、あれ？もう一人いませんでしたっけ？ちよつと目つきが悪くて、かなり口が悪くて、全身から『俺問題児！』ってオーラを放っている殿方が」

本人がいないからって酷い言いようだな黒ウサギよ。逆廻に知られたらまた苛められるぞ？

「ああ、十六夜君のこと？彼なら『ちよつと世界の果てを見てくるぜ！』と言って駆け出して行ったわ。あっちの方に」

久遠さんが黒ウサギの疑問に応えながら、上空4000mから見えた断崖絶壁のある方角を指した。街道の真ん中で呆然となっている黒ウサギは、ウサ耳を逆立てて俺達に問いだしてきた。

「な、なんで止めてくれなかったんですか！」

「〃止めてくれるなよ〃と言われたもの」

「せ、せめて説得ぐらいしてくれてもいいじゃないですか！」

「説得する前に駆け出していったから無理だった」

「ならどうして黒ウサギに教えてくれなかったのですか!？」

「〃黒ウサギには言うなよ〃と言われたから」

「嘘です、絶対嘘です！実は面倒くさかったただけでしょう御三人さん！」

「うん」

「当然だ」

それを聞いた黒ウサギは前のめりに倒れた。おそらく、新たな仲間ができることに胸を踊らせていた自分に自己嫌悪でもしているだろうな。まあ、慰める気は一片たりともないがな。いや、だって邂逅した直前にあんなことが起きたんだから俺達が問題児なのは分かり切ったことだろに、監視を疎かにこいつが悪いんだし。

そんな黒ウサギとは対照的に、目の前の少年は顔色を蒼白になっていき慌て出す。

「た、大変です！ “世界の果て”にはギフトゲームのため野放しにされている幻獣が」

「幻獣？ユニコーンとかガーゴイルみたいなやつか？」

「は、はい。ギフトを持った獣を指す言葉で、特に “世界の果て” 付近には強力なギフトを持ったものがあります。出くわせば最後、とても人間で太刀打ち出来ません！」

「うわっ、マジで？俺も逆廻の後を追いかければよかったぜ……………」

「あら、それは残念。もう彼はゲームオーバー？」

「ゲーム参加前にゲームオーバー？………斬新？」

「冗談を言っている場合じゃありません！」

茶化す俺達に少年は必死に事の重大さを訴えるが、正直どうでもいいので聞き流すことにした。

すると、さつきまで落ち込んでいた黒ウサギが溜息を吐きつつも立ち上がった。

「はあ………ジン坊ちゃん。申し訳ありませんが、御三人様のご案内をお願いしてもよろしいでしょうか？」

「わかった。黒ウサギはどうする？」

「問題児を捕まえに参ります。事のついでに——『箱庭の貴族』と謳われるこのウサギを馬鹿にしたこと、骨の髄まで後悔させてやります」

悲しみから立ち上がった黒ウサギは怒りのオーラを全身から噴出させ、艶のある黒髪が淡い緋色に染まっていく。外門めがけて空中高く跳び上がり、外門の脇にあった彫像を次々と駆け上がり、外門の柱に水平に張り付き、

「一刻程で戻ります！ 皆さんはゆっくりと箱庭ライフを御堪能くださいませ！」

そう言って黒ウサギは、淡い緋色の髪を戦慄かせ踏みしめた門柱に亀裂が入り、そのまま弾丸のような跳躍した黒ウサギはあつという間に俺達の視界から消え去っていった。

跳躍により巻き上がった風から髪の毛を庇う様に押さえている久遠さんが呟いた。

「……………。箱庭の兎は随分速く跳べるのね。素直に感心するわ」

「ウサギ達は箱庭の創始者の眷属。力もそうですが、様々なギフトの他に特殊な権限も持ち合わせた貴種です。彼女なら余程の幻獣と出くわさない限り大丈夫だと思っ

すが……………」

「なら、大丈夫だろ。あつちの方角に特別に強い力も感じないし……………」

それに多分、逆廻はかなりの実力者だろうから何か起こっても問題はないだろ。

「黒ウサギも堪能くださいと言っていたし、御言葉に甘えて先に箱庭に入るとしましう。エスコートは貴方がしてくださいさるのかしら？」

「え、あ、はい。コミュニティのリーダーをしているジン||ラッセルです。齢十一になつたばかりの若輩ですがよろしくお願いします。三人の名前は？」

「久遠飛鳥よ。後、ペンダントをしている男性とそこで猫を抱えているのが」

「春日部耀」

「俺は神崎龍騎。まあ、よろしくな」

少年ことジンが礼儀正しく自己紹介をし、久遠さんと春日部さんもそれに倣って一礼する。俺はそういうのは性に合わないので片手を上げる程度で済ましている。

……………それにしても、この子がリーダーか。となると、俺の予想が正しければ黒ウサギが意図的に俺達に隠していたことって、もしかすると――。

「さ、それじゃあ箱庭に入りましょう。まずはそうね。軽い食事でもしながら話を聞かせてくれると嬉しいわ」

おっと、久遠さんとジンが先に箱庭の外門の方に向かっていったな。この疑問はジンに聞けば分かることだし、俺も二人の後についていきますか。

「じゃあ、行きますか。春日部さん」

「……………うん」

俺と同じく置いてかれた春日部さんと共に久遠さん達の後を追いかけるように箱庭の外門をくぐるのだった。

☆

——箱庭二一〇五三八〇外門・内壁。

俺、久遠さん、春日部さん、ジン、三毛猫の四人と一匹は石造りの通路を通り、箱庭の幕下を出ると頭上から眩しい光が降り注いできた。……………どういうことだ？確か俺たちは外から天幕に覆われていた街に入っていたはずなのに何故太陽が見えるんだ？

「……………本当だ。外から見たときは箱庭の内側なんて見えなかったのに」

そうなのだ。俺達が召喚された上空から見たときは箱庭の町並みなんて見えなかったのに、都市の天井には太陽の姿が現していた。……………なんか特殊な力や物質でも使っているのか？

「箱庭を覆う天幕は内側に入ると不可能になるんですよ。そもそもあの巨大な天幕は太陽の光を直接受けられない種族のために設置されていますから」

うん？ということは吸血鬼みたいな存在でもいるのか？一応、此処は異世界だからいてもおかしくはないけど。

俺と同じことを考えていたのか、久遠さんが青い空を見上げながら、ピクリと眉を上げ皮肉そうに言う。

「それはなんとも気になる話ね。この都市には吸血鬼でも住んでいるのかしら？」

「え、居ますけど」

「……………。そう」

ジンの即答になんとも複雑そうな顔をする久遠さん。まあ、確かに危険そうな種族が同じ街に住むことができるとは思えないよな。

その隣では、春日部さんが抱えていた三毛猫が春日部さんの腕から下りると、噴水広場を見回している。

「ニャー」

「うん。そうだね」

「あら、何か言った？」

「……………。別に」

……………ん？今、春日部さんが三毛猫と会話したように見えたのだが気のせいか？春日部さんも特に何も言わないし……………やっぱり、聞き間違いだったか？

久遠さんもそれ以上は追求せず、目の前で賑わう噴水広場に目を向ける。俺も噴水広場の周辺を見回すと、白く清潔感の漂う洒落た感じのカフェテラスがいくつもあつた。

………そういえば飯も食わないでこの世界に来たからお腹が減ってきたな。早く何か腹を満たすものが食いたいな。

「お勧めの店はあるかしら？」

「す、すいません。段取りは黒ウサギに任せていたので………よかつたらお好きな店を選んでください」

「おっ！太っ腹じゃねえか。じゃあ、あそこにある店に行こうぜ」

皆も特に異論がなかったので、俺が適当に決めた「六本傷」の旗を掲げるカフェテラスに四人と一匹が座る。

すると、注文を取るために店の奥から素早く猫耳の少女が飛び出してきた。

「いらっしやいませー。御注文はどうしますか？」

「えーと、紅茶と緑茶を二つずつ。あと軽食にコレとコレと」

「ニャオニャ」

「はいはい。ティーセット四つにネコマンマですね」

……………ん？今、誰がネコマンマを頼んだのだ？久遠さんの注文にはそんなもん入って
いなかったし、春日部さんもジン、当然俺も喋っていない。久遠さんもジンも不可解そ
うに首を傾げるが、それ以上に隣にいる春日部さんが信じられない物を見るような目で
驚いていた。

「三毛猫の言葉、分かるの？」

「そりや分かりますよー私は猫族なんですから。お歳のわりに随分と綺麗な毛並みの旦那
さんですし、ここはちよっぴりサービスもさせてもらいますよー」

……………ということは、ネコマンマを注文したのはこの三毛猫なのか。あの聞き方だと

春日部さんは三毛猫と喋れるみたいだ。どうやら春日部さんと三毛猫が会話していたように見えたのは気のせいではなかったんだな。

「ニャオニャ、ニャニャオニャオニャオニャオ」

「やだもーお客さんつたらお上手なんだから♪」

……………会話の内容が気になる。翻訳のギフトが欲しくなってきたな。異世界なんだしこのような言葉が通じない種族がいそうだしな。

俺の隣にいる春日部さんは店内に戻っていった猫娘の後ろ姿を見送った後、嬉しそうに三毛猫を撫でる。

「……………箱庭つてすごいね、三毛猫。私以外に三毛猫の言葉が分かる人がいたよ」

「ニャオー」

「ちよ、ちよつと待つて。貴女もしかして猫と会話ができるの?」

動揺した声の久遠さんの問いに、春日部さんが頷いて返す。久遠さんの隣にいるジンも興味深そうに質問を続けた。

「もしかして猫以外にも意思疎通は可能ですか?」

「うん。生きているなら誰とでも話は出来る」

「へえ……?じゃあそこら辺にいる鳥とか幻獣とか会話出来るのか?」

「うん。きつと出来……る?ちよつと後者は試したことがないから分からないけど……ええと、鳥で話したことがあるのは雀や鷺や不如帰ほととぎすぐらいだけど……ペンギンがいけたからきつとだいじよ」

「ペンギン!?!」

「う、うん。水族館で知り合った。他にもイルカ達とも友達」

結構便利な能力を持つているだな。だが、果たしてその程度だけの力なのだろうか？
まず俺達の力が必要だと前提として、その程度の力だけで召喚されるだろうか？俺なら
もつと強い力の持ち主かなにか一つでも群を抜いている人材を呼び出しているだろう。
そうになると、春日部さんのあの力は副産物的な力だと考えていた方が良さそうだな。

「し、しかし全ての種と会話が可能なら心強いギフトですね。この箱庭において幻獣と
の言語の壁というのはとても大きいですから」

「そうなんだ」

「はい。一部の猫族やウサギのように神仏の眷属として言語中枢を与えられていれば意
思疎通は可能ですけど、幻獣達はそれぞれものが独立した種の一つです。同一種か相応
のギフトがなければ意思疎通は難しいというのが一般です。箱庭の創始者の眷属に当
たる黒ウサギでも、全ての種とコミュニケーションをとることはできないはずですし」

……本格的に翻訳のギフトが欲しくなってきた。だいぶ前にある存在に交渉を持ち込んだのだが、言葉が通じなくて何故か敵と勘違いされ、そのまま戦闘になってしまったんだよな……。あの時は俺もまだ未熟で大変だったな……。

「……………？どうしたの、神崎君？そんな遠い目して」

「いや、なんでもない。昔のことを思い出してただけだ」

「そう？……………それにしても春日部さんは素敵な力があるのね。」

久遠さんが笑いかけると、困ったように頭を掻く春日部さん。だが、対照的に久遠さんは憂鬱そうな声と表情で呟く。久遠さんとは出会って数時間経っただけなのだが、それでも久遠さんの今の表情はらしくないと思った。

「久遠さんは」

「飛鳥でいいわ。よろしくね春日部さん」

「あ、俺も龍騎でいいぜ。その代わりに俺も名前で呼んでもいいか？さん付けするのあんまり慣れていないからさ。久遠さんも俺のことは龍騎って呼んでくれないか？」

「う、うん。別にいいけど」

「私も別にかまわないわよ」

「おつ、サンキュー。じゃあ、よろしくな耀、飛鳥」

「よろしくね、龍騎君」

「……………よろしく。飛鳥と龍騎はどんな力を持っているの？」

「私？私の力は……………まあ、酷いものよ。だって」

「おんやあ？誰かと思えば東区部ほ最底辺コミュ “名無しの権兵衛” のリーダー、ジン

君じゃないですか。今日はオモリ役の黒ウサギは一緒じゃないのですか？」

飛鳥の声を重ねるかのように品のない上品ぶった声がジンを呼んでいる。顔だけ振り返ると、2mを超える巨体に似合っていないピチピチのタキシードを着た男がいた。どうやらジンの知り合いのようだな。

「僕らのコミュニティは『ノーネーム』です。『フォレス・ガロ』のガルド＝ガスパー」
「黙れ、この名無しめ。聞けば新しい人材を呼び寄せたらしいじゃないか。コミュニティの誇りである名と旗印を奪われてよくも未練がましくコミュニティを存続させるなどできたものだ——そう思わないかい、紳士方にお嬢様方」

ガルドはそう言いながら、俺たち四人が座るテーブルの空席に勢いよく腰を下ろした。俺や飛鳥と耀に愛想笑いを向けてくるが、不快な態度をしてくる奴に礼儀正しく返す気は俺にはない。飛鳥と耀も同じく冷ややかな態度で返す。

「失礼ですけど、同席を求めるならばまず氏名を名乗ったのちに一言添えるのが礼儀で

はないかしら?」

「それと俺たちが喫茶店に入ってから遠くから監視をしてたのも失礼じゃねえか?」

俺がそう言うと、ここにいる全員が驚いた表情を浮かべ、特にガルドは何故バレた!?!と言っているかのような表情になっている。まさかこいつバレていないと思っていたのか?あの程度の監視なんかさっきの黒ウサギ以下だぞ。今回は街中で人が多かったせいなのか飛鳥と耀は全然気付かなかったようだけどな。

「っ!?それは大変失礼しました。この名無しが連れてきた御方達がどのような人物なのか気になって遠目から伺わせてもらいました。不快と思われていたなら謝罪させてもらいます。私は箱庭上層に陣取るコミュニティ「六百六十六の獣」の傘下である」

「烏合の衆の」

「コミュニティのリーダーをしている、ってマテやゴラア!!誰が烏合の衆だ小僧オオ!!」

ジンの横槍をという名の挑発を入れられたガルドは怒鳴り声を上げながら激変していく。口が耳元まで大きく裂け、肉食獣のような牙とギョロリと剥かれた瞳が激しい怒りとともにジンに向けられる。こいつ、人間ではないとは思っていたが獣人だったのか。てか、ガルド沸点低くね？

「口慎めや小僧オ……………紳士で通っている俺にも聞き逃せねえ言葉はあるんだぜ……………？」

「森の守護者だったころの貴方なら相応に礼儀で返していたでしょうが、今の貴女はこの二二〇五三八〇外門付近を荒らす獣にしか見えません」

「ハッ、そういう貴様は過去の栄華に縋る亡霊と変わらんだろうがッ。自分のコミュニケーションがどういふ状況に置かれてんのか理解できてんのかい？」

「ハイ、ちよつとストップ」

険悪な二人を遮るように手を上げて仲裁したのは飛鳥だった。

「事情はよくわからないけど、貴方達二人の仲が悪いことは承知したわ。それを踏まえ
たうえで質問したいのだけど——」

飛鳥が鋭く睨む。だが、睨む相手はガルドではなく、

「ねえ、ジン君。ガルドさんが指摘している、私達のコミュニティが置かれている状況
……………というものを説明してただける?」

「そ、それは」

飛鳥の問いにジンが明らかに動揺しているのが分かる。その動揺を逃さず飛鳥は一
気に畳み掛ける。

「貴方は自分のことをコミュニティのリーダーと名乗ったわ。なら黒ウサギと同様に、
新たな同士として呼びだした私達にコミュニティとはどういうものなのかを説明する
義務があるはずよ。違うかしら?」

追求する声は静かに、されどナイフのような切れ味でジンを責め立てる。それを見ていたガルドは獣の顔から人に戻し、含みのある笑顔と上品ぶった声音で、

「レディ、貴女の言う通りだ。コミュニティの長として新たな同士に箱庭の世界のルールを教えるのは当然の義務。しかし彼をそれをしたがらないでしょう。よろしければ、『フォレス・ガロ』のリーダーである私が、コミュニティの重要性和小僧——ではなく、ジン＝ラッセル率いる『ノーネーム』のコミュニティを客観的に説明させていただきますが」

……………さつきの険悪さを見た後だと客観的に説明できるのか疑問だが、ジンと黒ウサギがそのことを隠していたこともそうだが俺達はまだ箱庭についてのことを詳しく知らないのも事実。ここは素直に話を聞いておいた方がよさそうだな。

「……………そうね。お願いするわ」

「承りました。まず、コミュニティとは読んで字のごとく複数名で作られる組織の総称

です。受け取り方は種によって違うでしょう。人間はその大小で家族とも組織とも国ともコミュニティを言い換えますし、幻獣は「群れ」とも言い換えられる」

「それぐらいわかるわ」

「はい、確認までに。そしてコミュニティは活動する上で箱庭に「名」と「旗印」を申告しなければなりません。特に旗印はコミュニティの縄張りを主張する大事な物。この店にも大きな旗印が掲げられているでしょう？あれがそうです」

ガルドはそう言いながら、カフェテラスの店頭に掲げられている「六本傷」が描かれた旗を指さす。

「六本の傷が入ったあの旗印は、この店を経営するコミュニティの縄張りであることを示しています。もし自分のコミュニティを大きくしたいと望むのであれば、あの旗印のコミュニティに両者合意で『ギフトゲーム』を仕掛ければいいのです。私のコミュニティは実際にそうやって大きくしましたから」

自慢げに語るガルドは胸に刻まれた虎の紋様をモチーフにした刺繍を指さす。確かそのマークはここいら周辺の商店や建造物に飾られていたな。

「その紋様が縄張りを示すというのなら……この近辺はほぼ貴方達のコミュニティが支配していると考えていいかしら？」

「ええ。残念なことはこの店のコミュニティは南区画に本拠があるため手出しできませんが。この二一〇五三八〇外門付近で活動可能な中流コミュニティは全て私の支配下です。残すは本拠が他区か上層にあるコミュニティと——奪うに値しない名も無きコミュニティぐらいです」

嫌味を込めた笑いを浮かべるガルド。ジンは顔を背けたままだが悔しそうにしているのが見ても分かるぐらいの雰囲気伝わってくる。……これは決定的だな。どうやら俺の推測通りみたいだな。

そうなる、ジンのコミュニティに侵されている状況は——。

「さて、ここからがレディ達のコミュニティの問題。実は貴女達の所属するコミュニティは」

「弱小のチームか何かしらの理由で衰退したチーム………違うか？」

疑念が確信に変わり、俺は自分の推測が当たっているか確かめるため口を挟むのであった。

第三章

俺の言葉にまた全員が驚いた表情を浮かべる。先ほどと違うのはガルドが感心したように、ジンは顔が蒼白になっていくつてところだ。

「先ほどの私の監視を見破ったことといい、貴方は観察眼にとっても優れていらつしやる。将来、必ず『ギフトゲーム』で大活躍出来るプレイヤーとなるでしょう」

「お世辞なんかいらん。それでどつちが正解なんだ？俺は後者だと睨んでいるんだが」

「ちよ、ちよつと待ちなさい！龍騎！いつ、ジン君のコミュニケーションの状況に気付いていたの!？」

俺の言葉に慌てて飛鳥が俺に詰め寄ってくる。耀も声にはだしてないが気になるようにココココと頷いている。

「私も少々気になります。良ければ御説明をお願いしたいのですが？」

「簡単な話だ。まず俺達は組織を強化するために召喚された。そう考えれば黒ウサギの今までの行動や、俺や逆廻がコミニティに入るのを拒否した時に本気で怒っていたことも辻褄が合う」

「……………そうかな？それだけじゃ」

「耀が不思議そうに首を傾げる。確かに辻褄が合うが断言出来る事は出来ないと思っているのだろう。」

俺は耀の言葉に頷き、親指と小指を曲げ“3”を耀の目の前に突き出す。

「確かにこれだけでは俺も確信までにはいかなかっただろうな。だが、ある三つの要素が疑念から確信に変わったんだ」

「ある三つの要素？」

「ああ。まず一つ目は、黒ウサギが俺達に自分が所属しているコミュニティを紹介しなかった点だ。これから同士になるというのの後で説明するとしてもまったく話をしないのは明らかにおかしい。ということは、俺達にコミュニティの状況を知られると不味いってことになる」

「……………そういえばそうよね。此処に来るまで数時間以上かかったのにコミュニティについてのことなんて世間話程度すらでていなかったわ」

飛鳥も改めて考えると思いあたる節があったようだ。俺は飛鳥に頷きながら説明を再開する。

「そういうことだ。二つ目にガルドが言っていた“名無し”という名称。ジンは“ノーネーム”と訂正していたが、コミュニティの話聞く限り、“ノーネーム”という名は蔑称であることが分かる。その上、“過去の栄華に縋る亡霊”とも言っていたことから弱小チームであると確信し、ギフトゲームに敗れて衰退した可能性が浮かび上がった」

「……………確かにそれだと辻褃が合う」

耀もうんうんと頷きながら俺の推測に納得していく。その小動物のような仕草を見てちよつと可愛いと思いつつも俺は最後のトドメとばかりにジンを指差した。

「最後の三つ目。それは——ジン、お前自身だ」

「ほ、僕がですか!？」

まさか自分のせいでバレてしまったと思つてもみなかつたのか凄く驚愕している。そんなジンを無視して俺は畳み掛けるように言葉を放つ。

「そうだ。俺達と会つた時、自分のことをリーダーと名乗つた。何故黒ウサギがリーダーではなくお前なんだ？ 知識はそれなりにあるみたいだが、ただの子供であるお前がリーダーであることはおかしすぎる。黒ウサギが何かしらの理由でリーダーになれないとしても代わりなら誰でもなれるはず。それも出来ないことから、コミュニティは壊滅寸前の状態。しかも、『ギフトゲーム』に参加できるのはお前と黒ウサギだけ。他のメ

ンバーはおそらく参加出来ない女子供のみ——違うか？」

俺の推測が終わると、静寂に包まれる。しばし静寂が続いた後、その静寂を壊したのはガルドによる拍手だった。

「いやはや、少ない情報からここまで答えられるとは驚きました」

「その言い方だと俺の推測は当たっていたみたいだな」

「ええ。貴方の推測は全て事実であります。『ノーネーム』とは『名』が無いその他大勢のことを指します。ギフトゲームに敗れたジンのコミュニティは『名』と『旗印』に続いて、中核を成す仲間達は一人も残っていないんですよ。今、残っているメンバーはジンと黒ウサギ以外は十歳以下の子供達ばかりで、もう崩壊寸前のコミュニティなんです。……しかし、貴方達の所属するコミュニティは——数年前まで、この東区画最大手のコミュニティでした」

「へえー、そこまで実力があつたのか」

「とはいえリーダーは別人でしたけど。ジン君とは比べようもない優秀な男だったそうですね。ギフトゲームにおける戦績で人類最高の記録を持っていた、東区画最強のコミュニティだったそうだから」

ガルドが一転してつまらなそうな口調で語る。多分、現在この付近で最大手のコミュニティを保持しているこいつにとって心底どうでもいい話だからだろう。

「彼は東西南北に分かれたこの箱庭で、東のほかに南北の主軸コミュニティとも親交が深かった。いやホント、私はジンの事は毛嫌いしてますがね。これはマジすげえんですよ。南区画の幻獣王格や北区画の悪鬼羅刹が認め、箱庭上層に食い込むコミュニティだったというのは嫉妬を通り越して尊敬してやってもいいぐらいには凄いです。——まあ、先代は、ですが」

「……………」

「“人間”の立ち上げたコミュニティではまさに快拳ともいえる数々の栄華を築いたコ

「コミュニティはしかし！……彼らは敵に回してはいけないモノに目を付けられた。そして彼らはギフトゲームに参加させられ、たった一夜で滅ぼされた。『ギフトゲーム』が支配するこの箱庭の世界、最悪の天災によって」

「天災？」

飛鳥と耀は同時に聞き返した。まあ、ただの天災が巨大な組織を滅ぼしたとはあまりにも不自然だよな。

「これは比喩にあらず、ですよレディ達。彼らは箱庭で唯一最大にして最悪の天災——
——俗に

「魔王」と呼ばれる者達です」

「魔王………ね。それはまた大層な名だこと」

「魔王は『主^{ホスト}催者^{マスター}権限』という箱庭における特権階級を持つ修羅神仏で、彼らにギフトゲームを挑まれたら最後、誰も断ることができない。ジンのコミュニティは『主催者権

限”を持つ魔王のゲームに強制参加させられ、コミュニティとして活動していく為に必要な全てを奪われてしまったのですよ」

「なるほどね。大体理解したわ。つまり“魔王”というのはこの世界で特権階級を振り回す神様 e t c. を指し、ジン君のコミュニティは彼らの玩具として潰された。そういうこと？」

「そうですレディ。神仏というのは古来、生意気な人間が大好きですから。愛しすぎた挙句に使い物にならなくなることはよくあることなんですよ」

う。 ガルドはそう言いながらカフェテラスの椅子の上で大きく手を広げて皮肉そうに笑う。

「名も、旗印も、主力陣の全てを失い、残ったのは膨大な移住区画の土地だけ。もしもこの時に新たなコミュニティを結成していたなら、前コミュニティは有終の美を飾っていたんでしようがね。今や名誉も誇りも失墜した名も無きコミュニティの一つでしかありません」

「……………」

「そもそも考えてもみてくださいよ。名乗ることを禁じられたコミュニティに、一体どんな活動ができますか？商売ですか？主催者ですか？しかし名も無き組織など信用されません。ではギフトゲームの参加者ですか？ええ、それならば可能でしょう。では優秀なギフトを持つ人材が、名誉も誇りも失墜させたコミュニティに集まるでしょうか？」

「無いな。普通、誰も加入したいとは思わないだろうな」

「そう。彼は出来もしない夢を掲げて過去の栄華に縋る恥知らずな亡霊でしかないのですよ」

品の無い、豪快な笑顔でジンとコミュニティをあざ笑うガルド。ジンは顔を真っ赤にして必死に耐えていることが分かる。反論したいが事実であるため出来ないのだろう。

「もっと言えばですね。彼はコミュニティのリーダーとは名ばかりで殆どリーダーとし

て活動はしていません。コミュニティの再建を掲げていますが、その実態は黒ウサギにコミュニティを支えられてもらうだけの寄生虫」

「……………」

「私は本当に黒ウサギの彼女が不憫でなりません。ウサギと言えば『箱庭の貴族』と呼ばれるほど強力なギフトの数々を持ち、何処のコミュニティでも破格の待遇で愛でられるはず。コミュニティにとってウサギを所持しているというのはそれだけで大きな『箔』が付く。なのに彼女は毎日毎日糞ガキ共の為に身を粉にして走り回り、僅かな路銀で弱小コミュニティをやり繰りしている」

「……………そう。事情は分かったわ。それでガルドさんは、どうして私達にそんな話を丁寧に話してくれるのかしら？」

飛鳥は含みのある声で問い、ガルドはそれを察して笑う。

「単刀直入に言います。もしよろしければ黒ウサギ共々、私のコミュニティに来ません

か？」

「な、何を言い出すんですガルドⅡガスパー!?」

ガルドの勧誘にジンは怒りのあまりテーブルを叩いて抗議するが、ガルドは寧猛な瞳でジンを睨み返す。

「黙れ、ジンⅡラッセル。そもそもテメエが名と旗印を新しく改めていれば、最低限の人材はコミュニティに残っていたはずだろうが。それを貴様の我が儘でコミュニティを追い込んでおきながら、どの顔で異世界から人材を呼び出した」

「そ……………それは」

「何も知らない相手なら騙しとおせるとでも思ったのか？その結果、黒ウサギと同じ苦労を背負わせるってんなら……………こつちも箱庭の住人として通さなきゃならねえ仁義があるぜ」

先ほどと同じ獣の瞳に似た鋭利な輝きに貫かれて、僅かに怯み顔を俯かせるジン。葉をも継る思いで俺達を騙してでもコミュニティに入れたかつたんだろう。話を聞く限り、ジンのコミュニティが崖っぷちな状況みたいだしな。

「……………で、どうですかジエントルマンにレディ達。返事はすぐとは言いません。コミュニティに属さずとも貴女達には箱庭で三十日間の自由が約束されています。一度、自分達を呼び出したコミュニティと私達『フォレス・ガロ』のコミュニティを視察し、十分に検討してから——」

「結構よ。だってジン君のコミュニティで間に合っているもの」

は？とジンとガルドは飛鳥の顔を窺う。だが、飛鳥自身は何事もなかったように耀に笑顔で話しかける。

「春日部さんは今の話はどう思う？」

「別に、どっちでも。私はこの世界に友達を作りに来ただけなもの」

「あら意外。じゃあ私が友達一号に立候補していいかしら？ 私達って正反対だけど、意外に仲良くやっていけそうな気がするの」

「うわっ、抜け駆けだ！じゃあ、俺は友達二号に立候補してもいいか？」

飛鳥は自分の髪を触りながら、俺は手を上げながら耀に問う。少し恥ずかしがっている飛鳥を見ると、あまりこのようなやり取りをしたことないようだ。耀は無言でしばらく考えた後、小さく笑って頷いてくれた。

「……………うん。飛鳥と龍騎は私の知る人達とちよつと違うから大丈夫かも」

「よし！これから友達としてよろしくな、耀、飛鳥」

「……………うん」

「ええ。よろしくね」

早速、箱庭に來た甲斐があつたな。俺も職業柄からそんなに友達はいなかつたんだよなあ。二人共美少女だし、これからの箱庭生活が楽しみだ♪

俺達が盛り上がっている中、空気を読まずガルドが顔をひきつらせ、取り繕うように咳払いをして問いだしてきた。

「失礼ですが、理由を教えてください？」

「だから、間に合っているのよ。春日部さんは聞いての通り友達を作りに來ただけだから、ジン君でもガルドさんでもどちらでも構わない。そうよね？」

「うん」

「次に龍騎君は——」

「明らかに俺達をコミュニケーションニテイに入れようとする魂胆が気に食わねえ。ジンのコミュニケーション

ティを悪印象ばかりの状況を、自分のコミュニケーションは好印象を与えようとしているのが見え見えなんだよ。その上に黒ウサギが不憫？勝手に決めつけんな自称虎紳士（笑）。嫌だったらとうの昔にジンのコミュニケーションから出て行くだろ。どうせお前も黒ウサギの「箔」が欲しいだけだろうが。それに仁義だあ？さつきから人のコミュニケーションを蔑しての奴がよくそんなことが言えるな。極めつけには、交渉術も下手くそで挑発も躲せないほどの短気、人を見下し礼儀もなっていないと言いつつ出したらキリがないほど欠点を持つており、怪しい行動をしているリーダーのコミュニケーションなんか誰が行きたがるか」

「そして私、久遠飛鳥は——裕福だった家も、約束された将来も、おおよそ人が望みうる人生の全てを支払って、この箱庭に來たのよ。それを小さな小さな一地域を支配しているだけの組織の末端として迎えてやる、などと慇懃無礼に言われて魅力的に感じるとでも思ったのかしら。だとしたら自身の身の丈を知った上で出直して欲しいものね、このエセ虎紳士」

俺と飛鳥はピシヤリと言いつ切る。ガルドは俺達の物言いに對して怒りで体を震わせている。

「お…………お言葉ですがレデ」

「黙りなさい」

何か言い返そうとしたガルドの口が不自然な形で勢いよく閉じられた。へえ……………飛鳥の力は支配系統の力か。しかも、ガルドの様子をみるとかなり強力みたいだな。混乱したように口を開閉させようともがいているが、全く開く様子がないし。

「……………!?!……………!?!」

「私の話はまだ終わっていないわ。貴方からはまだまだ聞きださなければいけないことがあるのだもの。貴方はそこに座って、私の質問に応え続けなさい」

また飛鳥の言葉に力が宿り、椅子に罫が入るほどの勢いで座り込んだ。その様子に驚いた先ほどの猫耳店員が急いでこつちに駆け寄ってきた。

「お、お客さん！本店で揉め事は控えてください——」

「ちようどいいわ。猫の店員さんも第三者として聞いていつて欲しいの。多分、面白いことが聞けるはずよ」

首を傾げる猫耳店員を制して、飛鳥は言葉を続ける。

「貴方はこの地域のコミュニティに『両者合意』で勝負を挑み、そして勝利したと言っていたわ。だけど、私が聞いたギフトゲームの内容は少し違うの。コミュニティのゲームとは『主催者』とそれに挑戦する者が様々なチップを賭けて行う物のはず。……：……ねえ、ジン君。コミュニティそのものをチップにゲームをすることは、そうそうあることなの?」

確かに生きるためにコミュニティには必ず所属しなければならないと黒ウサギも言っていた。生命線となるコミュニティを簡単に賭けられるものではないはずだ。なら、ガルドが何かしら小細工をして強制的にゲームに参加させたとしか考えれない。

「や、やむを得ない状況なら稀に。しかし、これはコミュニティの存続を賭けたかなりの

レアケースです」

聞いていた猫耳店員も同意するように頷いている。

「そうよね。訪れたばかりの私達でさえそれぐらい分かるもの。そのコミュニティ同士の戦いに強制力を持つからこそ“主催者権限”を持つ者は魔王として恐れられているはず。その特権を持たない貴方がどうして強制的にコミュニティを賭けあうような大勝負を続けられることができたのかしら。教えてくださる？」

ガルドは悲鳴を上げそうな顔になるが、口は意に反して言葉を紡ぎだす。

「き、強制させる方法は様々だ。一番簡単なのは、相手のコミュニティの女子供を攫って脅迫すること。これに動じない相手は後回しにして、徐々に他のコミュニティを取り込んだ後、ゲームに乗らざるを得ない状況に圧迫していった」

「まあ、そんなところでしよう。貴方のような小物らしい堅実な手です。けどそんな違法で吸収した組織が貴方の下で従順に働いてくれるのかしら？」

「各コミュニティから、数人ずつ子供を人質に取ってある」

それを聞いた飛鳥の取り巻く雰囲気には嫌悪感が滲み出ており、コミュニティには無関心な耀も不快そうに眼を細める。

……………どうやら思った通りの外道だな。そうになると、こいつの外道っぷりから推測するとその子供達はもう——。

「……………そう。ますます外道ね。それで、その子供達は何処に幽閉されているの?」

「もう殺した」

その場の空気が瞬時に凍りつく。

……………ちつ。なんでこういう時まで俺の推測が当たるかね……………。真相が分かった以上、こんな外道をさっさと倒したいところだが、こいつに絶望を与える良い案が浮か

んだので今は我慢するでしょう。

「初めてガキ共を連れてきた日、泣き声が頭にきて思わず殺した。それ以降は自重しようと思っていたが、父が恋しい母が愛しいと泣くのでやっぱりイライラして殺した。それ以降、連れてきたガキは全部まとめてその日のうちに始末することにした。けど身内のコミュニケーションの人間を殺せば組織に亀裂が入る。始末したガキの遺体は証拠が残らないように腹心の部下が食」

「黙れ」

またしてもガルドの口が先ほど以上の勢いで閉ざされた。飛鳥の声は先ほど以上に凄みを増し、魂ごと驚拵むような勢いでガルドを締め付ける。飛鳥だけではなくここにいる全員が鋭い視線でガルドを睨みつけている。

「素晴らしいわ。ここらまで絵に描いたような外道とはそうそう出会えなくてよ。流石は

人外魔境の箱庭の世界といったところかしら……ねえジン君？」

「彼のような悪党は箱庭でもそうそういません」

ジンは飛鳥の冷ややかな視線に慌てて否定する。

「そう？それはそれで残念。——ところで、今の証言で箱庭の法がこの外道を裁くことはできるかしら？」

「厳しいです。吸収したコミュニティから人質をとったり、身内の仲間を殺すのは勿論違法ですが……裁かれるまでに彼が箱庭の外に逃げ出してしまえば、それまでです」

それはある意味裁きともいえるだろう。リーダーのガルドがコミュニティから去れば、〃フォレス・ガロ〃は瓦解するのは確実であろう。……だが、その程度で許すほど俺は甘くない。

「そう。なら仕方がないわ」

飛鳥が苛立ちしげに指を鳴らす。すると、ガルドを縛り付けていた力が霧散していくのを感じたので飛鳥は拘束を解いたのだろう。体の自由が戻ったガルドは怒り狂い、カフエテラスのテーブルを勢いよく砕き、

「(っ)……………この小娘がアアアアアアアア!!」

雄叫びを上げ、ガルドの体が激変していく。巨躯を包むタキシードが膨張する後背筋で弾け飛び、体毛が変色していき黒と黄色のストライプ模様が浮かび上がる。

「テメエ、どういうつもりか知らねえが……………俺の上に誰が居るか分かってんだろくなア!箱庭第六六六外門を守る魔王が俺の後見人だぞ!!俺に喧嘩を売るってことはその魔王にも喧嘩を売るってことだ!その意味が」

「黙りなさい。私の話はまだ終わっていないわ」

また勢いよく口を閉ざし黙る。だが、ガルドの怒りはそれだけでは止まらなく、丸太

のような太い豪腕を振り上げて飛鳥に襲いかかる。

——さてと、ここは俺が止めるとしますか。俺の思いついた案は、第一条件として圧倒的な力を見せつける必要があるからな。そう考えた俺は箱庭に召喚される前に影と戦った時とは違う淡い翠緑色の霊力で右腕を包み込ませる。地を蹴り上げガルドの頭上まで跳躍し、右腕を頭部にぶち込んだ。

「ツガ!？」

頭部からの強い一撃にガルドはテーブルごと地面に叩きつけられ、半壊していたテーブルがさらに砕け散る。その後空中で一回転、そのまま耀の隣に着地する。今の一連の流れにジンと猫耳店員は驚愕しているが、耀は落ち着いた表情をしており飛鳥は楽しそうに笑っていた。

「やるわね。まさか一撃だけで鎮圧するとは思わなかったわ」

「まあな。こんな雑魚に遅れを取るわけにいかないしな」

「そう。でも、またガルドさんが暴れるかもしれないのに拘束はしなくてもいいの?」

「大丈夫だ。既に先手は打っている。今のこいつは意識は保っているが、指すら動かさない状態だからな」

「なら、問題はないわね」

視線をガルドに向けると、必死に体を動かそうと奮闘しているのが表情で分かった。だが、今の一撃は相手の体を麻痺させる効果なので手加減したとはいえ耐性がない奴には絶大な効果を発揮するのだ。ガルドはそれをまともに食らったので、暫くは動けないだろう。

「さて、ガルドさん。私は貴方の上に誰が居ようと気にしません。それはきつとジン君も同じでしょう。だって彼の最終目的は、コミュニティを潰した“打倒魔王”だもの」

飛鳥のその言葉にジンはさつきまで怖気ついていた眼が覚悟を秘めた眼に変わった。

「……………はい。僕達の最終目標は、魔王を倒して僕らの誇りと仲間達を取り戻すこと。今さらそんな脅しには屈しません」

「そういうことだ。つまりお前には破滅以外に道は残されていないってことだ」

「く……………くそ……………！」

身動きができず地を伏せながら悔しそうな表情をするガルドを見て飛鳥は機嫌を少し取り戻し、足先でガルドの顎を持ち上げると悪戯っぽい笑顔で話を切り出した。

「だけどね。私は貴方のコミュニティが瓦解する程度の事では満足できないの。貴方のような外道はズタボロになって己の罪を後悔しながら罰せられるべきよ。———そこで皆に提案なのだけれど」

……………どうやら俺と飛鳥の考えは同じようだな。飛鳥の言葉に頷いていたジンと猫耳店員は顔を見合わせて首を傾げ、耀は相変わらず無表情、俺は満面の笑みを浮かべる。

飛鳥は足先を離し、今度は女性らしい細長い綺麗な指先でガルドの顎を掴み、

「私達と『ギフトゲーム』をしましょう。貴方の「フォレス・ガロ」存続と「ノーネーム」の誇りと魂を賭けて、ね」

第四章

日が暮れた頃に黒ウサギと逆廻と噴水広場で合流し、さっきの出来事を話すと黒ウサギがウサ耳を逆立てて怒ってきた。

「な、なんであの短時間に『フオレス・ガロ』のリーダーと接触してしかも喧嘩を売る状況になったのですか!」「しかもゲームの日取りは明日!」「それも敵のテリトリー内で戦うなんて!」「準備している時間もお金ありません!」「一体どうい^つ心算があつてのことです!」「聞いているのですか四人とも!!」

「『ムシヤクシヤしたから喧嘩を売ってやった。反省も後悔も一切する気はない』」

「黙らっしやい!!」

なんだよ………。このことを伝えたら黒ウサギが怒るだろうと思って最初に決めた言い訳なのにどこに不満があるんだ?

激怒する黒ウサギの横でニヤニヤしながら笑って見ていた逆廻が止めに入ってきた。

「別にいいじゃねえか。見境なく選んで喧嘩売ったわけじゃないんだから許してやれよ」

「い、十六夜さんは面白ければいいと思っっているかもしれませんが、このゲームで得られるものは自己満足だけなんですよ？この『ギアスロール契約書類』を見てください」

黒ウサギが逆廻に見せた『契約書類』は『主催者権限』を持たない者達が『主催者』となつてゲームを開催するために必要なギフトで、そこにはゲーム内容・ルール・チップ・賞品が書かれており『主催者』のコミユニティのリーダーが署名することで成立するということ……と、ジンにさつき聞いたのだ。

「参加者が勝利した場合、主催者は参加者の言及する全ての罪を認め、箱庭の法の下で正しい裁きを受けた後、コミユニティを解散する」——まあ、確かに自己満足だ。時間かければ立証できるものを、わざわざ取り逃がすリスクを背負ってまで短縮させるん

だからな」

ちなみに俺達のチップは“罪を黙認する”というもので、これは一時的ではなく永久に口を閉ざし続けるという意味を持っている。まあ、確かにいずれ暴かれることなのにならないリスクを背負っているのは俺達全員承知している。

「でも時間さえかければ、彼らの罪は必ず暴かれます。だって肝心の子供達は………その、」

黒ウサギが言い淀む。ジンや猫耳店員にも聞いたことだが“フォレス・ガロ”はか나의悪評があるみたいだ。どうやら黒ウサギはそこまで酷い状態になっているとは思っていなかったんだろう。

「そう。人質は既にこの世にいないわ。その点を責め立てれば必ず証拠は出るでしょう。だけどそれには少々時間がかかるのも事実。あの外道を裁くのにそんな時間をかけたくないの」

これもジンに聞いたことだが箱庭の法はあくまで箱庭都市内でのみ有効なものだ。外は無法地帯になっており、様々な種族のコミュニケーションがそれぞれの法とルールの下で生活しているらしい。そこに逃げ込まれたら、箱庭の法では裁くことは不可能なのだ。だが、「契約書類」による強制執行ならばどこに逃げようが強力な「契約^{ギアス}」でガルドを追い詰められる。

「それにね、黒ウサギ。私は道德云々よりも、あの外道が私の活動範囲内で野放しにされることも許せないの。ここで逃せば、いつかまた狙ってくるに決まってるもの」

「ま、まあ………逃せば厄介かもしれないですけど」

「それにだ、黒ウサギ。俺達は自己満足だけで動いているんじゃないんだ。これにはもう一つの目的があるんだ」

「目的？」

黒ウサギは首を傾げる。飛鳥も耀もジンも不思議そうに、逆廻は面白そうにニヤニヤ

しながら俺を見つめてくる。どうやら逆廻以外は俺の隠された目的には気付かなかつたみたいだ。なら、分かりやすく教えてやるか。

「いいか？これは俺達とつても重要なことだ。心して聞いてくれよ？もう一つの目的……それは」

俺は一息をつける。この緊張感が漂う空間に黒ウサギとジンも息を呑む。俺は静かに、真剣な表情で言い放つ。

「——八つ当たりだ」

「自己満足より酷いじゃないですかあああああああつ!!」

俺の言葉を聞きジンと黒ウサギが叫声を上げながら、黒ウサギだけが俺に詰め寄ってくる。怒り五割増で。

「なに言っているのですか貴方は!?!お馬鹿ですか!?!いいえ、お馬鹿!!」

「馬鹿とは失礼な。これにはちゃんと理由があるんだぞ?」

「八つ当たりに理由も訳もありませんよ!」

「いや、箱庭に来た時に上空4000mのスカイダイビングに湖に落下してびしょ濡れ。そのことでイライラしていた時に暑苦しい外道な奴に会ったら………ねえ?」

「ねえ?じゃないですよ!?!いくら外道だからって八つ当たり目的でコミュニティ存続を賭けられたら哀れじゃないですか!?!」

「どうしようもないこの感情を悪にぶつけるのも正義の一つだと思う」

「そんな正義あつてたまるもんですかあああああああああああああつ?!」

ツツコミ疲れたのか息切れを起こし、肩を落とす黒ウサギ。ジンは呆れたように溜息をつき、飛鳥と耀は笑いを堪えるように体を震わせ、逆廻はケラケラと笑っていた。

「で、でも龍騎さんの理由はともかく僕もガルドを逃がしたくないと思っっている。彼のような悪人は野放しにしちゃいけない」

おい、ジン。俺はともかくってなんだよ。俺だって一応はちゃんと考えているんだぜ？ただシリアスが嫌いだからネタに走っただけだ。

ジンの同調する（俺は除く）姿勢に回復した黒ウサギは諦めたように頷いた。

「はあ………。仕方がない人達です。まあいいデス。腹立たしいのは黒ウサギも同じです。『フオレス・ガロ』程度なら十六夜さんが一人いれば楽勝でしょう」

……………逆廻の正確な實力は知らないが強いとは分かるから黒ウサギの言っていることは正しいんだが、飛鳥と逆廻が反対するだろう。俺も含めるが箱庭に来たメンバーはプライドとか高そうだからな……………。俺が思っていた通り逆廻と飛鳥は怪訝な顔をして、

「何言つてんだよ。俺は参加しねえよ？」

「当たり前よ。貴方なんて参加させないわ」

俺の予想通りに鼻を鳴らしながら反対する二人。反対されるとは思っていなかったのか黒ウサギは慌てて二人に食ってかかった。

「だ、駄目ですよ！御二人はコミュニティの仲間なんですからちゃんと協力しないと」

「そういうことじゃねえよ黒ウサギ」

逆廻が真剣な表情で黒ウサギを右手で制する。

「いいか？この喧嘩は、コイツらが売った。そしてヤツらが買った。なのに俺が手を出すのは無料だつて言っているんだよ」

「あら、分かっているじゃない」

「……………。ああもう、好きにしてください」

どうやら言い返すほどの気力も残っていないのか肩を落とす黒ウサギ。

「大丈夫だつて黒ウサギ。俺や耀もいるんだしなんとかなるって」

「……………私は龍騎さんが一番不安要素なんですけど」

解せぬ。

椅子から腰を上げた黒ウサギは、横に置いてある水の力を持つている苗を大事そうに抱き上げながらコホンと咳払いをし、気を取り直して俺達全員に切り出してきた。

「そろそろ行きましようか。本当は皆さんを歓迎する為に素敵なお店を予約して色々とセッティングしていたのですけれども……不慮の事故続きで、今日はお流れとなつてしまいました。また後日、きちんと歓迎を」

「いいわよ、無理しなくて。私達のコミュニティってそれはもう崖っぷちなんでしょう？」

そう飛鳥が言うと黒ウサギはすかさずジンに視界を移し、ジン自身は申し訳なさそうな顔を見て自分達の事情を知られたのだと悟ったようだ。ウサ耳まで赤くし、恥ずかしそうに頭を下げた。

「も、申し訳ございません。皆さんを騙すのは気が引けたのですが……黒ウサギ達も必死だったのです」

「もういいわ。私は組織の水準なんてどうでもよかったもの。龍騎君と春日部さんはどう？」

黒ウサギが恐る恐る俺と耀の顔を窺ってくる。耀は無関心なまま首を横に振り、俺もどうでもいいことなので適当に相槌を打つ。

「まあ、最初から分かっていたことだし強くてニューゲームなんてつまらねえしな」

俺がそう言うと黒ウサギがありえないものを見たかのように驚愕している。………黒ウサギとは一度じつくりと話し合う必要があるな。

「私も怒っていない。そもそもコミュニティがどうの、というのは別にどうでも………あ、けど」

何か思い出したように呟く耀。それを見たジンがテーブルに身を乗り出して問う。

「どうぞ気兼ねなく聞いてください。僕らに出来る事なら最低限の用意はさせてもらいます」

「そ、そんな大それた物じゃないよ。ただ私は………毎日三食お風呂付きの寝床があればいいな、と思ったただだから」

あ、お風呂って単語にジンの表情が固まった。あの様子だと水の確保がかなり大変なんでしょう。その苦勞を察した耀は慌てて取り消そうとしたが、先に黒ウサギが嬉々とした顔でさっきの苗を持ちあげる。

「それなら大丈夫です！十六夜さんがこんな大きな水樹の苗を手に入れてくれましたから！これで水を買う必要もなくなりますし、水路を復活させることもできます♪」

一転して明るい表情に変わる黒ウサギ。これを聞いた耀と飛鳥は安心したような顔を浮かべた。やっぱり女性にとってお風呂が入れるかどうかは死活問題なんだろう。

「私達の国では水が豊富だったから毎日のように入れたけれど、場所が変われば文化も

違うものね。今日は理不尽に湖へ投げ出されたから、お風呂には入りたかったところよ」

「それには同意だぜ。あんな手荒い招待は二度と御免だ」

「確かに下手したら死んでいた可能性だつてあつたはずだしな」

「あう……………そ、それは黒ウサギの責任外のことですよ……………」

召喚された俺達四人の責めるような視線に怖気づく黒ウサギ。隣ではジンが苦笑している。

「あはは……………それじゃあ今日はコミュニティへ帰る?」

「あ、ジン坊っちゃんには先にお帰りください。ギフトゲームが明日なら〃サウザンドアイズ〃に皆さんのギフト鑑定をお願いしないと。この水樹の事もありますし」

「『サウザンドアイズ』？コミュニティの名前か？」

「YES。『サウザンドアイズ』は特殊な『瞳』のギフトを持つ者達の群体コミュニティ。箱庭の東西南北・上層下層の全てに精通する超巨大商業コミュニティです。幸いこの近くに支店がありますし」

「ギフトの鑑定というのは？」

「勿論、ギフトの秘めた力や起源などを鑑定する事です。自分の力の正しい形を把握していた方が、引き出せる力はより大きくなります。皆さんも自分の力の出処は気になるでしょう？」

「いや、俺は鑑定なんかいらねいぞ？」

俺が鑑定の誘いを断ると黒ウサギが驚愕し、また俺に詰め寄ってくる。

「な、なんでデスカっ!？」

「俺はちゃんと自分の力のことを理解しているからな。それにギフトゲームをするかもしれない相手に鑑定なんかされたらこつちが不利になるじゃないか？まあ、ジンとコミユニティで留守番は暇だろうし皆と一緒にいて行くけどな」

「何やら聞きたいことやツツコミたいことは多々ありますが、もうそれでいいですよ……」

何故か疲れた表情をしながら黒ウサギは俺・逆廻・飛鳥・耀の四人と一匹を連れて「サウザンドアイズ」に向けて歩んでいった。



道中、俺達四人は興味深そうに街並みを眺めていた。商店へ向かうペリベット通りは石造で整備されており、脇を埋める街路樹は桃色の花を散らして新芽と青葉が生え始めていて、日が暮れて月と街灯ランプに照らされている並木道を眺めていた。

「桜の木……ではないわよね？花卉の形が違うし、真夏になっても咲き続けているはずがないもの」

「いや、まだ初夏になったばかりだぞ。気合の入った桜が残っていてもおかしくないだろ」

「はあ？最近、本格的に寒くなってきて後少しでクリスマスじゃなかったか？」

「……………？今は秋だったと思うけど」

ん？俺達の言っている季節がバラバラで全然噛み合っていないぞ？俺達が不思議そうに顔を見合わせて首を傾げていると黒ウサギが笑いながら説明し始めた。

「皆さんはそれぞれ違う世界から召喚されているのデス。元いた時間軸以外にも歴史や文化、生態系など所々違う箇所があるはずですよ」

「へえ？パラレルワールドってやつか？」

「近しいですね。正しくは立体交差並行世界論というものなのですけども……今からコレの説明を始めますと一日二日では説明しきれないので、またの機会ということに」

曖昧に話を濁して振り返る黒ウサギ。どうやら目的の店に着いたらしい。その商店の旗には青い生地に互いが向かい合う二人の女神像が記されている。多分あれが「サウザンドアイズ」の旗なんだろう。

日が暮れて看板を下げる割烹着を着た女性店員に、

「まっ」

「待った無しです御客様。うちは時間外営業はやっていません」

……ストップをかけようとする一刀両断された。黒ウサギは悔しそうに店員を睨みつけていた。流石は超大手の商業コミュニティだ。押し入る客の拒み方にも隙がない。店員もそれなりの実力はあるようだし。

「なんて商売っ気の無い店なのかしら」

「ま、全くです！閉店時間の五分前に客を締め出すなんて！」

「文句があるならどうぞ他所へ。あなた方は今後一切の出入りを禁じます。出禁です」

「出禁!?これだけで出禁とか御客様舐めすぎでございますよ」

融通がきかない人だな。確かに時間ギリギリの俺たちも悪いけど、出禁までやるか普通。喚いている黒ウサギに、店員は冷めたような眼と侮蔑を込めた声で対応をしていた。

「なるほど、『箱庭の貴族』であるウサギの御客様を無下にするのは失礼ですね。中での入店許可を伺いますので、コミュニティの名前をよろしいでしょうか？」

「……………」

一転して黙り込んだ黒ウサギだが、逆廻が何の躊躇いもなく名乗った。

「俺達は『ノーネーム』ってコミュニティなんだが」

「ほほう。ではどこの『ノーネーム』様でしょう。よかつたら旗印を確認させていただいてもよろしいでしょうか？」

「……………こいつ、俺達が『ノーネーム』と分かっておきながら聞いてきたな？その見下した視線が腹立つし、一度御客様の大切さを教えてやろうか……………」

「龍騎君。悪い顔になっているわよ」

「……………悪人面」

おっと、顔にでていたか。報復のことを考えていると顔にでてくる癖は直さなくちな。

「その……………あの……………私達に、旗はありま」

黒ウサギが心の底から悔しそうな顔をして小声で呟くと、

「いいいいやほおおおおお！久しぶりだ黒ウサギイイイイ！」

店内から爆走してくる着物風の服を着ている真つ白い髪の少女に抱き（もしくはフライングボディーアタック）つかれ、少女共々、空中四回転半ひねりして街道の向こうにある浅い水路まで吹き飛んでいった。

「きゃあ……………」

そのまま川に着水していった。それにしても今のフライングボディーアタックは見事だったな。

「……………おい店員。この店にはドッキリサービスがあるのか？なら俺も別バージョンで

是非」

「ありません」

「なんなら有料でも」

「やりません」

横で真剣な表情の逆廻と頭痛そうに抱えていながら真剣な表情で言い切る店員がいるが無視しとこう。

フライングボディーアタックを決めた白髪の幼い少女は、黒ウサギの胸に顔を埋めてなすり付けていた。

「し、白夜叉様!?! どうして貴女がこんな下層に!?!」

「そろそろ黒ウサギが来る予感がしておったからに決まっておるだろに! フフ、フホホ

フホホ！やっぱりウサギは触り心地が違うのう！ほれ、ここが良いかここが良いか！」
セクハラ親父のごとく黒ウサギの体を触りまくる白髪少女。……ちよつと羨ましいのは内緒だ。

「し、白夜叉様！ちよ、ちよつと離れてください！」

白夜叉と呼ばれた少女は無理やり引き剥がされ、頭を掴み店に向かって投げつけた。縦回転でこつちに来る少女は、そのまま逆廻に足で受け止められた。

「てい」

「ゴハア！お、おんし、飛んできた初対面の美少女を足で受け止めるとは何様だ！」

「十六夜様だけ。以後よろしく和装ロリ」

ヤハハと笑いながら自己紹介する逆廻。一連の流れで皆が呆気にとられているので、

俺が白夜叉に話しかける。

「お前がこの店のリーダーなのか？」

「……………ほう。私をリーダーと睨んだのか。だが、残念ながらこの『サウザンドアイズ』の幹部様の白夜叉様だよ。おんしの名は？」

「神崎龍騎。今は黒ウサギのコミュニティ『ノーネーム』に所属している」

俺が白夜叉と自己紹介をすると、濡れた服やミニスカートを絞りながら水路から上がってきた黒ウサギが複雑そうに呟いていた。

「うう……………まさか私まで濡れる事になるなんて」

「因果応報……………かな」

悲しげに服を絞っている黒ウサギだが、俺も耀と同意見なので無視一択で。反対に同

じく濡れた白夜又は全く気にしていないようだ。白夜又は店先で並ぶ俺達を見回してニヤリと笑った。

「ふふん。お前達が黒ウサギの新しい同士か。異世界の人間が私の元に来たという事は……遂に黒ウサギが私のペットに」

「そうだ。その代わりに俺達の頼みを聞いてほしいんだが」

「取引成立だ！」

「なりません！どういう起承転結があつてそんなことになるんですか！後、龍騎さん！黒ウサギを売らないでください！」

「本気にすんなよ。二割冗談だ」

「八割も本気だったんデスカ!?!」

「まあいい。話があるなら店内で聞こう」

「じゃあ、お邪魔しますわ」

「無視しないでくださいよ龍騎さん!? 白夜叉様も話を勝手に進めないでください!」

ウサ耳を逆立てて怒っている黒ウサギがいるが気にしないでおこう。俺が店の暖簾をくぐろうとすると女性店員が異議を唱える。

「よろしいのですか? 彼らは旗も持たない『ノーネーム』のはず。規定では」

「『ノーネーム』だと分かっているながら名を尋ねる、性悪店員に対する詫びだ。身元は私が保証するし、ボスに睨まれても私が責任を取る。いいから入れてやれ」

そう白夜叉が言うと、拗ねるような顔をする店員。その顔を見られて少し気が晴れたので、先ほどのことは不問にしよう。俺達は店員に睨まれながら暖簾をくぐり店に入っただけだ。

「……………龍騎君。あの時に考えていたことってなにかしら？」

「最低、〃サウザンドアイズ〃の店は問答無用で御客を追い出し、出禁するという事実などあることないことを責任全てあの店員に仕向けるように噂を徹底的に流し込む。そして、クビになって路頭に迷うことになった奴の目の前に現れ、盛大に笑ってやろうかと」

「……………貴方なら本気で実行しそうね。命拾いしたわね、あの女性店員」

第五章

俺達は「サウザンドアイズ」の店の暖簾をくぐると、店の外観からは考えられない、不自然な広さの中庭に出た。正面玄関を見ると、ショーウィンドに展示された様々な珍品っぽいものが並んでいた。

「生憎と店は閉めてしまったのでな。私の私室で勘弁してくれ」

俺達は和風の中庭を進み、縁側で足を止めた。障子を開けて招かれた場所は香の様な物が焚かれており、個室というにはやや広い和室の上座に腰を下ろした白夜叉は大きく背伸びをしてから俺達に向き直る。その時には既に濡れていた着物が乾ききっていた。

「もう一度自己紹介しておこうかの。私は四桁の門、三三四五外門に本拠を構えている「サウザンドアイズ」幹部の白夜叉だ。この黒ウサギとは少々縁があつてな。コミュニティが崩壊してからもちよくちよく手を貸してやっている器の大きな美少女と認識

「しておいてくれ」

「はいはい、お世話になっております本当に」

自称美少女の白夜叉の自己紹介に投げやりな言葉で受け流す黒ウサギ。その隣で耀が小首を傾げながら問う。

「その外門。って何？」

「箱庭の階層を示す外壁にある門ですよ。数字が若いほど都市の中心部に近く、同時に強大な力を持つ者達がすんでいるのです」

「どうやら此処、箱庭の都市は上層から下層まで七つの支配層に別れられており、それに伴ってそれぞれを区切る門には数字が与えられていて、外壁から数えて七桁の外門、六桁の外門、と内側に行くほど数字は若くなり、同時に強大な力を持つらしい。箱庭で四桁の外門ともなれば、名のある修羅神仏が割拠する人外魔境だ。黒ウサギが描く上空から見た箱庭の図は、外門によって幾重もの階層に分かれていて、その図を見た俺達異

世界組は口を揃えて、

「……………超巨大タマネギ?」

「いえ、超巨大バームクーヘンではないかしら?」

「そうだな。どちらかといえばバームクーヘンだ」

「他にもトイレットペーパーとかゼロハンテープなどにも見えるよな」

頷き合う四人に俺達の感想に肩を落とす黒ウサギ。対照的に、白夜又は呵々と哄笑を上げて二度三度と頷いていた。

「ふふ、うまいこと例える。その例えなら今いる七桁の外門はバームクーヘンの一番薄い皮の部分に当たるな。更に説明するなら、東西南北の四つの区切りの東側にあたり、外門のすぐ外は“世界の果て”と向かい合う場所になる。あそこにはコミュニケーションに所属していないものの、強力なギフトを持ったもの達が棲んでおるぞ——その水樹の

持ち主などな」

白夜又は薄く笑いながら黒ウサギの持つ水樹の苗に視線を向けた。そういえば、あの水樹の苗はギフトゲームに勝った戦利品なのは分かるが相手は誰なんだ？話を聞く限り、かなりの実力を持つ幻獣なのは分かるんだけどな……………。

「して、一体誰が、どのようなゲームで勝ったのだ？知恵比べか？勇気を試したのか？」
「いえいえ。この水樹は十六夜さんがここに来る前に、蛇神様を素手で叩きのめしてきたのですよ」

……………へえ？逆廻は強いとは思っていたが蛇神を倒せるほど、しかも無傷で勝利するとは俺の予想以上だな。

「なんと!?!クリアではなく直接的に倒したとはな!?!ではその童は神格持ちの神童か？」

「いえ、黒ウサギはそう思えません。神格なら一目見れば分かるはずですし」

「む、それもそうか。しかし神格を倒すには同じ神格を持つか、互いの種族によほど崩れたパワーバランスがある時だけのはず。種族の力でいうなら蛇と人ではドングリの背比べだぞ」

「……………なんか話を聞く限り、その神格つてのは生来の神様そのものではないみたいだが？」

少し神格について疑問に思った俺は白夜叉に聞きだすことにした。白夜叉は「ほう……………？」と興味深そうに視線を黒ウサギから俺に移した。

「おんしは神について多少の知識があるみたいだな。確かにおんしの推察通り、神格とは生来の神様そのものではなく、種の最高のランクに体を変幻させるギフトを指すのだ。蛇に神格を与えれば巨躯の蛇神に。人に神格を与えれば現人神や神童に。鬼に神格を与えれば天地を揺るがす鬼神と化す。更に神格を持つことで他のギフトも強化されることから、箱庭にあるコミュニケーションの多くは各々の目的のため神格を手に入れることを第一目標とし、上層を目指して力を付けていくのだ」

「なるほど……………」

どうやら俺が思っているよりも箱庭にとつてギフトはかなり重要であるみたいだ。それなら余計にギフトゲームに敗けるわけにはいかなくなってきた。俺の力は危険過ぎだから渡すわけにはいかないしな……………。俺は自分の力について考えていると黒ウサギが何か疑問に思ったのか白夜叉に聞き出した。

「白夜叉様はあの蛇神様とお知り合いだったのですか？」

「知り合いも何も、アレに神格を与えたのはこの私だぞ。もう何百年も前の話だがの」

小さな胸を張り、豪快に笑う白夜叉。だがそれを聞いた逆廻が瞳を光らせて白夜叉に聞いたのだした。

「へえ？じゃあオマエはあのへびより強いのか？」

「ふふん、当然だ。私は東側の『階層支配者』だぞ。この東側の四桁以下にあるコミュニティでは並ぶ者がいない、最強の主権者なのだからの」

あつ……………。これはちよつと不味いかも。プライドが高そうな三人がそれを聞いてしまつたら——。だが、時既に遅し。『最強の主権者』という言葉に逆廻・飛鳥・耀の三人が一齐に瞳を輝かせていた。

「そう……………ふふ。ではつまり、貴女のゲームをクリア出来れば、私達のコミュニティは東側で最強のコミュニティという事になるのかしら？」

「無論、そうなるのう」

「そりや景氣のいい話だ。探す手間が省けた」

はあ……………、やっぱりこうなつたか。てか、本当にこの短時間で大手のコミュニティにギフトゲームに挑むとは思わなかつたぞ……………。

「ほほう……。疲れそうに面倒くさいのう……。まあ、よかろう。では、ギフトゲームを始めるでしょう」

「ノリがいいわね。そういうの好きよ」

「ふふ、そうか。——しかし、ゲームの前に一つ確認しておく事がある」

「なんだ？」

白夜叉が着物の裾から“サウザンドアイズ”の旗印が描かれているカードを取り出し、壮絶な笑みで一言、

「おんしらが望むのは『挑戦』か——もしくは『決闘』か?」

白夜叉がそう言った瞬間、俺達の視界が爆発的な変化が起きた。

さっきまでいたややや広い和室から白い雪原と凍る湖畔——そして、水平に太陽が廻る世界に変わっていた。

「……………なっ……………!?!」

横で逆廻達がこの余りに異常な現象に息を呑んでいるのが分かる。流石にこれは予想外だったのだろう。

それにしても、一瞬にしてこのような世界を展開できるとなると白夜叉の実力はかなり高いな。……………それにこれは召喚とは何か違う気がする。結界や幻術とは違うし……………いや、そもそも白夜叉が力を使った形跡がない。白夜叉の様子から見ると引き出

しから物を取り出したような……そんな当たり前なことをやってのけたように見える。

「今一度名乗り直し、問おうかの。私は『白き夜の魔王』——太陽と白夜の星霊・白夜叉。おんしらが望むのは、試練への『挑戦』か？それとも対等な『決闘』か？」

白夜叉の凄みのある笑みに、再度息を呑む逆廻達。『星霊』か……。聞いたことがないが、おそらく最上位級の精霊。そうなると、白夜叉はギフトを『与える側』の存在であるのだろう。

「水平に廻る太陽と……そうか、白夜と夜叉。あの水平に廻る太陽やこの土地は、オマエを表現してることか」

「如何にも。この白夜の湖畔と雪原。永遠に世界を薄明に照らす太陽こそ、私がもつゲーム盤の一つだ」

白夜叉が両手を広げると、地平線の彼方の雲海が瞬く間に裂け、薄明の太陽が晒され

る。『白夜』って確か北欧諸国で見られる太陽が沈まない現象だったはず。そして『夜叉』、毘沙門天の配下で、善神と悪鬼の二面性を持つ鬼神であり最大の武神と崇められていた存在だ。その他にも水と大地の守護神であつたとも言われている。『星霊』に『神霊』、白夜叉は『魔王』と呼ばれても問題ないほどの強大な存在なのだ。

「これだけ莫大な土地が、ただのゲーム盤……!?!」

「如何にも。して、おんしらの返答は? 『挑戦』であるならば、手慰み程度に遊んでやる。——だがしかし、『決闘』を望むなら話は別。魔王として、命と誇りの限り闘おうではないか」

「……………っ」

……………無理だな。今の逆廻らでは逆立ちしたって白夜叉に片手であしらわれるだけだ。そのことは三人も理解しているはずだ。しかし、自分達の売った喧嘩を勝ち目がないうという形で取り下げるにはプライドが邪魔するのだろう。さて、どうする御三人? しばしの静寂の後——諦めたように笑う逆廻が、ゆっくりと挙手し、

「参った。やられたよ。降参だ、白夜叉」

「ふむ？それは決闘ではなく、試練を受けるといふ事かの？」

「ああ。これだけのゲーム盤を用意出来るんだからな。アンタには資格がある。——
いいぜ。今回は黙って試されてやるよ、魔王様」

苦笑と共に吐き捨てるように物言いをする逆廻。……まあ、逆廻にしては最大限の譲歩なんだろうが、もうちよつと言葉選べよ。白夜叉が腹を抱えて哄笑をあげているのを見ているとそこまで気にしていないみたいだが、もし白夜叉がプライドが高かったら即戦闘ものだぞ。一頻り笑った白夜叉は笑いを噛み殺して他の二人にも問いだしてき
た。

「く、くく………して、他の童達も同じか？」

「………ええ。私も試されてあげてもいいわ」

「右に同じ」

苦虫を噛み潰したような表情で返事をする二人。その二人を見て満足そうに声を上げる白夜叉。一連の流れに肝を冷やしていた黒ウサギが胸をなでおろしている。

「も、もう！お互いにもう少し相手を選んでください！ “階層支配者” に喧嘩を売る新人と、新人に売られた喧嘩を買う “階層支配者” なんて、冗談にしても寒すぎます！それに白夜叉様が魔王だったのは、もう何千年も前の話じゃないですか!!」

「何？じゃあ元・魔王様ってことか？」

「はてさて、どうだったかな？」

「てか、冷静に考えたら魔王がこんな下層に堂々といること自体おかしいだろう……」

悪戯っぽく笑う白夜叉にガクリと肩を落とす黒ウサギと逆廻達。それを静観してい

た俺は呆れるしかなかったのであった。

その時、彼方にある山脈から強い気配を感じ、その瞬間甲高い叫び声が聞こえてきた。その叫び声に逸早く反応したのは、耀だった。

「何、今の鳴き声。初めて聞いた」

「ふむ……あやつか。おんしら三人を試すには打って付けかもしれない」

白夜叉が湖畔を挟んだ向こう岸にある山脈に手招きをすると体長5mはある巨大な獣が翼を広げながら空を滑空し、俺達の前に現れた。鷲の翼と獅子の下半身を持つ獣、その姿には心当たりは一つしかない。だが、俺がその名を言う前に耀が驚愕と歓喜の籠った声でその名を上げた。

「グリフォン……嘘、本物!？」

「フフン、如何にも。あやつこそ鳥の王にして獣の王。//力// 知恵// 勇気// の全て

を備えた、ギフトゲームを代表する獣だ」

グリフォン。黄金を発見し守ると言い伝えから「知識」を象徴する凶像として用いられ、鳥の王・獣の王であることから「王家」の象徴、「七つの大罪」の一つでもある。「傲慢」を象徴としてもてはやされたほどの幻獣だ。そんな幻獣までいるとは箱庭つて凄いな。

白夜叉がグリフォンに手招きをすると、白夜叉の元に降り立ち、深く頭を下げ、礼を示した。

「さて、肝心の試練だがの。おんしら三人とこのグリフォンで「力」「知恵」「勇気」の何れかを比べ合い、背に跨って湖畔を舞う事が出来ればクリア、という事にしようか」

白夜叉が双女神の紋が入ったカードを取り出した。すると、虚空から「主催者権限」にのみ許された輝く羊皮紙が現れた。白夜叉はその羊皮紙に記述しだした。

『ギフトゲーム名 「驚獅子の手綱」

・プレイヤー一覧 逆廻 十六夜

久遠 飛鳥

春日部 耀

・クリア条件 グリフォンの背に跨り、湖畔を舞う。

・クリア方法 “力” “知恵” “勇氣” の何れかでグリフォンに認められる。

・敗北条件 降参か、プレイヤーが上記の勝利条件を満たせなくなった場合。

・宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

“サウザンドアイズ”印

「私がやる」

読み終わるや否に即座に挙手したのは耀だった。今の耀の瞳はグリフォンしか向い

ておらず、羨望の眼差しで見つめている。余程、グリフォンに何かしらの思いがあるんだろう。

「ニヤ、ニヤー」

「大丈夫、問題ない」

「ふむ。自信があるようだが、コレは結構な難物だぞ？失敗すれば大怪我では済まんが」

「大丈夫、問題ない」

「……………おい、耀さん？」

「大丈夫、問題ない」

駄目だこりゃ。耀はもうグリフォン以外、意識を向けていないわ。耀の視線は自分の憧れの存在に会ったかのように輝いている。俺は逆廻と飛鳥同様、呆れたかのように苦

笑いを漏らすしかなかった。

「OK、先手は譲ってやる。失敗するなよ」

「気を付けてね、春日部さん」

「うん。頑張る」

「ちよつと待った、耀」

頷き、グリフォンに駆け寄ろうとする前に俺が待ったをかける。止められた耀は不機嫌を隠そうとせずに俺を睨んでくるが、俺は気にせずブレザーを脱ぎ、耀の肩にかける。

「この世界の環境で体感気温はかなり下がるだろうからな。どうやってグリフォンに跨るかは分らんが、その服装だとクリアしても死ぬ可能性の方が高いから気休め程度だがそれでも着てろ」

「う、うん。ありがとう……………」

「気にすんな。白夜叉、これぐらい別にいいよな？」

「……………まあ、その服からは何も感じないしそれぐらいはよからう」

「ん、サンキュー。じゃあ、行ってこい耀」

「……………行ってくる」

耀は先ほどよりも大きく頷き、再度グリフォンに駆け寄っていった。俺はそれを見送った後、逆廻と飛鳥の傍まで歩いていった。耀、ここからはお前の戦いだ。頑張れよ。

「え、えーと。初めまして、春日部耀です」

耀が慎重にグリフォンに話しかけると、グリフォンの肢体が跳ねた。どうやら耀のギフトは幻獣にも有効のようだ。だが、問題はここからだ。言葉を交わせることが出来

ることは有利な条件で交渉できるが、どうグリフオンの背に跨るかだ。もし、俺自身がこのギフトゲームに参加していたなら、力で屈服させるぐらいしか思いつかない。さて、どうする耀？

「私を貴方の背に乗せ……誇りを賭けて勝負をしませんか？」

耀の提案にグリフオンの瞳に闘志が宿った。まあ、王家の象徴とまで言われているグリフオンに『誇りを賭けろ』なんて、最高の挑発もいいとこだ。

「貴方が飛んできたあの山脈。あそこを白夜の地平から時計回りに大きく迂回し、この湖畔を終着点と定めます。貴方は強靱な翼と四肢で空を駆け、湖畔までに私を振るい落とせば勝ち。私が背に乗っていられたら私の勝ち。……どうかな？」

……確かにその条件なら力と勇気の両方を試すことが出来る。耀だからこそ出来る攻略方法だけど、その服装で挑むとか危険過ぎだろう。つたく、ブレザーを着させて正解だよ。

耀の交渉が終わるとグリフォンは大きく鼻を鳴らし、唸り声を上げる。その唸り声に耀は即答で答えた。

「命を賭けます」

あまりに突飛な返答に黒ウサギと飛鳥から驚きの声上がる。

「だ、駄目です！」

「か、春日部さん!?!本気なの!?!」

「貴方は誇りを賭ける。私は命を賭ける。もし転落して生きていても、私は貴方の晩御飯になります。……………それじゃ駄目かな？」

なるほどな……………。おそらくグリフォンに誇りの対価を求められたのだろう。それを怖気もなく『命を賭ける』か……………。無謀にも思えるが耀の声には相当な覚悟が秘めていた。

耀の提案にさらに慌てて止めようとする飛鳥と黒ウサギ。それを白夜叉と逆廻、俺が制する。

「双方、下がらんか。これはあの娘から切り出した試練だぞ」

「ああ。無粋な事はやめとけ」

「そんな問題ではございません!! 同士にこんな分の悪いゲームをさせるわけには——」

「そんなの『打倒魔王』を掲げる俺達にとってこれから当たり前になることだぞ。それが今になっただけだ」

「し、しかし——」

「大丈夫だよ」

耀が振り向きながら飛鳥と黒ウサギに頷く。その表情は何の気負いもなく、勝算があると思わせる。グリフォンはしばし考える仕草をした後、頭を下げて背に乗るようになっている。耀は頷き、手綱を握りながら背に乗り込んだ。鞍が無い分、不安定そうだが耀は手綱をしっかりと握り締めてグリフォンの胴体に跨る。

「……………ねえ、龍騎君。春日部さんに勝算あるのかしら？」

強気な表情をしていた耀だが、それでも心配そうな飛鳥が俺に問いだしてきた。

「そうだな……………。俺達の知る限りのことだけだったら勝率は0.1%もないだろうな。けど、俺の予想が当たっていたとしたら勝率は五分五分つてところだな」

「まあ、それが妥当だな」

「……………う……………どう……………」

俺の推測に逆廻が同意し、飛鳥はピンとこないのか不思議そうに首を傾げる。

「ちゃんとした確信を得ていないから自信持つて言えないんだけど……まあ、見てたら分かるだろ。……そろそろ始まりそうだぜ？」

グリフォンが翼を三度羽ばたかせ、前傾姿勢を取ると大地を踏み抜くように空へと飛び出していった。その速度は山脈に瞬く間に近づいていく。

「おお、思ったよりも速いんだな。流星はグリフォンつてところか」

「だが、ここからが問題だな。白夜の世界は気温が低い上に、あの速度だと体にかかる衝撃は尋常じゃない。さらに氷点下の風が更に冷たくなって、体感気温はおよそマイナス数十度つてところか？」

しばしすると耀が乗ったグリフォンは山脈を大きく迂回しこちらに戻ってくる。ここで本気を出したのかグリフォンの速度は倍ぐらいまで加速し、旋回や急降下を使い耀を振り落とそうとする。だが、耀も下半身が空中に投げ出されている状態だが手綱を強

く握り締め踏ん張り続けている。

「後、残り僅かの距離です！」

「頑張つて！春日部さん！」

残り僅かの距離になるとグリフォンは更に激しく旋回を繰り返す。その上に地平ギリギリまで急降下して大地と水平になるように振り回す。そして、そのままの勢いで湖畔の中心まで疾走しきつたグリフォン。耀の勝利が決定した瞬間だったが——耀が手綱を手放した。

「春日部さん!?!」

飛鳥の悲鳴にそのまま落ち続ける耀。黒ウサギは助けに行こうとするが黒ウサギの手を逆廻が掴み、救助の邪魔をする。

「は、離し——」

「待て！まだ終わっていない！」

落下している耀から力を感じた。すると、落下速度が徐々に下がっていき、耀は空中を蹴つてゆつくりとこちらに向かってくる。

「……………なっ」

その場の全員が絶句した。ふわふわと不安定に泳ぐように飛ぶその飛び方はグリフォンの飛び方とよく似ていた。その様子を俺は呆れたように笑う。

「やっぱりな。耀のギフトは他の生物の特性を手に入れる類だったんだな」

「……………これが貴方達が予想していたこと？」

俺に問いだしてくる飛鳥。俺は肩をすくめながらその問いに答える。

「ただの推測だな。呼び出されて黒ウサギを見つける時に『風上に立たれたら分かる』って言うっていたからな。そんな芸当は人間には出来ないが他の生物だと出来るかもしれない。だとすると、耀のギフトは他の生物とコミュニケーションをとり、何らかの条件でその生物のギフトを手に入れると推察したんだ。まあ、多分まだ他の能力はありそうだけだ」

説明を終え視線を耀に移し替えると耀が既に着地しており、その傍には三毛猫と逆廻がいた。

「じゃあ、俺達も耀のところに行こうぜ。ブレザーも返してもらわなきゃいけないしな」
「そうね、行きましょう」

不安要素や危なっかしいところもあったが、初のギフトゲームは無事クリアだな。これからの調子でいければいいがな……。

そんなことを思いながら俺は飛鳥と共に耀の傍まで駆け寄っていった。

第六章

「お疲れさん。その様子だったら無事みたいだな」

「大丈夫、春日部さん？」

「大丈夫だよ飛鳥。……………あ、龍騎。これありがとう」

耀が思い出したように着ていたブレザーを脱ぎ俺に渡してきた。受け取ると手が切れるように冷たくなっており衣類とは思えないほど固くなっていた。

「うわっ。ブレザーがパキパキに凍ってるな……………。耀、本当に大丈夫か？」

「うん、平気。……………でも、もしこれがなかったら少し危なかったかも」

「そうか？まあ、お役に立てたならそれでいいけど」

耀の様子を見る限り本当に大丈夫そうなのでとりあえず一安心だな。俺は手から淡い紅蓮色の霊力を放出しながら凍ったブレザーを温めていると拍手を送る白夜叉と感嘆の眼差しで耀を見つめるグリフォンがやってきた。

「いやはや大したものだ。このゲームはおんしの勝利だの。……とところで、おんしの持つギフトだが。それは先天性か？」

「違う。父さんに貰った木彫りのおかげで話せるようになった」

「木彫り？」

耀は頷きながら丸い木彫り細工のペンダントを取り出した。白夜叉は渡されたペンダントを受け取り鑑定していると急に顔を顰めた。俺も気になるので白夜叉の隣から覗き込む。……描かれている図はさっぱり分からんがこのペンダントからかなり強い力を感じる。使い方次第では下手したら神級以上になるかもな。これを作った耀の

父親は紛れもなく天才だ。

「複雑な模様ね。何か意味があるの？」

「意味はあるけど知らない。昔教えてもらったけど忘れた」

「……………これは」

飛鳥、逆廻、黒ウサギも覗き込み鑑定に参加する。飛鳥は耀に問いだし、逆廻と黒ウサギは神妙な表情でペンダントを見つめる。白夜叉、逆廻、黒ウサギは表裏交互に見直し、表面にある幾何学線を指でなぞると黒ウサギが首を傾げながら耀に問う。

「材質は楠の神木……………？神格は残ってないようですが……………この中心を目指す幾何学線……………そして中心に円状の空白……………もしかしてお父様の知り合いには生物学者がおられるのでは？」

「うん。私の母さんがそうだった」

「生物学者つてことは、やっぱりこの図形は系統樹を表しているのか白夜又?」

「おそらくの……ならこの図形はこうで……この円形が収束するのは……いや、これは……これは、凄い!! 本当に凄いぞ娘!! 本当に人造ならばおんしの父は神代の大天才だ! まさか人の手で独自の系統樹を完成させ、しかもギフトとして確立させてしまおうとは! コレは真正正銘 “生命の目録” と称して過言ない名品だ!」

「系統樹つて生物の進化やその分かれた道筋を枝分かれした図として示したものだっただか? 確かあれつて樹の形で描かれていたはずだが?」

「私も母さんの作った系統樹の図はそうだったと思うけど」

「うむ、それはおんしの父親が表現したいモノのセンスが成す業よ。この木彫りをわざわざ円形にしたのは生命の流転、輪廻を表現したもの。再生と滅び、輪廻を繰り返す生命の系統が進化を遂げて進む円の中心、即ち世界の中心を目指して進む様を表現している。中心が空白なのは、流転する世界の中心だからか。——うぬぬ、凄い。凄いぞ。」

久しく想像力が刺激されとるぞ！実にアーティスティックだ！おんしさえよければ私
が買いたいぐらいだの！いや、ギフト複数との交換でも」

「いや、駄目だろ。さつさと返せ」

興奮して声を上げながら鑑定する白夜叉から危ない発言が聞こえてきたので、ペンダ
ントを取り上げる。

「!?」

直にペンダントとを触れると凄まじい力と嫌な予感を感じ取った。………確か白夜
叉は世界の中心を目指して進む様を表現しているって言ったよな？もしかしてコレっ
て――。

「………?どうしたの?」

「っ?!い、いや何でもない………ほらよ」

見蕩れるように見つめすぎた俺は耀に声をかけられ我を取り戻す。少し動揺しながら俺はペンダントを耀に返す。……もし俺の推測が当たっていたとしたら……いや、確証はないんだし考えるのはやめよう。耀の父親はもしかしたら俺とは違う考えで作ったかもしれないしな。

「で、これはどんな力を持ったギフトなんだ？」

「それは分からん。今分かつとるのは異種族と会話が出来るのと、友になった種から特有のギフトを貰えるということぐらいだ。これ以上詳しく知りたいのなら店の鑑定士に頼むしかない。それも上層に住む者でなければ鑑定は不可能だろう」

「え？ 白夜叉様でも鑑定出来ないのですか？ 今日には鑑定をお願いしたかったですけど」

黒ウサギが不思議そうに言うと、ゲツ、と気まずそうな顔になる白夜叉。

「よ、よりにもよってギフト鑑定か。専門外どころか無関係もいいところなのだがの」

……………それは「サウザンドアイズ」の支店を任されている店長として問題だと思っただが。長い付き合いの黒ウサギもそれを知らないのもおかしい気がするが。白夜叉は渋々ながら着物の裾を引きずりながら俺達の顔を両手で包むように見つめる。

「どれどれ……………ふむふむ……………うむ、四人ともに素質が高いのは分かる。しかしこれではなんとも言えんな。おんしらは自分のギフトの力をどの程度に把握している？」

「企業秘密」

「右に同じ」

「以下同文」

「言う義理無し」

「うおおおおおい!?!いやまあ、仮にも対戦相手だったものにギフトを教えるのが怖いのは分かるが、それじゃ話が進まんだろうに」

「寝言は寝てから言え白夜叉」

「さつきからおんし段々と口が悪くなっていないか!？」

「元々、白夜叉がちゃんと鑑定をすることが出来ていたらいい話じゃないのか?」

グツ、とまた気まずそうな表情をして押し黙る白夜叉。それに続くように逆廻が鑑定拒否の理由を言う。

「別に鑑定なんていらねえよ。人の値札貼られるのは趣味じゃない」

キツパリと拒絶する逆廻に同意。飛鳥と耀も同意するように頷いている。断固拒否状態の俺達に困ったように頭を掻く白夜叉だが、突然妙案を思いついたかのようにニヤリと笑った。

「ふむ。何にせよ『主催者』として、星霊の端くれとして、試練をクリアしたおんしらは『恩恵』を与えねばならん。ちよいと贅沢な代物だが、コミユニティ復興の前払いと

しては丁度良かろう」

そう言いながら白夜又は二度柏手を打つ。すると俺達の眼前に光り輝く四枚のカード——逆廻にはコバルトブルー、飛鳥はワインレッド、耀はパールエメラルド、俺にはミッドナイトブルーのカードが現れた。そのカードを受け取ると自分の名前とギフトが書かれていた。黒ウサギは驚愕・興奮したような表情で俺達のカードを覗き込む。

「ギフトカード！」

「お中元？」

「お歳暮？」

「お年玉？」

「記念品？」

「ち、違います！というかなんで皆さんそんなに息が合ってるのです!?!このギフトカードは顕現しているギフトを収納できる超高価なカードですよ！耀さんの『生命の目録』だって収納可能で、それも好きな時に顕現できるのですよ！」

「つまり素敵アイテムってことでオツケーか？」

「だからなんで適当に聞き流すんですか！あーもうそうですよ、超素敵アイテムなんですよー！」

叱ってくる黒ウサギを無視しながら逆廻達は物珍しそうにカードを見つめる。
……だが、俺はある疑問を抱いたので白夜叉に問い出す。

「おい、白夜叉。俺はギフトゲームに参加していないぞ？何で俺までコレを？」

「前祝いと言ったはずだが？それにおんしだけ何も無しは可哀想だしのう」

「……まあいいか。貰える物は貰う主義だしな」

俺は白夜叉からカードに視線を落とす。そこには俺が持っている力の名称ギフトが書かれていた。

「我らの双女神の紋のように、本来はコミュニティの名と旗印も記されるのだが、おんしらは『ノーネーム』だから。少々味気ない絵になっているが、文句は黒ウサギに言ってくれ」

「ふうん……もしかして水樹って奴も収納できるのか？」

逆廻は何気なく数樹にカードを向けると、水樹は光の粒子となりカードの中に呑み込まれていった。

「おお？これ面白いな。もしかしてこのまま水を出せるのか？」

「出せるとも。試すか？」

「だ、駄目です！水の無駄遣い反対！その水はコミュニティの為に使ってください！」

チツ、とつまらなさそうに舌打ちをする逆廻。安心出来ない表情で逆廻を監視する黒

俺は誰にも気付かれないようにズボンの後ろポケットにギフトカードを隠した。

☆

その後、白夜叉の部屋に戻り俺達は暖簾の下げられた店の前まで移動した。

「今日はありがとう。また遊んでくれると嬉しい」

「あら、駄目よ春日部さん。次に挑戦するとき是对等の条件で挑むものだもの」

「ああ。吐いた唾を飲み込むなんて、格好付かねえからな。次は渾身の太舞台で挑むぜ」

「それにはかなりの時間が掛かりそうだがな。まあ、その時は俺も参加させてもらうぜ」

「ふふ、よかろう。楽しみにしておけ。……………ところで」

白夜叉は微笑を浮かべるがスッと真剣な表情で俺達を見てくる。

「今さらだが、一つだけ聞かせてくれ。おんしらは自分達のコミュニティがどういう状況にあるか、よく理解しているか？」

「ああ、名前と旗の話か？それなら聞いたぜ」

「なら、さつき小僧が言った通り『魔王』と戦わねばならんことも？」

「聞いてるわよ」

「小僧はやめろよ。俺の名は龍騎だつて言っただろ」

「私から見たらおんしらは小僧小娘同然だ。……では、おんしらは全てを承知の上で黒ウサギのコミュニティに加入するのだな？」

横目で黒ウサギを見てみると黒ウサギの目は俺達から視線をそらしていた。……そんな心苦しかったのなら嘘なんかつかなければいいのに。

「そうよ。打倒魔王なんてカッコいいじゃない」

「『カッコいい』で済む話ではないのだがの……全く、若さゆえなのか。無謀というか、勇敢というか。まあ、魔王がどういうものかはコミュニケーションに帰ればわかるだろ。それでも魔王と戦う事を望むというなら止めんが……その娘二人。おんしらは確実に死ぬぞ」

予言するように断言された二人は言い返そうとするが言葉が見つからないのか、それとも同じ元魔王の白夜叉の威圧感に黙ってしまふ。まあ、当然ちや当然だな。二人の力は強力ではあるがそれは人間の範囲の話だ。今後次第では神や魔王でも引けを取らない程の実力者になる可能性があるが今では確実に敗けるだろう。

「魔王の前に様々なギフトゲームに挑んで力を付けろ。小僧らはともかく、おんしら二人の力では魔王のゲームを生き残れん。嵐に巻き込まれた虫が無様に弄ばれて死ぬ様は、いつ見ても悲しいものだ」

「……………ご忠告ありがとうございます。肝に銘じておくれ。次は貴女の本気のゲームに挑みに行くから、覚悟しておきなさい」

「ふふ、望むところだ。私は三三四五外門に本拠を構えておる。いつでも遊びに来い。……………ただし、黒ウサギをチップに賭けてもらうがの」

「嫌です!」

「望むところだ!」

「望まないでください!」

黒ウサギが即答で返してくる。白夜又は拗ねたように唇を尖らせた。

「つれない事を言うなよう。私のコミュニティに所属すれば生涯を遊んで暮らせると保証するぞ?三食首輪付きの個室も用意するし」

「三食首輪付きってソレもう明らかにペット扱いですから！つて、十六夜さんも龍騎さんも『その手があつたか!』という顔しないでください!」

怒る黒ウサギに笑う俺、逆廻、白夜叉。そのまま俺達は無愛想な女性店員に見送られながら「サウザンドアイズ」二一〇五三八〇外門支店を後にした。

☆

白夜叉とのゲームを終え、「サウザンドアイズ」の支店から半刻ほど歩いた後、「ノーネーム」の居住区画の門前に着いた。その門を見上げると、コミュニティの旗は掲げられていなかった。

「この中が我々のコミュニティでございます。しかし本拠の館は入口から更に歩かねばならないので御容赦ください。この浜辺はまだ戦いの名残がありますので……」

「戦いの名残？噂の魔王って素敵ネーミングな奴との戦いか？」

「は、はい」

「ちようどいいわ。箱庭最悪の天災が残した傷跡、見せてもらおうかしら」

先程の一件により機嫌が悪い飛鳥。プライドが高い彼女からしてみれば見下された事実に気に食わなかったのだろう。気持ちは分からなくもない……………だが、

「……………お前ら、ここから先は覚悟しておいた方がいいぞ」

「……………？それはどういう」

耀が言い終わる前に躊躇いながら門を開ける黒ウサギ。すると、門の向こうから乾いた風を感じた。砂塵が舞い、俺達の視界を遮る。微かに見える景色は——廃墟同然の荒れた大地だった。

「っ、これは……………!？」

これは……………思ったより酷いな。隣で飛鳥と耀が息を呑んでいるが分かる。逆廻はこの光景にスッと目を細めながら木造の廃墟に歩み寄り、囲いの残骸を手に取った。そのまま少し握り込むと残骸は音も立てて崩れていった。

「……………おい、黒ウサギ。魔王のギフトゲームがあつたのは————今から何百年前の話だ？」

「僅か三年前でございます」

「ハッ、そりや面白いな。いやマジで面白いぞ。この風化しきつた町並みが三年前だと？」

……………逆廻の言う通り“ノーネーム”の街並みは何百年の時間が経過して滅んだように崩れ去っているのだ。とても三年前まで人が住んでいたとは思えない程の有様だ。俺はこの廃墟の様子を詳しく知るために散策を開始する。飛鳥と耀も遅れて違う方向で散策する。

「…………断言するぜ。どんな力がぶつかっても、こんな壊れ方はあり得ない。この木造の崩れ方なんて、膨大な時間をかけて自然崩壊したようにしか思えない」

「此処が全く使われていない離れだと言われた方がまだ納得するな……………」

逆廻はそう結論付けるながら冷や汗を流している。俺も石碑のように枯れ果てた街路樹に手をかけながら思ったこと言い、飛鳥と耀も廃屋を見て複雑そうに感想を述べる。

「ベランダのテーブルにティーセットがそのまま出ているわ。これじゃまるで、生活していた人間がふっと消えたみたいじゃない」

「…………生き物の気配も全くない。整備されなくなった人家なのに獣が寄ってこないなんて」

二人の感想は逆廻よりも重く感じた。黒ウサギは廃屋から目を逸らしながら朽ちた街路を進みだす。

「…………魔王とのゲームはそれほど未知の戦いだったのでございます。彼らがこの土地を取り上げなかったのは魔王としての力の誇示と、一種の見せしめでしょう。彼らは力を持つ人間が現れると遊ぶ心でゲームを挑み、二度と逆らえないよう屈服させます。僅かに残った仲間達もみんな心を折られ……………コミュニティから、箱庭から去って行きました」

黒ウサギは感情を殺した瞳で風化した街を進んでいく。飛鳥や耀も複雑な表情でその後が続いていく。だが、逆廻だけは瞳を輝かせ不敵に笑っていた。

「魔王——か。ハッ、いいぜいいぜいいなオイ。想像以上に面白そうじゃねえか……………！」

そう呟きながら逆廻も黒ウサギ達の後について行った。

俺はそれを確認すると枯れた街路樹に拳を叩きつける。街路樹が大きく凹んだがそんなのどうでもいい。俺は遊び心で居場所を、仲間を潰す奴が一番嫌いなんだ。

「……………上等だ。ここを潰しに来るのなら魔王だろうが神だろうが——全て返り討ちにして潰してやるぜ」

第七章

—— “ブローネーム” ・ 居住区画、水門前。

あの後気を落ち着かせてから黒ウサギ達を追いかけ、廃墟を抜けて徐々に外観が整った家が立ち並ぶ場所に出てきた。この先に貯水池があり水樹の苗を設置するらしいので、それを見に行くため俺達はそのまま居住区を素通りする。貯水池に着くとジンとコミュニティの子供達が清掃道具を持って水路を掃除していた。

「あ、みなさん！水路と貯水池の準備は調ってます！」

「ご苦労さまですジン坊ちゃん♪皆も掃除を手伝っていましたか？」

黒ウサギが子供達に近寄っていくとワイワイと騒ぎ出して黒ウサギの元に群がっていった。

「黒ウサのねーちゃんお帰り！」

「眠たいけどお掃除手伝ったよー」

「ねえねえ、新しい人達って誰!？」

「強い?!?カッコいい!？」

「YES!とても強くて可愛い人達ですよ!皆に紹介するから一列に並んでください
ね」

パチン、と黒ウサギが指を鳴らすと、さつきまで黒ウサギに群がっていた子供達は綺麗に一列で並びだした。人数は二〇人程で、中には猫耳や狐耳の少年少女もいた。

ふつと逆廻達を見ると、三人は苦笑いで子供達を見ていた。……子供が苦手なのだろうか?まあ、これから衣食住を共にするんだからそれは早く慣れてもらおうしかない

な。視線を子供達に戻すと既に並び終わっており、黒ウサギがコホン、と仰々しく咳き込んで俺達を紹介しだす。

「右から逆廻十六夜さん、久遠飛鳥さん、春日部耀さん、神崎龍騎さんです。皆も知っている通り、コミュニティを支えるのは力のあるギフトプレイヤー達です。ギフトゲームに参加できない者達はギフトプレイヤーの私生活を支え、励まし、時に彼らの為に身を粉にして尽くさねばなりません」

「あら、別にそんなの必要ないわよ？もっとフランクにしてくれても」

「そうだな。俺もそっちの方が気楽でいいわ」

「駄目です。それでは組織は成り立ちません」

飛鳥と俺の申し出を、黒ウサギが今まで一番厳しい声音で却下された。

「コミュニティはプレイヤー達がギフトゲームに参加し、彼らのもたらす恩恵で初めて

生活が成り立つのでございます。これは箱庭の世界で生きていく以上、避ける事が出来ない掟。子供のうちから甘やかせばこの子供達の将来の為になりません」

「……………そう」

「俺としてはそういう礼儀とか苦手だから子供らしくしてほしいんだけどな」

「龍騎さん」

「分かってるって。郷に入れば郷に従え、てな。黒ウサギの言っていることも一理あるし、一応納得しておく」

これまで三年間黒ウサギ一人でコミュニティを支えていたからこそ知る厳しさなんだろう。まあ、これから俺達が頑張って子供達も黒ウサギも楽になるように一肌脱ぎますか。

「此処にいるのは子供達の年長組です。ゲームには出られないものの、見ての通り獣の

ギフトを持っている子もおりますから、何か用事を言いつける時はこの子達を使つてく
ださいな。みんなも、それでいいですね？」

「「「よろしくお願いします！」「」」」

二〇人程の子供達が一斉に大声で叫ぶ。

「ハハ、元気がいいじゃねえか」

「子供はこうでなくちやな。よろしくな、お前ら」

「そ、そうね」

その大声に俺と逆廻は笑い、飛鳥と耀は複雑そうな表情を浮かべていた。

「さて、自己紹介も終わりましたし！それでは水樹を植えましょう！黒ウサギが台座に
根を張らせるので、十六夜さんのギフトカードから出してくれますか？」

「あーっ」

逆廻はポケットからギフトカードを取り出し、水樹の苗を発現した。黒ウサギはその水樹の苗を受け取る。………本当に便利だなあのギフトカード。あれってギフト以外にも収納可能なのだろうか？

そんなどうでもいいことを考えながら貯水池とその周辺を見回す。水路は長年使われた形跡がないが骨格だけはしっかりと残っていた。所々、罅割れがあつたがこれなら水路として活用することができるだろう。近くで耀も石垣に立ちながら物珍しそうに周りを見回す。

「大きい貯水池だね。ちよつとした湖ぐらいあるよ」

「ニヤニヤニヤ、ニヤアニヤツニヤアア？」

耀の三毛猫が鳴き声を上げると、黒ウサギが苗を抱えたまま振り返った。………そう

いえば黒ウサギも大体の生物の言語が分かるんだったな。傍目から見ると黒ウサギが危ない人に見えるな。……本人と耀がいる前では絶対口に出さないが。

「はいな、最後に使ったのは三年前ですよ三毛猫さん。元々は龍の瞳を水珠に加工したギフトが貯水池の台座に設置してあったのですが、それも魔王に取り上げられてしまいました」

「龍の瞳？何それカッコいい超欲しい。何処に行けば手に入る？」

「さて、何処でしょう。知っていても十六夜さんには教えません」

逆廻が瞳を輝かせ、黒ウサギに問いかけるが黒ウサギは適当にはぐらかす。それは妥当な判断だろう。逆廻がそんな面白いことを教えた瞬間、絶対龍がいる場所に向かうからな。これ以上この話題が不味いと思ったのか話を戻すためジンが貯水池の詳細を説明する。

「水路も時々整備していたのですが、あくまで最低限です。それにこの水樹じやま

だこの貯水池と水路を全て埋めるのは不可能でしょう。ですから居住区の水路は遮断して本拠の屋敷と別館に直通している水路だけを開けます。此方は皆で川の水を汲んできたときに時々使っていたので問題ありません」

「あら、数kmも向こうの川から水を運ぶ方法があるの？」

飛鳥がふつと思つた疑問を忙しい黒ウサギに代わつてジンと子供達が答えた。

「はい。みんなと一緒にバケツを両手に持つて運びました」

「半分くらいはコケて無くなっちゃうんだけどねー」

「黒ウサのねーちゃんが箱庭の外で水を汲んでいいなら、貯水池をいっぱいにしてくれるのになあ」

「……………そう。大変なのね」

……まあ、そうじゃなければ黒ウサギが水樹の苗だけであんなに大喜びすることはないだろう。

俺達が話している間、黒ウサギは着々と準備を進めており既に貯水池の中心にある柱の台座の場所にいた。

「それでは苗の紐を解いて根を張ります！十六夜さんは屋敷への水門を開けてください
！」

「あー、あー」

黒ウサギに頼まれた逆廻は貯水池に下りて水門を開け、黒ウサギは苗の紐を解く。すると、根を包んでいた布から大量の水が溢れ返り、その勢いで貯水池を埋めていく。……あれ？その貯水池の門を開けるために下りた逆廻をどうするつもりだ？そんなことに疑問に思っていると下から逆廻の慌てた叫び声が聞こえてきた。

「ちよ、少しはマテやゴラア!!流石に今日はこれ以上濡れたくねえぞオイ！」

逆廻が激流から逃げるため石垣まで跳躍した。……………やはり、逆廻のことは考えられていなかったのか。……………無事だし別にいいけど。

紐を解かれた水樹は台座の柱を瞬く間に根を絡め、水の勢いを増していく。

「うわおー！この子は想像以上に元気です♪」

「確かに……………これは凄いな」

水樹は水の放出が衰えることはなく、そのまま一直線に屋敷への水路を通って満たしていく。その光景は溢れ出た水と月明かりで眩い輝き放つ水樹の青葉と合わさりとても幻想的であった。

「……………コレを見ただけでも箱庭に来て良かったと思えるな」

「そうね。でも、箱庭には素敵なところがまだまだ沢山あるみたいよ？」

俺が小声で感想をこぼすとそれが聞こえたのか飛鳥と耀が近寄ってきた。

「十六夜が世界の果てで見た『トリトニスの大滝』は絶景だったって言ってた」

「へえ……。それは一度見てみたいものだ」

「……………だけどその前に」

「明日、あの外道がいる『フォレス・ガロ』を倒さなくてはいけないわね」

「ああ、そういうことだ。二人共、力を貸してくれるか？」

「ええ。必ず勝ちましょう」

「……………うん。絶対負けない」

俺達は未だ勢いが衰えない水樹と水が溜まっていく貯水池を見下ろしながら明日のギフトゲームに勝つと決意を固めたのであった。

☆☆☆

その後黒ウサギ達に屋敷まで案内され、着いた頃には既に夜中になっていた。屋敷はとも大きく流石は元最大手のコミュニティと言ったところだろう……：……：皮肉と受けいられそうなので黒ウサギ達には言わないが。耀もこれから俺達の本拠となる屋敷を見上げながら感嘆したように呟く。

「遠目から見てもかなり大きいけど……：……：近づくと一層大きいね。何処に泊まればいい？」

「コミュニティの伝統では、ギフトゲームに参加できる者には序列を与え、上位から最上階に住む事になっております……：……：けど、今は好きなところを使っただいて結構でございませすよ。移動も不便でしょうし」

「男子と女子が同じ屋根の下で過ごすのはどうかと思うんだが……。あつちの屋敷は使つてはいけないのか？」

そう言いながら俺は屋敷の脇に建つ別館らしきものを指さす。

「ああ、あれは子供達の館ですよ。本来は別の用途があるのですが、警備上の問題でみんな此処に住んでいます。龍騎さんが良ければ一二〇人の子供達と一緒に」

「そうだな。一度だけあつちに一泊するか」

「まあ、普通は嫌——え。っ!？」

俺は驚愕し過ぎて目が点になっている黒ウサギを無視し、別館に歩み寄る。だが、意識を取り戻した黒ウサギに回り込まれた。

「い、行かせません！龍騎さんだけは絶対あの館には泊ませられません！」

「おい。さつきと言っていることが矛盾しているぞ」

勧めたのは黒ウサギの方からなのに何故止められなきやいけないんだ？俺が何かおかしなことでも言ったか？

「何だよ。俺が行ったら不味いことでもあんのか？」

「不味いも何も今の会話で龍騎さんだけは絶対に子供達の館は行かせないと決めました！！」

……………？本当に黒ウサギは何がしたいんだ？今の黒ウサギは何かを守ろうとしているように見えるんだが……………。ふむ……………黒ウサギが必死になってまで守ろうとしているものか……………。面白そうだし黒ウサギを振り切ってもあの館に行つてやるか！絶対面白そうなものがあるはず——。

「行かせませんよ……………子供達の貞操のためにも！！」

「ちよつと待て！今、聞き捨てならないことが聞こえてきたぞ！」

何で俺が子供達の館を一泊するだけでそんな結論に至るんだあの馬鹿ウサギ!?! ああ、飛鳥と耀の視線が冷たくなってきた！くそっ……………何とかして弁明をしなくては。

「どんな思考回路をしたらそうなるんだ!?! お前の頭のネジでも外れているのか!?!」

「慌てるということは本気で……………!?! 龍騎さん！貴方様はある意味この中で一番の問題児ではありましたが僅かでありますが常識だけはあると思っていましたのに……………失望しました!?!」

「喧嘩売ってんだよな？ お前絶対俺に喧嘩売っているよな!?!」

何で俺が罵倒されなくちゃいけないんだ!?! 飛鳥と耀の視線が絶対零度まで下がっているし、距離も遠ざかっている気がする……………くっ……………!?! 誰でもいい！この状況をどうにかしてくれ!!

「おいおい。ちよつと待てつて。焦りすぎだ黒ウサギ」

予想外にもこの空間を制したのは逆廻だった。あいつの性格上、傍観すると思つていたんだが……いや、この際誰でもいい！頼む逆廻！お前だけが頼りなんだ……！この空気を……誤解を解いてくれ！

「さつき聞いたんだがな。コイツはな……自分の性癖を治すためにあの館に行くんだ」

……はっ？えつ、俺そんなこと言つた覚えどころか逆廻と話したことなんて殆どなかったんだけど？

「人の性癖なんてそう簡単に治せるものじゃないんだ……。助けてやりたいがコレはあいつの問題なんだ。俺達が入り込む余地はないんだよ……。精々、俺達が出るのは暖かく見守ることだけだ」

「逆廻。さつきの廃墟に行くぞ。あそこでなら誰にも迷惑掛けずに存分に暴れられるか

らなつ……………！」

こいつ、火に油を注ぐどころかガソリンをぶっかけやがった！あのニヤついた顔を原型が無くなるまで殴りつけたいつ……………！しかも今の言葉で黒ウサギは落ち着き、二人からの軽蔑した視線は無くなったが三人から生暖かい視線で俺を見つめてくる……………。

「……………すみません龍騎さん。何も知らずに失礼なことを……………」

「……………ええと、私どうやって励ませば」

「……………私達に出来る事があつたら何でも言つて。その……………友達だから」

「^げ、誤解だ！俺にそんな性癖は」

「さつさと屋敷の中に入ろうぜ。じゃないと、コイツの決意が揺らいでしまう……………」

「あつ、行かないでくれ！弁明を……………弁明の余地を！」

逆廻の後押しにより三人は申し訳なさそうに俺を数秒だけ見つめて先に館に入ってしまった。それを見送ることしか出来なかった俺は膝から崩れ去る。最悪だ……。一番解きたかった誤解が解けなかった……。これで俺はあの三人の心の中でロリコンという不名誉なレッテルを貼られてしまった。どうしてこうなった……。!?

「じゃあ、俺も行くわ。お前もそつちの連中と話でもしにいったらどうだ？」

……………何だよ。逆廻も気付いていたのか。俺は膝に付いた砂埃を叩き落としながら立ち上がり、逆廻と視線を合わせる。

「気付いていたなら言えよ逆廻。てか、お前のせいで俺が変態だと思われたじゃねえか」「心配掛けねえようにはぐらかしていたお前に合わせたただけだ。文句言われる筋合いはないぜ？」

「つたく、後で誤解を解いてくれよ？あのままだと俺このコミュニティでやっていける

自信なんてないぞ」

「考えておくれ。……さてと、俺もあつちの奴らと話をつけておくか。……一応聞いておくがお前も俺と同じ考えだろ？」

「多分な。じゃあ俺はそろそろ行くから逆廻も上手くやれよ？」

「ああ。後、俺の名は十六夜様だ。そっちもしくじるんじゃねえぞ龍騎」

「…………それはこつちのセリフだ十六夜」

そう言葉を交わし、俺達は互いに別の方向へと歩いていった。

☆

十六夜の月。雲で少し隠れているがその光は子供達が眠る別館を照らし、夜の独特の雰囲気漂っている。その空間に龍騎は何かを待っているかのように堂々と別館の裏

で立ち尽くしている。

「……………はあ。ガルドも狡い奴だな。ギフトゲームに参加できない子供達を狙うとは」

龍騎は呆れたように溜息をこぼし、肩をすくめる。だが、その目は言葉とは逆にナイフのように鋭く周囲の木々を睨みつける。

「しかも、こんなに多勢で来ちゃって……………おたくら隠れる気あるの？ さつきからこの周辺にいるのは分かってんだ。さつきと出て来い」

誰かに話しかけるように周囲の木々に言葉を放つ。風が木々を揺らし、別館は静寂に包まれる——が、風が吹いていないのにも関わらずガサツと周囲の木々から揺らす音が響いた。音が大きくなるにつれ、木々から人影が龍騎の前に現れ出す。だが、人影は一つだけではなく次第に増えてき……………最終的には三〇前後の人影が別館の裏に現れだした。

「……………いつから気付いていた小僧オ」

月を隠す雲が吹き払われる。月明かりが人影を照らし、その姿かたちが明らかになる。ある者は犬や猫の耳、ある者は長い体毛に鋭い爪、ある者は爬虫類のような瞳に鱗と人とは一部かけ離れていた。ここにいる全員が人をベースとして「獣」のギフトを持つている者達……しかし、ギフトの格が低いために中途半端にしか変幻しか出来ないのだ。

代表格らしき人物が龍騎に話しかける。龍騎は面倒くさそうに頭を掻きながら適当にその問いを答える。

「最初から………って言っても分からんか。俺達が館に着いた時からだ。まあ、俺以外にももう一人気付いていたみたいだがな」

「ほう………それなりには出来るようだな？だが、貴様は此処にいてもいいのか？」

「それって水樹の方か？あっちならさつき言ったもう一人が守っているぜ」

そのもう一人は十六夜である。十六夜も龍騎と同じタイミングにこの「ノーネーム」の居住区画に何者かが侵入しているのに気付いたのだ。だが、侵入者は二組に分かれており、目的対象は二つあると推測することが出来る。しかし、龍騎達は瞬時にガルドが狙うものの特定はついていたのだ。

その一つは水樹がある貯水池。今、「ノーネーム」の命綱は水樹であるため、もし盗まれてもしたら大打撃を受けるだろう。もう一組は此処、別館である。ガルドの手口は既に知っている龍騎達は必ず子供達を誘拐しに現れると断定したのだ。よって先程の会話により十六夜が水樹、龍騎は子供達が眠っている別館を護衛すると決まったのである。

「……………くつくつく。なら、そいつが来る前にさっさと片付けなくてはな」

代表格が下品な笑みを浮かべ、周囲の獣人達が戦闘態勢に入る。だが、龍騎は慌てた様子もなく、自然体で獣人達を睨みつけるままである。

「……………どうやらお前達はガルドに脅かされているというわけではなさそうだな」

「ハッ！あんな弱者共と一緒にしてもらっては困る。我らはガルド様の直属の部下。ガルド様の命によりガキ共を貰いに来たのだ。命が惜しければそこを退くのだな」

「俺ごと殺す気満々なくせによく言うぜ。それに同じコミュニティの仲間達の危機を黙って見てろと？」

「フンッ………所詮名無しだな。実力・戦力の差を分からないとはな。ガルド様も何故このような連中を警戒するのか理解に苦しむ」

代表格は侮蔑したような態度で龍騎を見下す。龍騎はその戯言を聞いたかのように呆れて再度溜息をこぼす。その態度に代表格は忌々しく龍騎を睨みつけ怒りをぶつけるように次の言葉を放つ。

「——さて、我らも腹が空いてきたのでな。貴様もあのガキ共と一緒に喰らってやる。光栄に思うんだな！」

その言葉と共に周囲にいる獣人達が龍騎に一斉に襲いかかる。それでも戦闘態勢も

で出来たテニスボールぐらいの玉が十五前後浮遊している。だが、それよりも目を引くのは龍騎の足場には血の海が広がっており、それを作り出した原因は無残に殺され死体となつた獣人達だつた。自分と同じく腕や脚が無くなっているもの、酷いものだと体中が穴だらけになっているのがいた。たった一瞬の出来事で自分達の部隊が全滅したのである。

それをやった張本人である龍騎は顔色一つ変えず、侮蔑の視線で代表格を見下す。その冷酷さが代表格に恐怖を駆り立てる。

「——誰が誰を喰らうって？ちゃんと実力の差を理解してから言うんだな」

無表情で下ろしている手を代表格に向かって伸ばす。その行動は自分を殺す予備動作だと思つた代表格は命乞いをしだす。

「ま、待つてくれ！俺が悪かつた！命だけ許してくれ!？」

「何を言つてんだ？仕掛けてきたのはお前らだろ。俺達を殺しに来たのなら当然お前らも殺される覚悟はあるはずだろ？」

必死に命乞いをする代表格だが、龍騎は気にもせず、水玉を操っていく。水玉は月明かりで怪しく輝きながら代表格の周囲まで移動する。それは死刑宣告と同義だった。

「ついでに教えておくと俺はコミユニティの中では一番甘くないから。仲間達が命の危機にでくわしたのなら俺は元凶を排除するまでだ」

「や、止めてく」

「却下。ガルドもそっちに行かせるからさっさと地獄に堕ちてろ」

そう言いながら腕を振り落とす。それが合図となって一斉に水玉が圧縮されていき、一部、凄いい勢いで噴出——レーザーとなって代表格を襲う。まともに喰らった代表格は肉体を貫通し、体中が穴だらけとなり血の海を作りながら糸が切れたように大地に倒れこむ。それを確認した龍騎は次に炎を発現させ、死体を燃やしていく。別館裏に死体が燃やすことで発生した腐臭が漂う中、今度は龍騎は地面に手を付ける。すると、土が盛り上がり炭となった死体と血を埋めていく。その少しした動作だけで別館裏は何も

なかつたかのように全て元通りとなっていた。

ザツ、と風が吹き木々を揺らし、龍騎は頭を搔きながら三度目の溜息をこぼす。

「……………そろそろあつちも終わつたか？ 此処にいつまでもいるのは胸糞悪いし、本館に行くか」

龍騎は別館裏から背を向け、十六夜達がいるであろう本館に足を進めていくのであった。

第八章

俺はガルドの刺客を片付けた後、十六夜に報告するため本館に足を踏み入れたのだが、どこで集合とか決めていなかったのを思いだして、一つ一つ部屋を調べていくことになってしまったのだ。探し歩いて三〇分ぐらい経ち、最上階の大広場っぽい所に行くところから十六夜とジンの話し声が聞こえてきたので俺はノックもせず室内にずんずん入っていった。

「おう、お前ら。何か面白いことでも起きたか？」

「龍騎さん!?!聞いてくださいよ!十六夜さんが」

「ちよつと待って。一旦、落ち着いてから話せ」

興奮し、大声で叫ぶジンを宥めつつも十六夜に視線を向ける。その視線の意図を理解

したのか十六夜は普段通りの軽薄な笑いを浮かべながら成果を発表しだした。

「こっちは作戦通りにいったぜ？お前は？」

「残念ながらこっちは失敗。ガルドの直属の部下だったから意味なかったしな。肉体言語で帰ってもらったよ」

……まあ、ガルドの元には一生帰れないけどな。内心苦笑しつつ、俺の成果を発表するとジンは不思議そうな顔で俺に問いかけてきた。

「……………それどういうことですか？」

「言葉通りだよ。お前達と同じように子供達が眠っている別館にガルドの部下が現れたんだ。目的は子供達の誘拐」

「なっ……………!?み、皆は無事なんですか!?!」

「俺が何の為にあっちに行つたと思つてゐるんだ？ ちゃんと追い払つたよ。子供達は全員無事だ」

「よ、良かった……………」

ジンは自分の知らないところで起きていた事に驚愕し、子供達の安否を気にかける。俺がちゃんと子供達の無事だと言うと緊張の糸が切れ脱力しかけるジン——が、何か引つかかるところがあつたのか再度俺に問いだしてきた。

「龍騎さん……………さっき何て言つていました？」

「え？ 『子供達は全員無事だ』」

「違います。もつと前です」

「『俺は神崎龍騎。まあ、よろしくな』」

「戻り過ぎです！それ、一番最初に挨拶した時に言ったことですよね!？」

『ジン！死ぬなっ！ジイイイイイイイイイイイイイイイインツ!!』

「何で僕が死んでることになっているんですか!？」

『黒ウサギ……まさかお前が犯人だったなんて』

「僕が死んだの黒ウサギのせいだったんですか!？」

『『続きはWEBで』』

「意味が分からないですよ!?!いい加減ふざけないでください!」

「なぬっ!?!俺からポケを取ったら何が残るといふんだ!?!」

「知りませんよ!?!」

と、ここでツツコミ疲れたジンが息を荒らげながら肩を落とす。十六夜に視線を向きなおすと今のやり取りをケラケラと楽しそうに笑っていた。うん、満足そうで何よりだ。

「さつきから俺が全部言っていることを否定しやがって……『こつちは失敗』とか『お前達と同じ』とか別に俺が言ったことなんてどうでもいいだろう」

「今、さらつと答え言いましたよね?というより、どういふことですか!?何故こつちにも襲撃があつたことを知っているのですか!?!」

ジンが凄いい勢いで詰め寄ってくる。いくらジンが子供でも男に寄られても嬉しくないんだが………つて、流石にふざけるのはここまでにしておくか。

「知ってるも何も館周辺にガルドの手先が隠れていたと最初から分かっていたからだ。それがどうかしたか?」

「確かにそれは問題ないです。僕が言っているのは『こっちは失敗』という言葉………何で十六夜さんが僕達を『打倒全ての魔王とその関係者』になるように行動をしたということを知っているのですか？それにその言い方だとまるで」

「俺も十六夜と同じようにしようとしていた………それが何か問題でもあるのか？」

「………龍騎さんも自分の趣味の為にコミュニティを滅亡に追いやるつもりですか？」

しれっと答える俺にジンの口調が厳しくなる。てか、こいつなんか勘違いしてね？俺は勘違いを直すため声をかけようとするが、その前に十六夜に右手で制された。すると、十六夜は一步前に出て自分の考えをジンに伝えだした。

「いいや。これはコミュニティの発展に必要な作戦だ」

「作戦？………どういうことですか？」

俺を睨みつけしないで下さいジン君。今、説明しているのは十六夜だから。睨みつける

相手間違っているから。

「先に確認したいんだがな。御チビは俺達を呼び出して、どうやって魔王と戦うつもりだったんだ？あの廃墟を作った奴や、白夜又みたいな力を持つのが“魔王”なんだろ？」

十六夜の追求にぐつとジンは黙り込んでしまった。しばし考える素振りをし、ジンは自分が考えていた方針を語りだす。

「まず………水源を確保するつもりでした。新しい人材と作戦を的確に組めば、水神クラスは無理でも水を確保する方法はありましたから。けどそれに関しては十六夜さんが想像以上の成果を上げてくれたので素直に感謝しています」

「おう、感謝しつくせ」

ケラケラ笑う十六夜をジンは無視して語り続ける。

「ギフトゲームを堅実にクリアしていけばコミュニティは必ず強くなります。たとえ力のない同士が呼び出されたとしても、力を合わせればコミュニティは大きくできます。ましてやこれだけ才有る方々が揃えば……どんなギフトゲームにも対抗できたはず」

「期待一杯、胸一杯だったわけか」

全く悪びれた様子がない十六夜にとうとうジンは我慢できずに口調を崩して叫びました。

「それなのに……それなのに、十六夜さんと龍騎さんは自分の娯楽の為にコミュニティを危機に晒し陥れるような真似をした!!魔王を倒すためのコミュニティなんて馬鹿げた宣誓が流布されたら最後、魔王とのゲームは不可避になるんですよ!!そのことを本当に貴方達は分かっているのですか!？」

ジンは叫ぶと同時に大広間の壁を強く叩きつけた。余程俺達の行動が腹に据えかけたのだろう。……だが、俺達も考えなしに行動を起こしたわけではない。それを伝えるため俺はジんに話しかける。

「おい、待てつてジン。俺達だつて」

「龍騎さん！貴方も大切な時にはふぎけるばかりじゃないですか！コミュニティは………箱庭の世界はそんなに甘くないです！もうちよつと皆の為に後先考えて」

「黙れ、ジン＝ラッセル」

俺は冷徹な声音と侮蔑の視線に興奮して話を聞かなかつたジンは僅かに怯む。………子供を怯えさせるのは気が進まないがジンには今から現実をたつぷりと教えてやる。

「そんな机上の空論で再建とか誇りとか………お前本気で取り返す気あんのか？」

「なつ!!?僕はちゃんとコミュニティのことを考えて最善な計画を」

「無理だな。それでは一生かかっても名も旗も魔王から取り返せない」

ジンの反論を一刀両断する。ジンが怒りを込めて睨みつけてくるが無視し、そのまま続ける。

「先代のコミュニケーションが魔王と戦って敗けてしまったんだろ？それなら魔王に勝つためには戦力は少なくとも倍以上は必要になる……お前、一体何年かけるつもりだ？」

「えっ………？」

「十年、二十年、下手したら三十年はかかるな。そうなったら俺達は完璧に戦力外になるだろうな。そうなると、五十年、百年………もしかしたら一生返ってこないこととなる」

「あっ………」

ようやくジンは自分の計画が穴だらけだと気付いたようだ。だが、俺は更に畳み掛けるように言葉を放つ。

「ギフトゲームに参加して力を蓄える？そんなの大前提だ馬鹿野郎。十六夜が聞いてるのは魔王をどうやって倒すかだ。それにコミュニティを大きくするのも名と旗印がいる……だが、俺達にはそんなものは無い。コミュニティの象徴も無く、『ノーネーム』のままだと口コミも効果無し。だから俺達……箱庭のことを知らない俺達という戦力をわざわざ異世界から呼んだんだろ？」

「……………」

「沈黙は肯定とみなすぞ。今、俺達の現状は信用が出来るものが無いんだ。腹立たしいが『サウザンドアイズ』の女性店員が俺達を客として扱わなかったのは正しい判断だ。そんな奴らを信用したところで良くて無利益、最悪危険に巻き込まれる可能性だってあるからな。お前はそんなハンデを背負いながら先代のコミュニティを超えなくてはならないんだぞ？」

「先代を……超える……?!？」

ジンは驚愕に満ちた顔になっていく。『打倒魔王』を掲げる限り、絶対避けては通れ

ない壁……。それをジンは成し遂げなければならないのだ。言い返すことも出来ないジんに、呆れたように追い打ちをかける。

「その様子だと何も考えていなかった……。いや、目を逸らし続けていたことだな」

「……………」

悔しさと責任の重さに俯きだすジン。……………だが、更に俺は残酷な現実をジンに突きつける。

「ジン＝ラッセル。お前、自分で皆の為にと言っただろ？その通りだ。リーダーである以上、コミュニティの子供達の命は全てお前が握っていることになる。お前が仕切り、行動することで仲間が死ぬことだってある——リーダーはそれ程重大な責任と覚悟が付き纏うんだ」

「……………」

「それを背負いきれないと言うならば——黒ウサギ、十六夜、飛鳥、耀……誰でもいい。リーダーを明け渡せ。覚悟も無い奴がやっても足手纏いだ。」

……とりあえず俺が言いたかった事は全て言い切った。これで潰れるのならそこの器だったということだ。もし、潰れたとしたら違うプランに立て替えておかなければ……。

「……………せん」

「うん？なんか言ったか？」

ジンから何か聞き取れたが、顔が俯いているのと小声で何を言っているのか分からなかった。俺はちゃんと聞き取ろうとジンに近づこうとする——と、ジンは俯いていた顔を上げた。

「誰にも譲りたくありませんと言ったのですよ！確かに僕は成り行きでリーダーになりました。それに僕は黒ウサギに負担ばかりかけて甘えていたことも認めます。しかし、

僕だつて生半可な気持ちでリーダーをやっているではありません！龍騎さん達のように強力なギフトや知能は持つていません……ですが！この気持ちだけは……：……：コミュニケーションを再建する気持ちだけは誰も譲りたくないんです!!」

俺から視線を逸らさずに言い切ったジン。その瞳には先程はなかった覚悟を宿していた。……：……：これは嬉しい誤算だな。数日は悩み尽くすと思つていたんだが、まさかたつたこの場で言い切るとは……：……：こいつ、育て次第ではもしかしたら化けるかもな。だが、ここで褒めても成長もしないし、責任の重さを自覚したのに無駄になるかもしれない。俺は敢えてジンに厳しくすることにした。

「なら、これからそれを行動で俺を納得させろ。俺が認めない限り、"リーダー"なんて呼ばないからな？子供だからと甘い評価はする気はない。それを承知でお前はこれからもリーダーと名乗るか？」

「はい！絶対龍騎さんに認めるリーダーになってみせます！」

……：……：うん。これなら間違つた道に踏み外さず、冷静に物事を考えられるようになるだ

ろう。後は、未熟な部分を俺がフォローするなりしたらいいだけだな。……………さてと、俺の用は終わったのでそろそろ空気化になっている十六夜にバトンタッチしなきゃな。

「意気込みは良し……………で、終わりたいところだが最後に一つ。もし自分が考えても妙案が思いつかない時は誰でもいいから相談しろよ？一人で考えたって良い案なんか浮かばねえしな……………そうだろう十六夜？」

「つたく、やつと俺の出番かよ。説教長すぎなんだよ。校長先生かお前は」

「うっせい。言わないんなら俺が言うぞ？」

十六夜の愚痴に少しムカついたので急かすが、本人は肩をすくめるだけであまり効果がなかった。

十六夜はジンに近づき、ジンの肩を強く握り締め、悪戯っぽく笑い、

「確かに龍騎が言ったように俺達には名も旗印も無い……………なら、後はリーダーの名前

を売り込むしかないよな？」

そう言うのと、ハツと十六夜の意図に気付いた様に驚愕する。

「僕を担ぎ上げて……コミュニケーションの存在をアピールするということですか？」

「ああ。悪くない手だろ？」

自慢げに笑う十六夜の顔と不敵に笑みを浮かべる俺の顔を先程とは違う視線で交互に見つめてくる。そして、ジンはその作戦について真剣に考えだした。

「た、確かに……それは有効な手段です。リーダーがコミュニケーションの顔役になってコミュニケーションの存在をアピールすれば……名と旗に匹敵する信頼を得られるかも」

そう。それが俺達がコミュニケーションを再建を可能にするために考えついた作戦なのだ。まあ、相談も無しで俺と十六夜が互いに勝手に察し、実行したものだけだな。

「けどそれだけじゃ足りねえ。噂を大きく広めるにはインパクトが足りない。だからジン・ラッセルという少年が“打倒魔王”を掲げ、一味に一度でも勝利したという事実があれば——それは波紋になって広がるはず。そしてそれに反応するのは魔王だけじゃない」

「そ、それは誰に？」

「同じく“打倒魔王”を胸に秘めた奴らに、だ」

ジンが息を呑んだのが分かる。十六夜が言うことは大いに有り得るからだ。魔王は娯楽の為に力のあるコミュニティに戦いを挑む。その結果でコミュニティを崩壊させられた者は星の数ほどいるだろう。その中に魔王に敗れ去った実力者が再起を図りながら“打倒魔王”を胸に秘めている奴がいる可能性はかなり高い。そこに“打倒魔王”を掲げる実績のあるコミュニティが現れば無反応とはいかないだろう。

「僕の名前でコミュニティの存在を広める……」

「そう。今回の一件はチャンスだ。相手は魔王の傘下、しかも勝てるゲーム。被害者は数多のコミュニティ。ここでしつかり御チビの名を売れば」

「最低でも此処、二一〇五三八〇外門付近のコミュニティに小さい波紋が広がるかもしれない。それにガルドによって苦しむコミュニティに恩を売れば、更に噂は広がるだろうな」

「ま、御チビ様が懸念するように他の魔王を引き寄せる可能性は大きいだろうよ。けど魔王を倒した前例もあるはずだ。そうだろ？」

この館に来る移動中、俺は魔王について少し黒ウサギに聞いてみると、魔王を倒せば魔王を隷属させられる。ことが可能らしいのだ。これは魔王を倒した存在の証明になり、同時に強力な駒を組織に引き入れるチャンスなのだ。

「今のコミュニティに足りないのはまず人材だ。俺並とは贅沢言わないが、俺の足元並は欲しい。けど伸るか反るかは御チビ次第。他にカッコいい作戦があるなら、協力は惜しまんぜ？」

ニヤニヤと笑みを浮かべる十六夜の顔をジンは見つめ直す。その瞳には先程の怒りはなかった……が、大きな不安要素があるせいか賛同の声は出てこなかった。しばし待つと、ジンはある提案を提示してきた。

「二つだけ条件があります。今度開かれる『サウザンドアイズ』のギフトゲームに、十六夜さんと龍騎さん二人で参加してもらっていいですか？」

「なんだ？俺達の力を見せろってことか？」

「それもあります。ですが理由はもう一つあります。このゲームには僕らが取り戻さなければならぬ、もう一つの大事な物が出品される」

俺達『ノーネーム』が取り戻さなくてはならない物……。名、旗、そして――。

「昔の仲間……ということか？」

「はい。それもただの仲間ではありません。元・魔王だった仲間です」

“元・魔王”という単語に十六夜の瞳が光る。軽薄な笑みが凄みを増し、危険な香りがする雰囲気を漂わせ始めた。俺もその事実に関心驚愕しながら眉をしかめる。

「おいおい……………。元・魔王が仲間だったってその意味する事は多いぞ?」

俺の問いにジンは頷き返す。

「はい。お察しの通り、先代のコミュニティは魔王と戦って勝利した経験があります」

「そして魔王を隷属させたコミュニティでさえ滅ぼせる——仮称・超魔王とも呼べる超素敵ネーミングな奴も存在している、と」

「超魔王ってダサくねえ?せめて魔神の方が良いと思うぞ?」

「そ、そんなネーミングで呼ばれてはいません。魔王にも力関係はありますし、十人十色

です。白夜叉様も「主催者権限」を持っていますが、今はもう魔王とは呼ばれていません。魔王はあくまで「主催者権限」を悪用する者達の事ですから」

それを悪用されるようになって「魔王」という言葉が出来たのだとジンは語る。

「ゲームの主催はその「サウザンドアイズ」の幹部の一人です。僕らを倒した魔王と何らかの取引をして仲間の所有権を手に入れたのでしょう。相手は商業コミュニティですし、金品で手を打てればよかったですか……」

「貧乏は辛いつてことか。とにかく俺達はその元・魔王様の仲間を取り戻せばいいんだな？」

ジンは頷き返す。確かにそれが出来たらコミュニティの再建はかなり近づくだろう。やらない手ではないな……。

「はい。それが出来れば対魔王の準備も可能になりますし、僕も十六夜さんの作戦を支持します。ですから黒ウサギには内密に……」

「あいよ」

「了解」

まあ、あの黒ウサギもかなり心配性だからこんな話を聞いたら怒り狂いそうだしな。そんなことを思っていると十六夜が席を立った。大広間の扉を開けて自室に戻ろうと扉を閉める——前に何か思いついたのか軽薄な笑みを浮かべながらジンに声をかけた。……………なんか嫌な予感がする。

「明日のゲーム、負けるなよ」

「はい。ありがとうございます」

「負けたら俺、コミュニティを抜けるから」

「はい。……………え？」

第九章

——箱庭二一〇五三八〇外門。ペリベツト通り・噴水広場。

“ノーネーム”の屋敷で一日を過ごし、俺達“ノーネーム”は“フォレス・ガロ”のギフトゲームを挑むためにコミュニティの居住区に訪れようとする道中、“六本傷”の旗が掲げられている昨日のカフェテラスで声をかけられた。

「あー！昨日のお客さん！もしや今から決闘ですか!？」

昨日の猫耳店員が近寄ってきて俺達に一礼した。

「ボスからもエールを頼まれました！ウチのコミュニティも連中の悪行にはアツタマキてたところですよ！この二一〇五三八〇外門の自由区画・居住区画・舞台区画の全てでアイツらやりたい放題でしたもの！二度と不義理な真似が出来ないようにしてやってく

ださい！」

ブンブンと両手を振り回しながら応援してくれた。はは、元気だな………これは相当好き勝手にやられたんだろうな。心の中で苦笑しながら俺と飛鳥は強く頷き返す。

「ええ、そのつもりよ」

「当然。敗ける要素がないからな。猫耳店員も朗報を楽しみに待っていてくれ」

「おお！心強い御返事だ！」

俺達の言葉に満面の笑みで返す猫耳店員………が、急に声を潜めて俺達に喋りかけてくる。

「実は皆さんにお話があります。『フォレス・ガロ』の連中、領地の舞台区画ではなく、居住区画でゲームを行うらしいんですよ」

「居住区画で、ですか？」

それに答えたのは黒ウサギだった。その言葉を知らないのか飛鳥は不思議そうに小首を傾げる。

「黒ウサギ。舞台区画とはなにかしら？」

「ギフトゲームを行う為の専用区画でございますよ」

「分かりやすく言うと白夜叉が持っていたも舞台区画だ。まあ、あのような別次元にゲーム盤を用意出来るものは極めて少ないらしい。ちなみに商業や娯楽施設を置くのが自由区画。寝食や菜園・飼育といった場所は居住区画って言うんだ」

黒ウサギが飛鳥の問いに答え、俺が補足を付ける。異世界組は納得したように頷いているが、黒ウサギとジンが驚愕していた。

「な、なんで龍騎さんがその事を!？」

「ちよつと寝付きが悪くてな。地下三階に書庫があつたので無断で本を漁らせてもらいました♪」

「あそこは使わない時は鍵を掛けているはずですよ!?! 一体、どうやって入り込んだんですか!?!」

「ふん。あの程度の鍵なんて三秒あれば十分だ!」

「誇らしげに言えることではありませんよ!?!」

「本当に色々な本があつたなく。ギフトゲームに関する本の他にも歴史に童話に箱庭の生態環境、ペットの正しい飼い方とかまであつたぜ?」

「いい加減に反省してく——ちよつと待つてください。最後の方、何でそんな本が書庫にあるんですか? 何か嫌な予感がピンピンするのですけど」

「……………そういえばその本があった横には『ウサギの飼ひ方』に『コスプレ大百科』、『催眠術の全て』の順に並べられていたな」

「何ですかそのラインナップ!? その並べ方は明らかに黒ウサギを狙ったものじゃないですか!? う、嘘ですよね龍騎さん? いつももの冗談ですよね?」

「……………」

「何で黙るんですかあああああああああああああああつ!? えっ、本当にそんな本があったのですか!? 一体、何処にあるんですか!?」

「……………それで猫耳店員よ。他に何かおかしなことでもなかったか?」

「露骨に話をそらさないでください! 聞いているんですか龍騎さん!」

必死に俺から本の在り処を聞き出そうとする黒ウサギ。まあ、今の話の流れだと自分の貞操が危なかったと思われるもおかしくないからな。ちなみに確かにその本がある

のは事実だ——ただし、しまっている本棚は別々だけど。わざわざ嘘を付いて黒ウサギを不安がらせるのは黒ウサギの慌てっぷりが面白いから♪

「あはは………。そういえば傘下に置いてあるコミュニティや同士は殆ど全員ほっぽり出してました」

猫耳店員が思い出したかのように俺達にガルドの謎の行動を教えてくれた。黒ウサギがご乱心しているのに話を続けるとはいい性格しているなこの猫耳店員。……それにしても。

「それはおかしい……。傘下しているコミュニティは別として何故同士まで？そんなことしたって自分が不利になるだけだぞ？」

何を企んでいるんだガルドの奴……。自分の首を締める行為だぞ？仮にも「フオレス・ガロ」を率いるリーダーがそんなことをするわけない。……可能性としては、罠かそれともコミュニティ内で何か問題でも起きたの二択だな。

「でしょでしょ!? 何のゲームかは知りませんが、とにかく気を付けてくださいね!」

猫耳店員の応援を受けながら、俺達は「フォレス・ガロ」の居住区画を目指していった。

☆☆☆☆
☆

「あ、皆さん! 見えてきました……けど、」

黒ウサギが疑うように目の前の光景を見つめる。その気持ちは良く分かる。俺達は「フォレス・ガロ」の居住区画に来たはずなんだが……何だこりや? 立派な門はツタが絡まっており、森のように生い茂る木々が俺達を出迎えた。その光景を見上げながら耀は呟く。

「……………。ジャングル?」

「虎の住むコミュニティだしな。おかしくはないだろ」

「いや、これはおかしい。この門はツタが絡む程古びていないし、これだと自分の屋敷に入るのは一苦勞するぜ？それにこの木々は無理やり成長させたように感じる………何か思い当たることはないかジン？」

俺は近くにある木に触れながらジンに問う。ジンも俺が触れている木を手を伸ばし、観察していく。俺達が触れている木はまるで生き物のように脈を打ち、肌から通して胎動のようなものを感じ取った。

「やっぱり—— “鬼化”^き してる？いや、まさか」

「“鬼化”だと………？そうだとするとこのギフトゲームは」

「龍騎君、ジン君。ここに “契約書類” が貼ってあるわよ」

ジンが “鬼化” という単語を呟く声が聞こえると俺はある可能性に気付き、口に出そうとするが門柱の近くにいた飛鳥により言い出すことが出来なかった。………まあい

いか。とりあえず先に“契約書類”を見てから判断しても遅くはないし、ギフトゲームの内容の方が最優先事項だ。俺も飛鳥の近くまで歩み寄り、門柱に貼られた羊皮紙に書かれた今回のゲームの内容を読み出す。

『ギフトゲーム名 “ハンティング”』

・プレイヤー一覧 神崎 龍騎

久遠 飛鳥

春日部 耀

ジン||ラツセル

・クリア条件 ホストの本拠内に潜むガルド||ガスパーの討伐。

・クリア方法 ホスト側が指定した特定の武器でのみ討伐可能。指定武器以外は“^{ギアス}契約”によってガルド||ガスパーを傷つける事は不可能。指定武器以外は”

・敗北条件 降参か、プレイヤーが上記の勝利条件を満たせなくなった場合。

・指定武器 ゲームテリトリーにて配置。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗の下、“ノーネーム”はギフトゲームに参加します。

“印”

“フォレス・ガロ

「ガルドの身をクリア条件に……指定武器で打倒!」

「こ、これはまずいです!」

ジンと黒ウサギから悲鳴のような声が聞こえてくる。……確かにこれは少し面倒くさいことになったな。

「このゲームはそんなに危険なの?」

黒ウサギとジンの驚きように飛鳥が心配そうに問いかける。その問いをまだ驚愕が抜けていないジンと黒ウサギの代わりに俺が答えることにした。

「いや、ゲーム自体は単純なんだが……ルールが少し面倒なんだ。このルールだと俺

の物理攻撃、飛鳥のギフトで操る事、耀のギフトで傷つける事も不可能になるんだ」

俺の説明に飛鳥は険しい表情で再度問いかけてくる。

「……………どういこうとっ？」

「つまり、俺達の力を克服するため自分の命を対価に奴はルールに守られている状態にしたんだよ。これだと神格を持つていようが関係ない。早く指定武器を探し出さないと俺達は仲良くあの世行きになるぜ？」

「すいません、僕の落ち度でした。初めに“契約書類”を作った時にルールもその場で決めておけばよかったのに……………」

意識を取り戻したジンは自分の落ち度を謝罪する——が、これはジンだけの責任じゃない。一番責任があるのはギフトゲームを提案した俺と飛鳥だ。ルールを決めるのが“主催者”である以上、白紙でゲームを承諾するのは自殺行為だ。例えるなら、説明もろくに受けていないのに契約書にサインしているのと同じだ。ああ、チクショー！

何て初歩的なミスしてんだ俺！

「敵は命懸けで五分に持ち込んだってことか。観客にしてみれば面白くていいけどな」

「気軽に言ってくれるわね……条件はかなり厳しいわよ。指定武器が何かも書かれていないし、このまま戦えば厳しいかもしれない」

そう呟きながら飛鳥は厳しい表情で「契約書類」を覗き込む。どうやら飛鳥は自分で挑んだゲームに責任を感じているんだろう。それに気付いたのか黒ウサギと耀は、飛鳥の手をギュッと握り励ました。この責任は俺にもあるので黒ウサギ達に続き、飛鳥を励ます。

「だ、大丈夫ですよ！『契約書類』には『指定』武器としっかり書いてあります。つまり最低でも何らかのヒントがなければなりません。もしヒントが提示されなければ、ルール違反で『フォレス・ガロ』の敗北は決定！この黒ウサギがいる限り、販促はさせませんとも！」

「大丈夫。黒ウサギもこう言ってるし、私も頑張る」

「黒ウサギ達もこう言っているしそう責任を感じるなつて。もし飛鳥が言い出していないかったら俺が提案していたし、責任あるとしたらあの場にいた全員にあるぜ？」

「……………ええ、そうね。むしろあの外道のプライドを粉砕するためには、コレぐらいのハ
ンデは必要かもしれないわ」

俺達の励ましが届いたのか飛鳥はいつも通りの調子に戻った。たとえ不利だとしても勝たなければ俺達の計画は実行できなくなる。そうなるとコミュニティの再建は遠のいてしまう……………それだけは避けなければならない。それにこんなところで躓いては「打倒魔王」なんか夢のまた夢だ。必ず勝つと心の中で決心しながら、俺、飛鳥、耀、ジン——以上四名で「フォレス・ガロ」に突入するため門を開けるのであった。

☆

門の開閉がゲームの合図なのか、生い茂る森が門を絡めるように退路を断つ。光を遮

る程の密度で立ち並ぶ木々、その木々の下から迫り上がる巨大な根によって街路と思われる道は人が通れるような道ではなくなると人が住んでいた場所とは思えない程であった。まあ、俺と耀がいる限り奇襲に遭う可能性は殆どないだろう。しかし、ジンと飛鳥はいつ奇襲されるかと緊張した面持ちで周囲を警戒していたので心配させないように声を掛け、落ち着かせることにした。

「そう警戒すんなって。周りには誰もいないからさ」

「そうだよ。もし隠れていたら匂いで分かる」

「……………そう？春日部さんは犬にもお友達が？」

「うん。二十匹ぐらい」

今朝、耀のギフトは、獣の友達を作れば作る程強くなるらしいと耀自身から聞いていた。おそらく俺達の中で五感は耀が一番優れているだろう。頼もしい限りだ。

「詳しい位置は分かりますか？」

「一定の距離までなら詳しく分かるのだが、その範囲から離れているならおおよそまでしか分からん」

「右に同意。でも風下にいるのに匂いがないのだから、何処かの家に潜んでいる可能性は高いと思う」

「ではまず外から探しましょう」

飛鳥の提案に反対する理由がないので俺達は森を散策し始めることにした。………それにしてもこの木々は凄まじいな。散策して見つけた家屋は枝や根によつて食い破られ、廃墟化しているのだ。

「彼にしてみれば一世一代の大勝負だもの。温存していた隠し球の一つや二つあつてもおかしくないということかしら」

「ええ。彼の戦歴は事実上、不戦敗も同じ。明かさずにいた強力なギフトを持っていても不思議ではありません。耀さんも龍騎さんもガルドを見つけても警戒を怠らないでください」

……飛鳥とジンがああ言ってるが果たしてそうだろうか？俺がもしガルドの立場だった場合、自分が勝てるように飛鳥達にとつて厳しい状況を作り出す。俺が思いつく限りだと、ギフトゲームのルールに“恩恵使用禁止”などを付け加えたり、このような自らの力で一晩で森を作り上げることが可能ならばゲーム自体を制限時間付きの“宝探し”を実行した方が勝率は格段に高くなる。なのに、敗ける可能性を残してゲームを開催するなんて不自然過ぎる。それに傘下と仲間を追い出したことも気になる……。そして、一番気がかりなのはこの生き物のような脈を打つ“鬼化”した木々だ。俺が徹夜して学んできたことが正しい知識であるならば“鬼化”は――。

「ねえ、聞いているの龍騎君！」

頭の中で今の状況を整理していると、飛鳥が少し不機嫌そうに俺に声をかけてくる。……あの様子だどうやら何回も声をかけられたのに俺は気付かなかつたみたいだ。

「ああ、すまん飛鳥。ちよつと考え事して聞いていなかったわ」

素直に飛鳥に謝る。これは普通に俺が悪いしな。さっきのことは後で考えることにしよう。

「もう………しつかりしてよね？龍騎君はこの中でも頭が回るのだからちゃんと話を聞いてくれないと」

「本当にすまん………で、話の内容は？」

「この森の中にヒントらしいヒントも武器らしい武器も見つからないから、もしかしたらガルド自身がその役目を担っている可能性があるという話なんだけどどう思うかしらっ」

「合っていると思うぞ？自分が殺される唯一武器があるなら自分で保管しておいた方が一番安全だからな。そうだとしたら早速ガルドを探した方が——」

「それなら春日部さんが樹の上に登って探してくれているわ」

飛鳥がふつと視線を上に移し、俺も釣られて見上げる。その視線先には耀が周囲にガルドがないか搜索していた。

「お早い仕事で……………それにしても飛鳥。お前大丈夫か？」

「……………何の話かしら？」

俺が心配するように声をかけるがしらを切る飛鳥。……………まったく強情だな飛鳥。

「誤魔化しても俺には通用しないぞ？ 大方、自分が提案のせいでも不利なギフトゲームに挑むことになったから勝たなくてはならないプレッシャーと責任を感じている、つてと
ころか？」

「……………貴方のギフトは超能力関係なのかしら？」

凶星だったのか呆れたように溜息する飛鳥。

「残念ながら違うけどな。まあ、飛鳥が分かりやすいだけだよ。お前の性格で考えると、お前だったら俺に確認せず堂々と実行するだろうからな」

「……………はあ、そうよ。龍騎君の言う通り、私が提案したから私の手でガルドに引導を渡さなくてはならない……………のだけど、『契約書類』のルールによって私のギフトはガルドには効かない。手が無いことはないのだけど、それでも初めてやることだから少し不安なの」

彼女にしては珍しく弱音を吐く。飛鳥は白夜叉のギフトゲームに挑んだがあれは実質、耀がクリアしたものだから飛鳥は今回が初のギフトゲームとなる。しかも自分はギフト頼りなのにそれが効果がないとなるとやっぱり不安なんだろう。それも仕方ないだろう。彼女は強力なギフトを持っているが元は争いには関係ない生活を送っていたのだ。経験もない戦いをするに不安を感じることは当然だ。

「気にしすぎだって。さつきも言ったけどちゃんと確認しなかった俺達も同罪だ」

「……………だけど」

弱気になっている飛鳥を励ますが、まだ気にしているだろう。……………ああもう！臭いセリフを言うのは俺の柄じゃないんだが飛鳥が本当に普段通りに戻るため一肌脱ぎますか……………。

「なら、飛鳥自身でケリをつけたらいいじゃないか。飛鳥が不安なるのも仕方がないが俺が片付けたらそれはそれで不満だろ？ 勿論、俺達も協力するし飛鳥達が危険に及ぶなら——俺が守ってやるよ」

真剣な表情で飛鳥を見つめ、最後に心配掛けないように笑いかける。すると、飛鳥の顔がみるみる赤くなっていき、ぷいっと明後日の方向を向いた。

「……………っ！言われなくてもそうするつもりよ！貴方に守ってもらう程、私は弱くないわよ！この件は私が片付けるんだから勝手に手を出さないで！」

何か物凄く怒られたが、いつもの飛鳥に戻ったので良しとしよう。だが、未だに飛鳥の顔の赤みが取れていないのは何でだろう？

「……………がとう」

「ん？何か言ったか？」

「別に何でもないわよ！」

またしても怒られた。何故そんなに怒っているのか少し気になったので問いかけようとする。

「見つけた」

「うおっ!？」

「きゃあっ!？」

樹の上にいた耀が俺と飛鳥の間に割り込むように着地する。突然のことに俺と飛鳥は驚き、お互い後ろに退く。

「お、おう。ありがとな耀。お疲れさん」

「……………ふんっ」

お礼を言ったのに耀までそっぽを向かれた。しかも何処か不機嫌そうだ。……………俺、何かしたか？

「……………本拠の中にいた。影だけしか見えなかったけど、この目で確認した」

そう言いながら耀は俺の手を取り、本拠があるであろう方向に向かっていく。……………つて、

「ちよ、ちよつと待ってって！引つ張るなよ!?!てか、痛いって！手を強く握りすぎだ!?!せめ

て、手の力を弱めてくれ！聞いているんですか耀さん!？」

「ま、待ちなさい！私を置いて行かないでくれないかしら!？」

☆

「見て。館まで呑み込まれてるわよ」

耀に力強く引つ張られながら「フォレス・ガロ」の本拠に着いた。虎の紋様を施されていた扉は無残に取り払われ、窓ガラスは砕けており、豪華な外観はツタに蝕まれて剥ぎ取られていた。

「ガルドは二階に居た。入っても大丈夫」

「確かに気配は二階からあるな……………それよりかそろそろ手を離してくれないか？」

「……………っ!」

未だに耀に手を握られたままなので放してもらえるように願うと俺の言葉に気付いたのか耀はすぐさま俺の手を離してくれた。ああ、痛かったー。手が折れるかと思っただわ。

「……………」

「あれ、どうしたんだ耀？顔が赤いぞ？」

「……………何でもない」

今度は耀の顔が赤く染まっていた。……………この森の中は何か良くないものでも運んでいるのか？それならばさっさとこのギフトゲームを終わらせなくちゃな。そう思いながら俺達は「フォレス・ガロ」の屋敷に入っていく。

「それにしても……………これはどういうことでしょうか？内装も酷いですし、家具も打ち倒されて散財しているのですが……………」

屋敷に入つてまず最初にご対面したのは荒れに荒れた内装であつた。流石にこの光景に疑問を持ち出したジンが呟いた。

「……………分からないわね。この豪華な本拠だつてガルドの野望の象徴とも言えるわ。その本拠をここまで無残な姿する意味がないわ」

「森は虎のテリトリー。有利な舞台を奇襲のため……………でもなかった。それが理由なら本拠に隠れる意味がない」

今までとは全く違う緊張感が漂う。……………これはちよつと不味いな。変に疑問を持ちながら戦闘に入るのは危険過ぎる。空気を和らげるために話を変えるか。

「疑問を感じるのは分かるがとりあえず武器を探さないか？それがなかったら話にならないからな」

「……………それもそうね。じゃあまずは一階から探すことにしましょう」

「そうですね」

「異議なし」

何とか話を変えることに成功し俺達は散策を開始する。瓦礫を掘り返したり、怪しいところを探ったり隅々まで調べるが、ヒントらしい物や武具らしい物も見つからなかった。結局、一階には何もなく残りは二階だけとなった。

「さてつと、ここらには武具はなかったし二階に行きますか。ガルドも二階にいるみたいだしそこに武具ある可能性が高いしな」

「そうですね。ジン君、私達は二階に上がるけど貴方は此処で待っていなさい」

「ど、どうしてですか？僕だってギフトを持っています。足手纏いには」

「そうじゃないわ。上で何が起こるか分からないからよ。だから二手に分かれて、私達

はゲームクリアのヒントを探してくる。貴方にはこの退路を守って欲しいの」

確かに理は適っている回答だが、ジンは不満そうだ。だが、退路を守らなければならぬ重要性は分かっているのか渋々と階下で待つ——が、そこで俺が異議を唱える。

「いや、ジンも連れて行こう。此処にジンを置いていくのは少し不味いし、俺と耀がいる限りガルドを逃がすへまはしないって」

「……………少し不味いってどういうことかしら？」

不思議そうに首を傾げる飛鳥。横にいる耀に視線を移すとこの異議には疑問を感じるのかじつと俺を見つめてくる。そんな中、俺は正直な感想で答えた。

「ぶっちゃけて言ったら、ジンが退路を守っても時間稼ぎにもならないから」

ジンがいる方向からブスリつと刺さる音が聞こえてきたが、気のせいだろう。

「……………確かにガルドが此処に逃げられたらジン君はお陀仏になるわね」

「無駄死」

またグサリグサリと刺さる音が聞こえてくるが、俺達は気にせず会話を続ける。すると、今度は何故か苦しそうにしているジンから疑問の声が上がってきた。

「ぼ、僕が何かしました」

「よし、二階に上がるぞ。気を引き締めな」

「ええ。勝利を掴みましょう」

「絶対勝つ」

「ちよつとおおおおおおおおおつ!?無視しないでくださいよ!」

俺達は根に阻まれた階段を物音を立てずにゆつくり進んでいく。後ろが何か騒がしいが別にいいだろう。階段を上り、その先にあつた大きな扉の両脇に立つて機会を窺う。……此処にガルドがいるな。耀に視線を向けると耀も気付いているのか真剣な表情で頷いてきた。二人に危害が及ばないように俺が先頭に立ち、目の前にある扉を勢いよく開け、中に跳び込むと、

「……………GEEEEEEYAAAAAaaaaa!!」

昨日とは変わり果てた姿をしたガルドが白銀の十字剣を背に守りながら立ち塞がった。

第十章

「つて、あぶねええええええええつ!」

龍騎達が入ってきた瞬間、館を揺るがす獣の咆哮を上げ、突進を仕掛けてくる。龍騎だけなら本来、危なげなく躲すところなのだが後ろに飛鳥と耀がいるのを躲す寸前で思いだし、慌てて五芒星の魔法陣を展開する。龍騎の魔法陣とガルドの突進が均衡し、力は逃げ場が無くなっていき、衝撃波が発生し周囲の打ち倒されていた家具が吹き飛んでいく。後ろにいる飛鳥と耀も衝撃波に巻き込まれ、家具の二の舞にならないように足に力を入れ耐え続ける。しばしすると衝撃波が止むが、未だに龍騎の魔法陣とガルドは均衡し続けている。再度、ガルドが咆哮を上げ龍騎の魔法陣をその剛腕で殴り続ける。ガルドが魔法陣に向かって剛腕を振るうたび、金属音っぽい音が部屋に鳴り響く中、龍騎は余裕そうに今の状況をどうするか考えだした。

（あー。思わず受け止めてしまったけどコレどうしようか? “契約書類”のルールに

よって俺達の攻撃は指定武器じゃないと傷一つすら付けられないんだ。ガルドの背後にある白銀の十字剣、あれが指定武器なんだろう。俺がこのまま抑えたまま二人の中でも一番速い耀に指定武器を取ってもらうのがベストなんだが……何故か嫌な予感がするんだよな)

そう思いふけながら龍騎の視線はガルドではなく白銀の十字剣に向けている。これまで戦い抜いてきた経験と勘が、あの白銀の十字剣は罠だと勘づいた。……だが、後ろの二人は戦いに関しては素人同然。

「……………今のうちにっ!」

今の現状を理解した耀は自分の出来る役割を行う為、白銀の十字剣に向かって駆け出す。勿論、耀はあの白銀の十字剣が罠だとは気付いていない。

「待て、行くな耀!」

白銀の十字剣に向かって駆け出す耀を呼び止めようするがガルドの猛攻により鳴り

響く金属音によって龍騎の声は聞こえていないようだ。龍騎は白銀の十字剣がある方へ視線を移すと、窓の先にある空間が不自然に歪んだのを感じた。耀自身は白銀の十字剣にしか目に入っていないようで、気づかないまま白銀の十字剣に向かって手を伸ばす。

「……………っ！『火花よ、弾けろ！』」

最悪な展開が頭によぎった龍騎は魔法陣を破棄し、掌をガルドの瞳に向け言葉を放つ。すると、掌から眩い火光——閃光が発現し、ガルドの瞳を襲う。突然のことに真面に喰らったガルドの視界は一面が白に埋め尽くされた。視界を奪われたガルドは眼を抑えながら悲鳴を上げ、暴れだす。その隙に龍騎は飛鳥を無言で後ろに下がらせ、ガルドの脇を横切り、耀の後を追いかけるように跳ぶ。龍騎は一瞬で耀に追いつき、白銀の十字剣が手に触れる一歩手前の耀を庇う様に抱きつく。

その瞬間、窓が音を立てながら割れて破片と見えぬ刃が龍騎と耀を襲う。

「……………ぐっ!?」

龍騎が耀を庇ったおかげで耀には特に傷一つなく無事であったが、代わりに龍騎がガラスの破片と見えない刃を全て受けてしまった。龍騎のブレザーは無残に切り裂かれ、体にガラスの破片が突き刺さっていく。そして、そのまま龍騎は抱きついた耀を庇う様に体を捻り、地面に倒れこむ。

「……………っ!? 龍騎!？」

耀は一瞬の出来事に頭の中が真っ白になるが、龍騎の惨状を見て悲鳴を上げるように叫ぶ。龍騎の状態はブレザーは切り裂かれ、体にガラスの破片が突き刺されており、その傷口から血が流れていき服が真っ赤に滲んでいく。平和な生活をしていた耀には目を逸らしたくなるような惨状だ。

しかし、明らかに重傷である容体なのに龍騎は顔を歪めながら耀に笑いかける。

「つうつ……………! 大丈夫か耀?」

「喋らないで! 今、応急手当するから!」

焦りながら応急手当をしようとする耀だが、龍騎は右手で制す。

「落ち着け、耀。此処でやっても余計な被害を受けるだけだ。まずは一度、一時退却するべきだ。ちゃんと目当ての物は手に入ったしな」

そう言いながら龍騎は耀に左手に握っている白銀の十字剣を見せつける。龍騎はあの一瞬の中、きつちりと手に入れていたようだ。

「そろそろガルドの視界も元に戻る。その前にこの館を出るぞ。俺の血で汚すわけにはいかないから、耀は厳しいと思うが飛鳥とジンを頼む」

「それはいいけど……龍騎は？」

「この程度の傷、どうってことはないって。俺はこの剣を持ちながら耀の後を追いかけるや」

耀に心配掛けないようにもう一度笑いかける龍騎。どう見ても重傷である龍騎に心

配するなどは無理な話だ——だが、耀は龍騎の笑顔を見ると不思議と安心していき、自然と力強く頷いてみせる。

二人はゆっくりと立ち上がりながら、飛鳥がいる扉まで駆け出す。重傷であるとは思えない程の速度で龍騎は耀の後ろを追いかけていき、あつという間に飛鳥の元に辿り着き、耀は右腕で飛鳥を抱き上げ、龍騎と共に部屋から抜け出す。

「龍騎君!?大丈夫なの!？」

「話は後だ。剣も手に入れたことだし、とりあえず一時退却するぞ」

龍騎の容体を見て心配そうな声音で話しかけてくる飛鳥を制し、階段を飛び降りる。龍騎と耀は無事着地に成功し、今度は一階で退路を守っているジンの元に駆け出していく。ジンはすぐに見つかり、耀は空いた左腕でジンを抱き上げる。

「りゅ、龍騎さん!?その傷は」

「察しろ!」

龍騎は心配そうにしているジンは無視し、耀の前に躍り出る。

「『火よ、爆ぜろ！』」

龍騎は壁に向かって掌をかざし、言葉を再度放つ。すると、今度は壁から小規模の爆発が発生し大きな穴が空く。龍騎を除く耀達は爆発の威力に驚愕しながらも穴を潜り、森の中に消えていった。

☆

「此処まで来れば一先ずは大丈夫だな。耀、すまんが周囲の警戒を………っ！」

「喋ってないで座りなさい！今、応急手当をするから！」

龍騎達は「フォレス・ガロ」の本拠から数km離れた森の中まで退散することに成功し、龍騎は耀に指示をだすが傷口からの痛みで顔を歪め、飛鳥に木に腰掛けるように言

われる。龍騎は少し面倒くさそうな表情を浮かべるが、飛鳥達の顔が真剣だったので、澁々と腰を下ろした。

「まずは止血をしなくてはいけないわね……………ジン君、回復系のギフトみたいのはないのかしら?」

「す、すみません。今は持っていない」

「いや、そんなもの必要ない」

ジンの声を遮るように言う。龍騎はポケットに手をいれる。ポケットから出したのは一枚の御札。龍騎はその御札を胸に貼り付けた。

「これは貼り付けてさえいれば傷は治っていく代物だ。暫くしたら完治とは言えないがある程度は回復するさ」

龍騎が言った通り、しばし待つとガラスの破片は龍騎の体から追い出され、傷がみる

みると塞がっていく。その光景に飛鳥達はまた驚愕し、飛鳥が代表として問いだす。

「……………凄まじい効果ね。それが龍騎君のギフトかしら？」

「そういえば俺の力について何も言っていなかったな。俺は陰陽師で御札の力は副産物的なものだ」

「陰陽師って、あの陰陽師？」

「耀の知っている陰陽師が俺の陰陽師と同じかどうかは分からんが俺の家系は代々人間に害する怨霊や妖怪を退治していったんだ。まあ、俺には才能なくて出来損ないと言われていたけどな」

心底どうでもよさそうに肩をすくめる龍騎。その表情は周りの評価など気にしないと言っているようだった。しかし、飛鳥達は触れて欲しくなさそうな過去を聞いてしまい、少し気まずそうにする。少し気まずい雰囲気気付いた龍騎は慌てて本題に戻す。

「そ、それよりか今はどうやってガルドを倒すかだ。ガルドは剣を手入れたことでどうにでもなるが問題はさつき風の刃だ。状況から見ればガルドの部下が潜んでいたと考えるべきだな」

「でも、猫耳の店員は傘下のコミユニティと部下は追い出したって言ってなかったかしら？」

「ああ、だが猫耳店員が言っていたのは殆どただただけだな。保険として何人か潜ませていたんだろうさ」

「……………そうでしょうね。それにしてもこの状況はかなり不味いです。ガルドは『契約書類』で守られていて、その部下はこの生い茂った森の中で奇襲……………指定武器を手に入れたとはいえ不利には変わりません」

ジンが唸るように打開策を考える。龍騎と耀がいるとはいえ森の中に何人の部下がいるか分からないと無理にガルドの討伐に動けば囲まれる可能性がある。龍騎はともかく飛鳥達は経験が浅いので囲まれたとなると龍騎一人では守ることが出来ないのだ。

飛鳥も耀も打開策を考えるが良い案は浮かばないまま時が経った。しばしすると、腰を下ろしていた龍騎が立ち上がり飛鳥達に作戦を伝えだした。

「なら、こんなのでどうだ？俺がガルドの部下全員を足止めしてそのうちに飛鳥達がガルドの討伐つてことで」

龍騎の作戦に驚愕と戸惑いを感じる三人。今、目の前にいる少年は御札の力で傷が治ったとはいえ全治ではないのだ。それなのに一番厳しい役割を自分が引き受けると言うのだ。当然、三人はこの作戦に反対の声を上げる。

「な、何言ってるのよ！貴方は怪我人なのよ！？そのような作戦認めるわけにはいかないわ!!」

「そうですよ！龍騎さん一人で何人いるか分からないガルドの部下を相手するのは無茶です！」

「龍騎は安静にするべき」

「じゃあ、これ超える最善の策はあんのか？」

「「うっ……………」」

言葉に詰まる三人。正直に言うとは龍騎の提案した以上の作戦など思いつかないのだ。だが、龍騎だけに負担を背負わせるのは三人共心苦しいのだ。

「で、でも……………」

「そう心配すんなって。この中でも俺が一番戦い慣れてんだからキツイ役割するのは当たり前だろ？。それに『契約書類』にはガルドの部下を守るような項目なんてなかったから俺のギフトも効くしさ」

ニシシ、と笑う龍騎。だが、三人は心の中では後悔の念にかられる。ジンは『契約書類』の不確認によって不利なギフトゲームを挑むことになったこと、飛鳥は自分が提案したせいで龍騎が苦しい思いをしていること、耀は自分の軽率な行動のせいで龍騎に重

傷を負わせたことにそれぞれ自分達の不甲斐なさを責めるのであった。龍騎は未だ重たい雰囲気や和らがないことに苦笑いで頭を掻きながらこの状況をどうするか考える。暫く考え込むと、龍騎は妙案を思いついたのか面白そうに再度笑いかける。

「それでも申し訳ないと思っっているんだったら……そうだな、このギフトゲームが終わった後何か一つお願いでも聞いてもらおうかな？」

「……………お願いって？」

「グへへ、それはお前らの体を——痛いっ!?嘘です、冗談です!だから傷口を木の棒で挟らないで!」

結構痛いのか必死に懇願する龍騎。飛鳥と耀は呆れながら溜息をこぼし、龍騎の傷口を突いていた木の棒を地面に放り投げる。

「心配して損したわ。じゃあ、龍騎君へんたいの作戦通りに私達はガルドの討伐。龍騎君へんたいはガルドの部下の足止めね」

「……………今、飛鳥に息するように罵倒されたよな？俺、言い返してもいいよな？」

「……………何か間違っている？」

「やめてっ!?!本気で俺が変態だと思つて不思議そうに首を傾げないで!?!」

恒例になりつつある漫才をする三人。その様子をジンは苦笑いで静観する。だが、龍騎の戯言のおかげで先程の重い雰囲気はいつの間にか霧散していたのだった。

「はあ……………。俺の威厳の復位はこのギフトゲームが終わり次第、じっくり話し合うとして……………そろそろ傷口も塞がるし作戦決行つと行きますか」

そう言いながら龍騎は胸に貼り付けた御札を剥がしながら、その場から腰を上げる。龍騎の容体を見ても先程よりは顔色も良くなっており、殆ど傷口も塞がっていた。

「そうね。さっさとあの外道を成敗しに行きましょう。龍騎君、ちゃんとガルドの部下

を足止めしておきなさいよ」

「任せろ。飛鳥も恐れずに自分を信じてガルドを倒せよ」

飛鳥は龍騎の返事に満足げに頬を緩めながら耀とジンを連れて森の中に消えていた。龍騎はそれを見送りながら、手元にある御札を握りつぶしながら済まなさそうにそつと呟く。

「……………嘘について悪いな、飛鳥、耀、ジン。今のお前達では俺のことを知るには早すぎるんだ」

龍騎は発動しなかった御札を適当に投げ捨てる。そして後ろを振り返り、森の中へと消えていった。

☆

「……………ようやくお出ましか」

しばし森の中を彷徨う龍騎は気配を感じたのかその場で立ち止まり、森特有の静寂に包まれながら周囲を警戒する。すると、突然上空から数多の風の刃が降り注ぎ龍騎を襲う——が、既に気付いていた龍騎は後方に下がることで紙一重で躲す。だが、背後から草むらが擦れる音が鳴ると同時に巨大な影が龍騎に突撃を仕掛ける。

「奇襲としては及第点だが——それは敵に勘付かれていたら悪手だ！」

しかし、これも龍騎のカウンター気味の後ろ回し蹴りにより不発となる。足を半円を描くように体を旋回させ、相手の脳天に踵を蹴り込む。それをもろに喰らった敵らしき巨大な影は横方向に吹き飛び、巨樹に激突する。そこらの雑魚なら今の一撃で気絶はするもののだが、龍騎は硬い鉾石を蹴ったような手応えを感じ、まだ警戒を解かない。すると、今度は別方向から奇襲を仕掛けてくる。先程の奇襲より素早い速度で龍騎を襲う。

「おっとー！」

これも横一歩ずれることにより難なくと躲す龍騎。だが、続けて攻撃を仕掛けてき、上空からも風の刃が降り注ぐ。龍騎が躲し続けるその間に巨躯の敵がゆつくりと立ち上がる。龍騎は避けながらも襲ってくるガルドの部下らしき獣を観察する。

「上空には遠距離から攻撃可能な風のギフトを持った鴉、地上戦では素早い狼、そしてパワータイプのサイか……。此処は動物園か何かか？」

姿を目視した獣は直立二足歩行でガルドに劣らない剛腕。頭部には一本の硬い角を持ち、皮膚は非常に分厚く硬質で、体全体を鎧のように覆っているのが一体。灰色の体毛に何でも切り裂きそうな鋭い爪。唸り声を上げながら獲物を狙う視線で龍騎を睨む一体。上空から漆黒の羽を舞わせながら、鋭い瞳で龍騎を目視しながら翼を羽ばたかせ浮遊して様子を見ている一体。これらは少し姿が違うが、龍騎の世界でもいた鴉、狼、サイなのだ。ガルドのコミュニティに在籍していたとしたら、この獣達も獣系のギフトを持った獣人なのだがガルドと同様、理性は無くなっているようだ。

「……………一応、バランス良くチーム構成は出来ているみたいだな。まあ、連携はまだまだだけだな」

後方に大きく下がりが、軽薄そうに笑いながらも警戒を緩めない龍騎。獣三匹も龍騎を睨みつけるだけでお互い冷戦状態が続く。だが、ザツ、と風が吹くと同時に獣達の視界から消え去っていた。

「残念だけど、お前らの相手する程時間はないんだ。さっさと終わらせるから」

龍騎の声は獣達の真上から聞こえてくる。慌てて自分の上を見上げると龍騎は鴉の背後に現れており、既に攻撃体勢に入っている。鴉はその場から逃げようとするが、時は既に遅し。右手を鴉に向けながら靈力を収束させ、鴉にとって死神の囁きを放つ。

『滅せよ、爆炎！』

瞬間、館の時とは桁違いの威力の爆発が上空に咲き乱れ、轟音が鳴り響く。爆発を喰らった鴉はそのまま灰と化し、この世界から消え去っていった。突然の同胞の死に焦りだす狼とサイ。しかし、あの爆発だと龍騎も巻き込まれているだろうと思いき警戒を解く獣達。だが、

「まずは一体」

今度は狼とサイの背後に佇む龍騎。後ろを振り返り、龍騎を視界に入れると獣達は驚愕と恐怖という感情に駆り立てられる。あり得ない速度、靈力の保有力と人間とは思えない程の力を秘めている——が、それよりも獣達を恐怖に駆り立てられるのは龍騎自身の存在なのだ。獣の勘なのだろうか、今、獣達の瞳には人間は人間の皮を被った何かに見えてしまうのだ。自分達がどんな手を使っても勝てない上に逃げ出しても殺される……その事実が脳内によぎり、獣達の動きを止める。しかし、それは致命的な隙となり自分の首を締める行為——それを龍騎は見逃すはずがなかった。

『切り裂け、鋼鉄！』

龍騎が言葉を放つと同時に龍騎の腕に1mはある黒光りした鋭利な刃を発現させ、一気に獣達の距離を詰める。龍騎の行動に我を取り戻したサイは無我夢中で剛腕を振るおうとする。だが、龍騎にとっては欠伸が出るほど遅すぎる一撃でありまた紙一重でその剛腕を避け、サイの懐に入り込む。サイが次の攻撃体勢に入るが、龍騎が腕に発現さ

せている刃で薙ぎ払う。その一撃は鎧のような皮膚を持つているサイの上半身と下半身を離れさせる程であった。

「二体目。残りは一体」

死神を彷彿させる言葉と既に息絶えた同胞の死体を見た狼は一目散に逃げだす。龍騎の姿も見ずにひたすら逃げ続ける……生き残るために。しかし、龍騎は見逃すはずもなく刃を破棄し地面に手を付けながら狼の最期の言葉を放つ。

「『搾り取れ、大樹！』」

その言葉に狼の周囲にある木々の根が狼を拘束する。振り解こうと暴れる狼だが解けるどころか更に絡まっていき、それでも暴れ続ける狼だが、力が抜けていく感覚を感じ、徐々に抵抗が出来なくなっていく。視界も薄れていく中、自分の前足を見てみるとその足はミイラのように枯れ果てていたのだ。龍騎によつて操られている木々は狼を養分として捕食しているようだ。それを理解した狼だが既に体から力が入ってこなくなり、そのまま木々の養分として吸い取られ続けた狼は枯れ果ててしまった。役目を終

えた木々の根は狼ごと地面に還っていき、元の状態へと戻ったのだった。

それを確認した龍騎は昨日の夜中と同じように炎を発現させ、サイの死体を処理する。作業が終わると、ゲーム終了を告げるように木々が一齐に霧散していった。

「どうやら飛鳥達もガルドに勝ったようだな。これで暫くゆつくり出来るといいんだが………」

この先も厄介事が起きる予感を直感した龍騎は疲れた表情を浮かべながらも、無事ギフトゲームを終えたことに安心しながら飛鳥達と合流するために歩き出していったのだった。

第十一章

「龍騎さん！本当に無事なんですか!?後で息絶えるということはないですよね!」

「ちよっ!?肩をそんなに揺らさないで！吐くって！吐いてしま……うぷっ」

ギフトゲーム終了後、飛鳥達と合流することに成功すると、必死な表情の黒ウサギと十六夜が風よりも速くこちらに向かって駆け寄ってきた。劳いの言葉でも貰えるのかと思っていたのだが、黒ウサギにいきなり肩を掴まれて未だに揺らされているのだ。俺自身は大丈夫と言っているのだが「その血が滲んだ服装で説得力ありません！」やら「顔色悪いですよ!?!本当は無理しているのでは!?!」と立派なウサ耳があるのに聞く耳をもたないのだ。てか、顔色が悪いのはお前のせいだつての!そんなやり取りをあれこれ三〇分経過すると、さすがに飽きてきたのか最初は面白そうに見ていた飛鳥が黒ウサギを制する。

「落ち着きなさい黒ウサギ。あの龍騎君が死ぬ姿なんて想像できる？」

「……………それもそうですね。例え死んだとしてもすぐに蘇りそうですね」

「納得するの早すぎないか!?!お前らは俺のことをどういう存在だと思っっているんだよ
！」

「『生粋の幼児性愛者』」

「まさかの全員一致!?!」

飛鳥のおかげで黒ウサギが落ち着き、手を肩から放してくれたが今度は全員から精神的に追い詰めてきやがった。何この扱い!?!そんな俺のことが嫌いなのかお前ら!?!

「それよりどうして黒ウサギは龍騎が重傷だったことを知ってるの?」

「おい、耀。それよりって俺はそんなにどうでもいい存在なのか?」

サラッと毒を吐く耀に問いかけるが無視される。黒ウサギも項垂れる俺を無視しながら耀の問いに答える。……昨日から俺の扱い酷くね？俺、泣いてもいいよ——。

「それは黒ウサギの素敵耳のおかげですね。門の前でも大まかな状況が把握出来ますので」

——ちよつと待てよ。今、聞き捨てならないことを聞こえてきたんだが？大まかな状況が把握出来るだど？それなら、

「俺達がギフトゲームを挑む前にガルドの部下が潜んでいることも分かったんじゃ」

「……………あつ!？」

今更、気付いたように驚愕する黒ウサギ。だとすると、俺は無駄に傷を負ったつてことか？飛鳥と耀の顔を見合わせる。そして、お互い頷きながら溜息混じりに一言、

「……………貴種のウサギ、本気で使えない」

「十六夜さんと同じことを言わないでください！本気でへこみますから！」

いや、だってね？今のところ黒ウサギが役に立っているなんて見たことないからさ……………妥当な評価だと思うけど？そんな感想を内心に思っていると怒りを表している黒ウサギを十六夜が制し、俺に問いかけてきた。

「それよりか驚いたぜ龍騎？お前あんな力を隠し持っていたなんてよ」

「そうですね。館に穴を空ける為に発動した爆発といい、ガルドの部下に発動したと思われるあの爆音、僕達がガルド討伐の最中でも聞こえてきましたよ？なんで僕達にそれを教えてくれなかったのですか？」

十六夜に続くようにジンも疑問を問いだしてきた。……………さて、どうやって誤魔化そうか？あまり俺の力は知られたくないし、だからといって全て嘘を言ったら十六夜あたりに勘付かれそうだしな……………。多少、真実を混ぜて誤魔化すかなさそうだな。

「俺の力はギフト名で言うところの五行思想”ってのが使えるんだ。五行思想”って分かるか？」

「自然界や人間社会の諸現象など森羅万象の生成・変化を、木・火・土・金・水という五つの要素をものの多様性とその変化の順序を統一あるものとして説明する原理……：……だったか？確か古代中国に端を発する自然哲学の思想と記憶しているが」

「まあ、そんなもんだ。簡潔に言うところ俺は木・火・土・金・水といった要素が自由に使えるんだ。例えるなら水を球体にしたたり、先言ったように爆発起こせたりとか」

「そんなに分かりやすい力を秘密する意味が分からないわ。龍騎君、理由を話してもらおうかしら？」

「ですよー。まあ、この程度で納得する方がおかしいしな。俺は自分の力について説明を続ける。」

「……………あまり言いたくなかったが、この力って意外と扱いにくいんだ。『五行思想』についてちゃんと理解していなくちゃいけないし、力の使い方を誤ると暴走して周囲が危険なんだ」

「……………要するに龍騎の力は扱いきれっていないってこと?」

「うぐつ!?ま、まあストレートに言ったらそうも言えるかな……………?」

嘘だ。確かに使いにくい力ではあるが自分はちゃんと使いきれているし、応用もしつかり出来る。だが、俺には『五行思想』以上に危険な力がある。それを隠すには自分の力を扱いきれいなと思わせた方が都合がいいのだ。

「それでだがな……………ジン、黒ウサギ。力を完全に扱いきれないように修行が出来る場所を提供してくれたらありがたいんだが」

これは俺の本心だ。今の俺だとそこら辺の雑魚なら何の問題はないんだが、これから先の修羅神仏相手だと全て力を使ったとしても良くて相討ち。最悪、何も手が出せない

まま俺の命や皆の命はこの世から消え去っていくだろう。その為、あの力を物にするために修行場所が必要なのだ。…………もうあんな出来事は二度と繰り返したくないからな。

「は、はい！空き地など沢山ありますから自由な場所を使つていただいて結構です！」

「そうですね。何も無いってことが私達のコミュニティの美点ですから♪」

あはは、とジンと黒ウサギが笑うが暫くすると暗い雰囲気を纏わせながらガクツと肩を落とす。……………そんなに傷つくなら自虐ネタを使わなくてもいいのに。

「これで俺が力を秘密にしていた説明は終わりだ。それよりか良いのか？そろそろ『フォレス・ガロ』の傘下のコミュニティが来る頃合いだと思うが？」

「おっと、忘れかけていたぜ。おい、御チビ。作戦の成功の為に奴らの旗印を探しに行くぞ。勿論、龍騎。てめえもな」

「は、はい！」

「あいよ。悪いけど、黒ウサギ達は此処に来る連中を門の前辺りに待機させといてくれるか？」

「それはいいですけど……何をなさるつもりで？」

黒ウサギが疑問符を浮かべながら俺に問いかけてくる。その後ろにいる飛鳥と耀も俺達は何をやらかすか気になるようだ。

「それは秘密。すぐに分かることだし、その時までお楽しみつてことで」

そう言つて俺は黒ウサギ達の返事を待たずに十六夜とジンの後を追いかけていった。

☆

数十分後、俺達は“フォレス・ガロ”の本拠から多くの旗印を発見し、それを門の前

まで持ち帰ってみると既に一〇〇〇人は超えているであろう群生が門の前に集まっていた。その数に驚きながらも俺達は壇上上がり、群生の前に立つ。すると、代表として一人の男性が俺達の目の前にやって来た。

「……………あの。先程 “フォレス・ガロ” の解散令が出たのですけど……………本当なんですか？」

代表者が当然の疑問を問いかけてきた。ここで俺が答えても意味がないのでジーンが答えさせるように促す。

「は、はい！ “フォレス・ガロ” は現時点で僕達 “ノーネーム” とギフトゲームに敗れ、解散しました」

「そうですか……………ガルドは貴方達が」

「はい。人質の件に関しては “階層支配者” にも連絡してあります。 “六百六十六の獣” が沽券を理由に元 “フォレス・ガロ” のメンバーを襲う事もないでしょう」

ジンの発言にざわざわと衆人に声が広がる。だが、歓声のようなものはあまりにも少なかった。それどころか人質が殺されたという事実には泣き崩れている者もいる。……予想通りの反応だな。確かに驚異は消えたが、“フオレス・ガロ”は腐つても隣で最大手のコミュニティだったからそれが無くなることに不安を感じるのだろう。それに――。

「一つ、とても重要な事をお聞きしたい」

「なんですか？お困りなら多少の相談には」

「いえ、その……まさか俺達は、貴方達のコミュニティ――“ノーネーム”の傘下に？」

……ああ、予想通りの事が起こったな。経済関係が不安定な“ノーネーム”が上に立たれたらそれは不安にもなるよなあ。視線をジンに移すと表情が強張っていて返答に詰まっているようだ。

……流石にこれは手助けした方が良さそうだな。十六夜とアイコンタクトを取る。お互い頷き合い、十六夜がジンの肩を後ろから抱き寄せ、衆人に対して高らかに宣告する。

「今より『フォレス・ガロ』に奪われた誇りをジン＝ラッセルが返還する！代表者は前へ！」

一斉に衆人の視線の的となる俺達。俺はジンの背中を叩いて前に出させる。衆人は未だ頭がついて行けていないのか呆然とする。そんな衆人に対して十六夜がらしくない尊大な物言いで叫びだす。

「聞こえなかったのか？お前達が奪われた誇り——『名』と『旗印』を返還すると言ったのだ！コミュニティの代表者は疾く前へ来い！『フォレス・ガロ』を打倒したジン＝ラッセルが、その手でお前達に返還していく！」

「ま、まさか」

「俺達の旗印が返ってくるのか……!?」

衆人は身内同士で顔を見合わせながら、ジンの前に一斉に雪崩れ込む。小さなジンを押しつぶしてしまいそんな人の群れに、俺が一喝と同時に地面を砕く程の足踏みで起こった衝撃波で押し返す。

「列を作れと言っただろうが！統率を取る気ないなら返還の話を無しにするぞ！それが嫌ならさっさと行動しろ！」

「は、はひいー！」

俺の威圧感に怯えてかすぐさま列を作りだす衆人。列を並び終わるのを確認すると俺と十六夜は語調を戻してジンに耳打ちをする。

「流れは作った。手渡す時に、しっかり自己主張するんだぜ？」

「堂々としてろよ？今の連中はお前のことを救世主と見てるだろうしさ。だから、頑張

れよ」

「わ、分かりました」

そう言い終わると俺達は飛鳥達の元に向かった。衆人の脇で見ていただけの三人だが、飛鳥は俺達の企んでいることを察したのかニヤニヤと笑みを浮かべており、黒ウサギと耀は分からずに不思議そうに首を傾げている。

「面白いことを考えているようね？」

「さて、なんの事かなお嬢様。なあ、龍騎」

「ああ、言っている意味がよく分からんな」

悪戯が成功したように笑顔を交わす三人。黒ウサギと耀は俺達のやり取りに更に疑問符を浮かべるのみだった。流石に二人だけ蚊帳の外なのは可哀想なのでヒント程度は教えるでしょう。

「ヒントを言うと、今回のギフトゲームは何の利益もないゲームだったが、俺らはいつか必ず有利になる物を手に入れたってことだ。分かるか？」

「……………？」

どうやら分からないようだ。そんな二人を見て苦笑いを浮かべながらジンや衆人がいる方向に視線を移す。次々と返還されていく旗印。狂喜して踊り回る者、旗を掲げ走り回る者、失った仲間の名前を泣き叫ぶ者までいた。その光景を見て俺はこの世界においてにはコミュニケーションの名と旗印は何物にも変えられない代物だと確信する。最後のコミュニケーションに旗印を返還し終えたジンに十六夜が立ち寄っていく。十六夜がいれば何とでもなるだろうと考え、此処で待機することにした。

「龍騎君、少しいいかしら？」

「……………龍騎」

「……………ん？何だ二人共？」

演説する十六夜の姿を傍観していると飛鳥と耀がこちらに寄ってきて話しかけてきた。特に断る理由もないので俺は応じることにした。

「あら？春日部さんも龍騎君に用があるのかしら？」

「……………うん。もう一度謝っておこうと思つて」

そう言つて耀は俺に向かつて深く頭を下げだした……………つて、おい！

「……………ごめん龍騎。私のせいで怪我をさせてしまつて……………本当にごめんなさい」

「や、止めろつて！こんなの猫にでも引つ搔かれたもんだつて」

「普通、全身切り裂かれた上にガラスの破片が刺さつたことにその例えでは済まないと思ふんだけど」

うぐっ!? た、確かにこれは苦しい誤魔化しだ。しかも、未だ耀は頭を下げたままだし……ああ、もう！俺、こういうの弱いんだって！

「頭上げろって！俺達は友達だろう？困った時はお互い様だろ！

「……………でも」

少し不満そうにしながらも頭を上げてくれる耀。なら、次はこの手で！

「セクハラネタはもういらなと思うわよ？というより、それ二回目だし」

「うん。しかもあの暗い雰囲気を払拭するために使ってた」

「ググっ!? き、気付いていたのか……………?」

「当然よ。あの程度の演技で私を黙せると思ったのかしら？多分、ジン君も気付いていると思うわよっ…」

「龍騎、あれを言う前に面白そうに笑ってたし」

クツ！まさか表情に出ていたとは……………！少し悔しいと思いつつも頭によぎった疑問を二人に問いだしてみる。

「つかぬことを聞くが……………もし俺が本気で言っていたらどうしてたんだ？」

「……………指定武器も手に入れたのだから試し斬りは必要よね？」

「……………グリフォンから貰ったギフトってまだ一回も使ってなかった」

「……………」

俺の体が凄まじい勢いで震えだしているのが分かる。もし一欠片でもそんな気持ちでもあつたらスプラッターになっていたかもしれないと思うと……………考えるだけでも背筋が凍る。クツ！ここまで人に恐怖したのは久しぶりだぜ……………っ！

「ま、まあそれは横に置いてくとして」

「逃げたわね」

「……………逃げた」

う、うるさい！べ、別にビビってるんじゃないからな！これは戦略的撤退なんだ！

「話を戻すけど、耀はどうやったら許してもらえらると思ってるんだ？このままだとい
たちごっこだぜ？」

「……………一回だけ」

「ん？何て言った？」

耀が小声で何か言ったようだが上手く聞き取れなかったので聞き返す。すると、今度

ははつきりとした声音で口を開く。

「一回だけ言うことを聞く……………それじゃあ駄目？」

「……………へっ？」

一瞬、頭の中が真っ白になる。い、今この娘何て言いましたか？言う事を聞く？それって……………いやいや、耀はそんなことで言ったわけではない。……………だが、男としてその言葉を聞くと少し期待というものが――。

「……………変なことに使ったら『潰すから』」

「イ、イエツサー!!」

耀からの威圧感に思わず敬礼をしてしまった俺。『潰す』って何を？、と思ったが怖すぎて聞く勇気がなかった。

「私の話は終わり。次は飛鳥の番」

耀は飛鳥に道を譲るように一歩後ろに下がる。飛鳥は耀に礼を言いながら俺に疑問を問いかけるため口を開く。

「単刀直入に言うわね？龍騎君は最初からコレを狙ってギフトゲームに挑んだの？」

そう言いながら衆人の方に指さす。俺は頷きながら肯定する。

「話を聞いて『ノーネーム』に一番必要なのは知名度だったと思ったからな。丁度、ガルドという悪役がいたから上手く利用させてもらった」

「そう………ちゃんと考えてギフトゲームに挑んだのね。私と違って目の前だけではなく先を見ているようね」

露骨に落ち込む飛鳥。コイツもかよ!?!俺、カウンセラーじゃないんだぞ!?!と、内心愚痴りながらもほっとけない性分なので飛鳥を励ますことにした。

「俺的には飛鳥の方が凄いと思うぞ？俺なんか打算的にこのギフトゲームに挑んだからな。もし、俺が提案していたら金品・ギフトなど要求していたかもしれない。でも、飛鳥はそんなことをせずに挑んだじゃないか。それは誇れることだぜ？もつとお前らしく堂々してろよ。落ち込んだって飛鳥らしくないしさ」

「……………はあ。確かに弱音を吐くなんて私らしくないわね。少しスッキリしたわ。ありがとう龍騎君」

「そうそう、それでこそ飛鳥だ。それに今回が駄目だったとしてもこの経験を次回に活かしたらいいんだ。その為のギフトゲームだったしな」

「……………そこまで考えていたのね。」

肩をすくめるが先程よりいい顔になった飛鳥を見ていつまでも引つ張る性格でなくて良かったと少し安心した。俺に弱音を吐いてくれるということは多少は信頼してくれたのかな？そんなこと思っていると衆人から歓声上がる。どうやら俺達の作戦は

成功したようだな。話に参加していなかった黒ウサギはいつの間にか壇上の上にながっており、ジンと十六夜と何かを話し合っていた。俺も会話に参加しようと三人の元に行こうと思つたがあることを思いだしもう一度飛鳥に向き合い、

「そういえば今まで言い忘れていたけどそのドレス似合っているぜ飛鳥」

「なっ………!?!」

真つ赤なドレスと同様に顔を紅に染めていく飛鳥。そんな飛鳥に意地悪っぽく笑いかけながら俺は十六夜達の元に駆け寄っていた。衆人の激励と後ろからの叫び声を耳にしながら………。

第十二章

「そういえば昔の仲間が景品に出されるギフトゲームはどうなった？」

あの後、俺達は「ノーネーム」の本拠に戻り、俺、十六夜、黒ウサギは三階にある談話室に集まり、仲間が景品に出されるゲームのことを話していた。俺と十六夜が参加すると聞いた黒ウサギは大歓喜していたのだが一転して泣きそうな顔になっていた。

「ゲームが延期？」

「はい……………申請に行った先で知りました。このまま中止の線もあるそうです」

黒ウサギが見て分かる程ウサ耳が萎れて、口惜しそうに顔を歪めながら落ち込んでいた。十六夜は肩透かしを食らったようにソファーに寝そべった。

「なんてつまらない事をしてくれるんだ。白夜叉に言っただうにかならないのか？」

「どうにもならないでしょう。どうやら巨額の買い手が付いてしまったそうですから」

それを聞いた俺は鏡を見ずとも不快そうな表情を浮かべているのが自覚できる。十六夜の表情も俺と同じ不快そうに歪めていた。この箱庭の世界では人間をチツプとして扱うこともあるので人の売り買いに対してはそこまで不快感はない。俺が不快だと思っただのは一度、ゲームの景品として出したものを、金を積まれたという事で取り下げるホストに対してだ。

「チツ。所詮は売買組織ってことかよ。エンターテイナーとしちや五流もいいところだ。『サウザンドアイズ』は巨大なコミュニティじゃなかったのか？プライドはねえのかよ」

「右に同意だ。ホストがそんなんでいいのか？俺なら看板に傷を付けるホストなんて脱退させるけどな」

「仕方がないですよ。『サウザンドアイズ』は群体コミュニケーションです。白夜叉様のような直轄の幹部が半分、傘下のコミュニケーションの幹部が半分です。今回の主催は『サウザンドアイズ』の傘下コミュニケーションの幹部、『ペルセウス』。双女神の看板に傷が付く事も気にならないほどのお金やギフトを得れば、ゲームの撤回ぐらいやるでしょう」

達観したような物言いをする黒ウサギだが、顔は悔しそうに歪めていた。…………黒ウサギが簡単に諦めることが出来るのは箱庭においてギフトゲームは絶対の法律だからだろう。敗者として奪われ、所有されてしまった仲間達を集めるのは容易ではないが、ギフトゲームでなら仲間を取り戻せる。その機会が無くなったことは純粹に運がなかったとしか考えることしか出来ないのだろう。…………だが、俺はこのことに納得なんて出来るはずがない。何とか昔の仲間を取り戻す方法を試行錯誤する。俺が考え事に没頭している中でも黒ウサギと十六夜の会話は続く。

「まあ、次回を期待するか。ところでその仲間ってのはどんな奴なんだ？」

「そうですね…………一言でいえば、スーパープラチナブロンドの超美人です。指を通して絹糸みたいに肌触りが良くて、湯浴みの時に濡れた髪が星の光でキラキラするので

す」

「へえ？よくわからんが見応えはありそうだな」

「それはもう！加えて思慮深く、黒ウサギより先輩でとても可愛がってくれました。近くに居るのならせめて一度お話ししたかったですけど……」

「おや、嬉しい事を言ってくれるじゃないか」

第三者の声を聞き、俺は思考を一時中断して声が聞こえた窓の外に視線を向ける。すると、そこにはコンコンとガラスを叩きながらにこやかに笑う金髪の少女が浮いていた。その姿を見た黒ウサギが驚愕した表情で急いで窓に駆け寄った。

「レ、レティシア様!？」

「様はよせ。今の私は他人に所有される身分。『箱庭の貴族』ともあろうものが、モノに敬意を払ってでは笑われるぞ」

黒ウサギが窓の錠を開けると、レティシアと呼ばれた少女は苦笑しながら談話室に入ってきた。金髪にリボンを結び、紅いレザージャケットに拘束具を彷彿させるロングスカートを着た少女はどう見ても黒ウサギが先輩と呼ぶには幼く見える。……まあ、箱庭だし見た目と年齢が違うってことぐらいはありそうだし特に気にするところではないだろう。

「こんな場所からの入室で済まない。ジンには見つからずに黒ウサギと会いたかったんだ」

「そ、そうでしたか。あ、すぐにお茶を淹れるので少々お待ちください！」

黒ウサギは小躍りするようなステップで茶室に向かった。久しぶりに仲間に会えたことに嬉しかったのだろうと見て取れるように分かりやすかった。そんな黒ウサギを見送りながら、視線をレティシアと呼ばれる少女に移す。改めて見ると感じたことのある気配がレティシアから感じた。やっぱりコイツは……。探るような視線に気付いたのかレティシアは小首を傾げなら問いかけてきた。

「どうした二人共？私の顔に何か付いているのか？」

「別に。前評判通りの美人……いや、美少女だと思って。お前なんかドストライクな
んかじゃないのか龍騎？」

「おい！まだそれを引つ張るのかよ!?!いい加減にしてくれよ！今日だって帰ってきた
時、黒ウサギが意図的に子供達を庇う様に立っていたんだぞ!?!俺にはその気はないつて
のによ！」

「えっ、違うのか？」

「上等だゴラア！表に出ろ!!」

俺達のやり取りにレティシアは心底楽しそうに哄笑する。口元を押さえながら笑いを
噛み殺しながらも上品に席に着く。

「ふふ、なるほど。君達が十六夜と龍騎か。白夜叉の話通り面白い二人だ。しかし鑑賞するなら黒ウサギも負けてないと思うのだが。あれは私と違う方向性の可愛さがあるぞ」

「あれは愛玩動物なんだから、鑑賞するより弄ってナンボだろ」

「あんな弄りやすい逸材に何もしないってのはどうかと思ってると思うのだが？」

「ふむ。否定はしない」

「否定してください！」

紅茶のティーセットを持ってきた黒ウサギが帰ってきた。口を尖らせながら不機嫌ですよと言いたげな表情で温められたカップに紅茶を注ぐ。

「レティシア様と比べられれば世の女性の殆どが観賞価値のない女性でございます。黒ウサギだけが見劣るわけではありませんっ」

「いや、全く負けちゃいねえぜ？違う方向性で美人なのは否定しねえよ。好みでいえば黒ウサギの方が断然タイプだからな」

「……………。そ、そうですか」

十六夜の言葉に頬とウサ耳を紅くなっっていく黒ウサギ。

「……………なあ、レティシア。口の中が甘ったるいんだが塩とか持っていないか？」

「残念ながら持っていないな。黒ウサギ、私と龍騎は別室に移動した方がいいのか？」

「め、滅相も御座いません！して、どのようなご用件ですか？」

黒ウサギが慌てて話を戻す。羞恥で焦る黒ウサギを弄りたいところなのだがこつちの用件の方が重要なので諦めるとしよう。だが、レティシアの用件は大体察しはつく。俺はレティシアに向けて皮肉を込めて口を開いた。

「それで用件ってのは今日のギフトゲームのことか、吸血鬼さん？」

俺の言葉に三人が反応する。十六夜は純粋に驚愕し、レティシアは興味深く俺を見つめ、黒ウサギは予想が当たったのか一瞬驚愕してからレティシアを瞳に移していた。そんな中レティシアが疑問に思ったのか俺に問いだしてきた。

「いつから気付いていたんだ？私が吸血鬼である事、そして今回のギフトゲームを裏から操っていたことを」

「第三者が今回のギフトゲームを操っている事に気付いたのは木々が『鬼化』していたからだ。まあ、昨日読んだ書物の中に吸血鬼について記されている本があったおかげで気付けたんだけどな」

「……………なるほどな。だが、それだけでは私がそれをやってのけた吸血鬼だと決め付けるのは早計ではないか？」

「俺は一度吸血鬼に会ったことがあるからな。それと似た気配がお前から感じたからだ」

そう言い終わると、俺は紅茶が注がれたカップを手に持ち、口につける。しばし、静寂が包み込むが、その雰囲気はレティシアの哄笑によって霧散された。

「ふふ……………どうやら私の心配は無駄だったようだな。こんな逞しい仲間が入ればコミュニケーションは安心だな」

「……………どういうことですか？」

「今回、私が黒ウサギに会いに来たのはコミュニケーションを解散するように説得しに来たのだ。コミュニケーションの再建など……………それがどれだけ茨の道なのかお前が分かっているとは思えなかったからな」

「……………」

凶星なのか黒ウサギが黙り込む。まあ、険しい道のりなのは黒ウサギも重々承知だろう。だが、黒ウサギもジンも再建という夢を捨てきれなかったから今まで身を粉にして頑張ってきたんだろう。

「そしてようやくお前達と接触するチャンスを得た時……看過出来ぬ話を耳にした」

「それが俺達……ってことか？」

今まで黙っていた十六夜が言い当てる。レティシアはそれに頷いて返す。

「そこで私は一つ試してみたくなった。その新人達がコミュニティを救えるだけの力を秘めているのかどうかを」

「結果は？」

黒ウサギが真剣な眼差しで問いかける。レティシアは苦笑しながら微笑する。

「ガルドで当て馬にしたのだが、龍騎以外はまだまだ青い果実で判断に困る………だが、龍騎の観察眼と統率力を見てコミュニティの再建も夢ではないと安心したよ」

「……………それでいいのか？」

「……………十六夜さん？」

レティシアに問いかける十六夜に黒ウサギが不思議そうに首を傾げる。……………なんか雲行きが悪くなってきた気がする。

「俺としては龍騎だけのワンマンチームと思われるのは癪だからな。俺の力も試して見
てはどうだ？」

「……………何？」

「実に簡単な話だ。その身で、その力で試せばいい———どうだい、元・魔王様？」

スつと立ち上がる十六夜。その意図に気付いたレティシアは一瞬唾然とするが、先程より弾けるような笑い声を上げる。涙目になりながらも立ち上がる。

「ふふ………なるほど。それは思いつかなんだ。実に分かりやすい。下手な策を弄さず、初めからそうしていればよかつたなあ」

「はあ………結局こうなるのか」

「ちよ、ちよつと御二人様？」

「ゲームのルールはどうする？」

「どうせ力試しだ手間暇をかける必要もない。双方が共に一撃ずつ撃ち合い、そして受け合う」

「地に足を着けて立っていたものの勝ち。いいね、シンプルイズベストって奴？」

二人は笑みを交わし窓から中庭へ同時に飛び出した。せっかく穩便に話を終えようとしたのにあのバカ! っただけ戦闘狂なんだよ! っそう内心で愚痴りながら俺も窓から中庭へと飛び出す。窓から少し離れた中庭ではレティシアは上空、十六夜は地面と既に向かい合う二人が戦闘体勢にはいつていた。

「へえ? 箱庭の吸血鬼は翼が生えているのか?」

「ああ。翼で飛んでいる訳ではないがな。………制空権を支配されるのは不満か?」

「いいや。ルールにはそんなのはなかったしな」

飄々と肩を竦める十六夜。あいつ、絶対この状況を楽しんでいるな。まあいい。俺も十六夜の実力は気になっていたところだ。ここはおとなしく静観することにしておくか。

満月を背負うレティシアは微笑と共に黒い翼を広げ、ギフトカードを取り出した。金と紅と黒のコントラストで彩されたギフトカードを見た黒ウサギは蒼白になって叫び

だす。

「れ、レティシア様!?!そのギフトカードは」

「下がれ黒ウサギ。力試しとはいえ、コレが決闘であることに変わり無い」

「龍騎、テメエもだぞ」

「分かってるよ」

そしてレティシアのギフトカードが輝き、光の粒子が収束され外殻を作り、瞬間爆ぜたように長柄の武具が発現された。

「互いにランスを一打投擲する。受け手は止められねば敗北。悪いが先手は譲ってもら
うぞ」

「好きにしな」

発現された槍を手に取り掲げるレティシア。それに対して十六夜は軽薄そうに笑うのみだった。

「ふっ——！」

レティシアは呼吸を整え、黒い翼を大きく広げる。それは空気中でも視認できるほどの巨大な波紋が広がる衝撃だった。

「ハアア!!」

そして、怒号と共に掲げた槍を十六夜に放たれる。槍は瞬く間に摩擦で熱を帯び、一直線へと十六夜に向かって落下していく。その流星の如く大気を揺らしながら放たれた槍の先端を前に十六夜は牙を剥いて笑い、

「カッ————しゃらくせえ！」

槍の先端を殴りつけた。

「——は……………!?!」

「……………ん?」

素つ頓狂な声を上げるレティシアに黒ウサギ。そして違和感を感じ、首を傾げる俺。レティシアの槍はそれなりの威力はあったが蛇神を倒した十六夜なら今の威力程度耐えられると思った。だが、俺の予想は大きく外れあっさりと言は破壊されたのだ。おかしい……………。元・魔王にしては手応えがなさすぎる。まさか今のレティシアは——。

今感じた疑問について考えていると十六夜によつて鉄塊にされた槍は散弾銃となつてレティシアに襲いかかる。おっと、これは直撃しそうだし助けてやるとするか。そう考えた俺は地面を蹴り上げ、一瞬にしてレティシアの元に辿り着く。鉄塊が目の前まで襲いかかつて来たので俺は魔法陣を展開する。散弾銃となつた鉄塊と魔法陣が金属音が鳴り響かせる中、俺はレティシアを抱きかかえ急いで回避する。そのまま落下し

ていくが、俺は体勢を戻し何もなかったかのように地面に着地する。

「りゅ、龍騎！何を！」

レティシアが声を上げる。だが、その声は決闘を邪魔された非難の声ではなかった。今のはレティシア自身も自分の敗北であることを理解出来ないほど愚かではないだろう。では、何故声を上げたのか。それは俺がレティシアに抱きかかえた時に掠め取ったギフトカードに対する抗議の声だろう。俺はその抗議に乗らず、レティシアのギフトカードの詳細を読み上げる。

「ギフトネーム・ロード・オブ・パンバイア純潔の吸血鬼………なんだこりや？武具らしきものは多少あるが恩恵が殆どないぞ」

「っ……………！」

さつと目を背けるレティシア。安否を確かめるために駆け寄ってきた黒ウサギが驚愕しながら問いかけてきた。

「な、なんですって!?!それは本当ですか龍騎さん!?!」

「ああ」

俺は肯定しながら黒ウサギにレティシアのギフトカードを渡す。黒ウサギは受け取りギフトカードを読み上げると震える声でレティシアに向き直る。

「……………やっぱり、ギフトネームが変わっている。鬼種は残っているものの、神格が残っていない」

「なんだよ。もしかして元・魔王様のギフトって、吸血鬼のギフトしか残ってねえの?」

歩み寄って来た十六夜が白けたような呆れた表情で肩を竦ませる。やっぱりそうか。あまりにも威力が低すぎるからレティシアの恩恵に何かしらの問題があると推測したんだがまさか当たるとはな……………。

「……………はい。龍騎さんの言った通り、武具は多少残してありますが、自身に宿る恩恵は……………」

十六夜は隠す素振りもなく盛大に舌打ちをする。まあ、あいつのプライド的にも弱りきった状態で相手された事が不満なんだろう。

「ハッ。どうりで齒ごたえが無いわけだ。他人に所有されたらギフトまで奪われるのかよ」

「いいえ……………魔王がコミュニティから奪ったのは人材であつてギフトではありません。武具などの顕現しているギフトと違い、『恩恵』とは様々な神仏や精霊から受けた奇跡、云わば魂の一部。隷属させた相手から合意なしにギフトを奪う事は出来ません」

ということとは、レイシアが自分からギフトを差し出したという事になる。その本人であるレイシアは二人の視線を受けて苦虫を噛み潰したような表情を浮かべながら目を逸らす。黒ウサギも苦い表情でレイシアに問いかける。

「レティシア様は鬼種の純血と神格の両方を備えていたため『魔王』と自称するほどの力を持てたはず。今の貴女はかつての十分の一にも満ちません。どうしてこんなことに……………」

「……………それは」

レティシアは言葉を口にしようとして呑み込む仕草を幾度か繰り返す——が、打ち明けることはなく、口は閉ざされたまま俯いてしまった。十六夜は頭を掻きながら鬱陶しそうに提案する。

「まあ、あれだ。話があるならとりあえず屋敷に戻ろうぜ」

「……………そう、ですね」

二人共、沈鬱そうに頷くのだった。

「……………てか、龍騎いつまで抱きかかえているつもりだ」

「そ、そうだぞ。……………流石の私もコレは少し恥ずかしいのだが」

少し頬を染めるレティシアにしている持ち上げ方は人を横にして抱き上げる——
所謂お姫様だっこというものだ。俺としては抱きかかえやすいからこの持ち上げ方に
したんだが、やっぱり女性であるレティシアは恥ずかしいようだ。俺も下ろしてやりた
いのは山々なのだが——。

「悪いけどそれは却下だな。下ろすのはまず礼儀がなっていない奴を掃除してからだ」

「……………それはどういう」

瞬間、遠方から褐色の光が俺達を差し込み、レティシアはハツとして叫びだす。

「あの光……………ゴーゴンの威光!?! まずい、見つかった! 龍騎、急いで回避を——」

そして、レティシアの焦燥の混じった声と共に俺とレティシアは褐色の光に包まれた

のであつた。

第十三章

「レティシアさん!? 龍騎さん!？」

褐色の光を全身に受けた龍騎とレティシアは瞬く間に石像となつて横たわり、黒ウサギが悲鳴を上げる。すると、光が差し込んだ方角から、翼の生えた靴を装着した騎士風の男達が押し寄せてきた。

「いたぞ! 吸血鬼は石化させた! すぐに捕獲しろ!」

「例の『ノーネーム』も石化したようだがどうする!？」

「商品を買つては価値が下がる。面倒だが一緒に回収するぞ」

「他の連中はどうする!？」

「邪魔するようなら構わん、斬り捨てろ！」

空を駆ける騎士達の会話を聞いた十六夜は不機嫌そうに、尚且つ獰猛に笑って呟く。

「まいったな、生まれて初めておまけに扱われたぜ。手を叩いて喜ばばいいのか、怒りに任せて叩き潰せばいいのか、黒ウサギはどっちだと思う？」

「と、とりあえず本拠に逃げてください！」

石になった龍騎とレティシアの事は気にかかるが、今はそれどころではないのだ。レティシア自身は「ペルセウス」の所有物なのだ。それなのに主の命もなく出歩いたのなら底う余地が無い。

しかも「ペルセウス」は「サウザンドアイズ」の幹部を務めているコミュニティ。万が一、揉め事を起こしてはただでは済まない上に白夜叉に迷惑がかかるかもしれないのだ。黒ウサギは自分の無力さに唇を噛み締めながらも慌てて十六夜を本拠に引つ張り込むと、騎士達の中から三人が降り立ち、石像と化した龍騎とレティシアを取り囲み

安堵したように縄をかけ始める。

「これでよし……危うく取り逃がすところだったな」

「ギフトゲームを中止してまで用意した大口の取引だ。台無しになれば『サウザンドアイズ』に我ら『ペルセウス』の居場所は無くなっていたぞ」

「それだけじゃない。箱庭の外とはいえ、交渉相手は一国規模のコミュニティだ。もしも奪われでもしたら——」

「箱庭の外ですって!?!」

黒ウサギの叫びに、龍騎とレイシアを運び出そうとしていた騎士達の手が止まる。邪魔者と認識していた『ノーネーム』の叫びに、敵意を込めて黒ウサギを見つめる。だが、黒ウサギは騎士達の視線など気にも留めず、走り寄って抗議の声を上げた。

「一体どういうことです! 彼らヴァンパイアは——『箱庭の騎士』は箱庭の中でしか

太陽の光を受けられないのですよ!? そのヴァンパイアを箱庭の外に連れ出すなんて……!」

「我らの首領が取り決めた交渉。部外者は黙っている」

騎士は振り返り、突き放すように語る。本来ならば本拠への不当な侵入はコミュニケーションへの侮辱行為であり、世間的にもよろしくない。信頼が命の商業コミュニケーションである「サウザンドアイズ」ならばこのような暴挙をする事は無いだろう。それなのにこうも黒ウサギ達を侮辱する事は明らかに「ノーネーム」を見下した上での行為だ。

「こ、この……! これだけ無遠慮に無礼を働いておきながら、非礼を詫びる一言もないのですか!? それでよく双女神の旗を掲げていられるものですね、貴方達は!!」

激昂する黒ウサギだが「ペルセウス」の騎士達は鼻で笑った。

「ふん。こんな下層に本拠を構えるコミュニケーションに礼を尽くしては、それこそ我らの旗に傷が付くわ。身の程を知れ「名無し」が」

「なっ……なんですって……!!」

黒ウサギから堪忍袋が爆発した音がした。レテイシアの扱いやコミュニケーションを侮辱する行動と発言の数々に、黒ウサギの沸点は一気に振りきれたのだ。怒りに震える黒ウサギを見下す騎士達はその姿に再度鼻で笑う。

「フン。戦うというのか？」

「愚かな。自軍の旗も守れなかった。名無し」など我らの敵ではないぞ」

「恥知らず共め。我らが御旗の下に成敗してやるわ！」

口々に罵り猛る騎士達はゴーゴンの旗印を大きく掲げながら戦闘体勢に入る。一触即発の雰囲気の中、疑問の声上がる。

「吸血鬼と一緒に石化させたもう一人の男はどうするつもりなんだ？」

「そんなもの箱庭の外でも捨ててしまふまでよ！」

「それはそれは外道なことで。そんなことすれば“ペルセウス”の存続問題になりかねないか？」

「フン。口止めすれば早い話だ。“名無し”相手になら簡単に——」

と、ここでこの場にいる全員が疑問符を浮かべる。声音は明らかに男のもので女性である黒ウサギではない。なら、先程いた十六夜が声の主なのかと考えるが十六夜は未だに本拠の中にいるのだ。しかもその声は騎士達の背後から聞こえてきたのだ。騎士達はすぐさまに後ろを振り返るが、

『刺し貫け、石柱！』

言葉が放たれる。すると、騎士達の肩、足、腕などに鋭利な石柱が何本も刺し貫かれていた。それに気付いた騎士達は激痛に襲われ悲鳴を上げながら地面へと倒れこむ。

嘩然とする黒ウサギだが、深夜の闇から現れる人物達を視界に入れると一転驚愕したように表情が変わった。それはそうだろう。

何せその人物とは……………。

「なあ、レティシア。こいつら本当に商業コミュニティなのか？色々と酷すぎるんだが」

「……………一応、そうなのだが先程のやり取りを見るとそう思ってもおかしくはないか」

未だに石像となっているはずの龍騎とレティシアが何もなかったかのようにそこに立っていたからだった。

☆

「レティシア様!?! 龍騎さん!?! 何故貴女達がそこに!?!」

「おいおい黒ウサギ。まさか俺達のことか分からないのか？だからお前は、箱庭の貴族(笑) “ って言われるんだよ」

突然の俺達の登場に動揺を隠しきれない黒ウサギに対して俺は肩を竦めながら毒を吐く。だが、未だに現状を処理しきれない黒ウサギには耳に届かなかつたのか俺とレティシアの姿をした石像を指差しながら問いかけてくる。

「し、しかし！今もそこに龍騎さんとレティシア様の石像がっ……………」

「ああ、それは俺が作ったダミー。こいつらを欺くため、光に包まれる前に作ってその間に飛んでいた連中を片付けていたんだ……………不可視のギフトを使ったのか既に退却していないがな」

そう言いながら、俺は裏拳で俺とレティシアの石像を砕く。真実を聞いた黒ウサギは呆気にとられて呆然とする。すると、本拠の中にいた十六夜が軽薄な笑みを浮かべながらこちらにやってきた。

「種明かしを済んだところで悪いが、これからどうするんだ？今の一件は絶対『ペルセウス』のリーダーに報告され、報復しにやってくるぞ？」

「私を助けてくれた事には感謝するが、ここまでやってしまつたら私を差し出す程度では奴らの怒りは収まらんぞ」

十六夜は俺を試すような物言いで、レティシアは心配そうにしながらもこれからの対処方法を問いだしてくる。今の事態を理解したのか黒ウサギは不安そうに俺を見つめてくる。不安そうな表情をする黒ウサギを安心させるため不敵な笑みを浮かべる。

「そんなの百も承知だ。俺がそのことを考えていないと思つたか？」

「いや、お前ならそれぐらい考えつくだろうし、ただの確認だ。期待しているぜ？」

「ハッ！俺の作戦に度肝を抜くなよ？」

俺と十六夜のいつもの会話に黒ウサギは安心したように胸をなでおろす。そして、俺に話しかけるために声を掛けようとするが、俺の左手を見て不思議そうに問いかけてくる。

「龍騎さん……左手に巻いてある布はどうしたんですか？」

そう。黒ウサギが言った通り、俺の左手には黒い布が巻かれているのだ。これには訳があるのだが、此処で言っても面白くないので適当に誤魔化すことにした。

「まあ、布で巻いている訳は後で教えるよ。それよりかジン、飛鳥、耀を呼んできてくれないか？今からこの事情に詳しくそうだな……白夜叉に会いに行くからな。……あ、それと昼のギフトゲームで疲れているかもしれないから来れる奴だけでいいぜ？」

「は、はあ……分かりました」

納得いかない顔をしながらも俺の指示に従って皆を呼びに本拠に入っていった。それと入れ替わるようにレティシアが申し訳なきようにこちらにやってきた。

「済まないな龍騎。私が抜け出しさえしなければ」

「気にすんな。というか俺がレティシアに感謝しなきゃいけないんだ」

「……………それはどういうことだ？」

首を傾げながら疑問を問いかけてくるレティシアに俺は悪戯っぽく笑う。いや、本当にレティシアにはありがたいことをしてくれた。今回のおかげで「ノーネーム」とつて大きな進歩になるからな。そんなことを内心思いながら黒ウサギが来るまで十六夜とレティシアと雑談しながら待っているのだった。

☆

その後、黒ウサギが連れて来たのは飛鳥だけであり、ジンと耀は既に就寝していたらしい。よって、俺、十六夜、黒ウサギ、飛鳥、レティシアというメンバーで「サウザンドアイズ」二一〇五三八〇支店に向かっていったのだった。ちなみに飛鳥とレティシアはお互い自己紹介済みだ。街道ランプが仄かな輝きで照らしている道を歩いている途中、十六夜が早足なまま空を見上げながら呟く。

「こんなにもいい星空なのに、出歩いている奴はほとんどいないな。俺の地元なら金をとれるぜ」

「十六夜に同意。こんな綺麗な星空を見れるとこなんて田舎ぐらいじゃないか？」

俺が箱庭の世界に来る前は年中眩い光に包まれる夜の街で生活してきたのだ。俺にとつて車が走る騒音も人の歓声と喧騒もない街道を歩くなど久しぶりで新鮮に感じるのだ。この静かな夜の街を満喫しながら歩み続けていると、飛鳥が疑問を口に出した。

「これだけハッキリ満月が出ているのに、星の光が霞まないなんておかしくないかしら？」

「箱庭の天幕は星の光を目視しやすいように作られていますから」

「そうなの？ だけどそれ、何か利点があるのかしら？」

飛鳥の疑問は興味深いことだった。確かに太陽の光から吸血鬼のような種族を守る

ためなのは分かるが、星の光を際立たせる意味があるのかは分からないのだ。

「ああ、それはですね」

黒ウサギは焦るように小走りをしていたが歩幅を緩め、飛鳥の疑問を答えようとするが十六夜が横槍を入れ黒ウサギの言葉を遮る。

「おいおいお嬢様。その質問は無粋だぜ。夜に綺麗な星が見れますように」っていう職人の心意気が分からねえのか？」

「あら、それは素敵な心遣いね。とてもロマンがあるわ」

「……………そ、そうですね」

そんな会話をしながら歩いていくと「サウザンドアイズ」の門前に着き、俺達を出迎えたのは無愛想な女性店員だった。

「お待ちしてりました。中でオーナーとルイオス様がお待ちです」

「ルイオス？……ああ、ペルセウス”のリーダーか。これは丁度いい、呼ぶ手間が省けたな」

カラカラと笑いながら俺は店内に入っていく、後ろから黒ウサギ達が俺の後に続く。気配を頼りに中庭を抜けて離れの家屋に向かっていく。

「邪魔すんぞ、白夜叉」

離れの家屋に何かしらの細工が施していることに気付き、ノックと挨拶しながら扉を蹴りで壊しながら中に入っていく。皿の破片らしきものが部屋を散らかし、そこには白夜叉とルイオスと思われる亜麻色の髪に蛇皮の上着を着た男がいた。ルイオスは俺の態度が気に食わなかったのかイラついたように口を開いた。

「おい、礼儀がなっていないな”名無し”……俺が誰か分かってんのか？」

「知らんし、知る気もない。御山の大将には興味がないんでね」

「……………どうやら礼儀を教えてやる必要がありそうだな」

俺の挑発に怒りで体を震わせながらギフトカードを取り出し、鎌を発現した。一触即発の空気の中、白夜叉の怒号が家屋に響き渡る。

「静まれ馬鹿者共！話し合いが出来ぬなら門前に放り出すぞ！」

「……………チツ。白夜叉に救われたな。名無し」

「お前らも入ってこいよ。話が出来ないじゃないか」

ルイオスの言葉を無視し、皆を中に入るように呼びかける。その行動に更にイラついたのか顔を歪ませていた。……………この程度の挑発も流せないとはこいつも高が知れているな。そんなことを思いながらも皆は次々と家屋の中に入っていく。レティシアが家屋に入ってくると、ルイオスが先程まで怒りで歪ませていた顔がにこやかな笑みへと

変わっていった。

「なんだ、お前らはウチの商品を返しに来てくれたのか？」

「なわけないだろう。俺達が来たのは別件だ」

そう言いながら俺は破片がない場所に座り込む。ルイオスが睨んでくるが無視無視。

「今回、此処に来たのは『ペルセウス』が俺達に対して無礼を振るつたので謝罪でも貰おうかなと」

「……………詳細を話せ小僧」

白夜叉から発言の許可をもらったので俺は今までの経緯を語りだした。不法侵入、数々の暴挙と暴言、そして浅さかな捕獲方法で自分が危なかったことを全て話した。その間、ルイオスは余裕そうに笑みを浮かべるだけだった。

「——まあ、こんなことがあったから『ペルセウス』のリーダーとして責任は果たしてもらおうかと居場所を知っていきそうな白夜叉に会いに此処まで来たってことだ。何故か此処にそのリーダーさんがいたから手間は省けたけどな」

何故かというところをわざと強調する。だが、ルイオスは動じなく静観するのみ。余裕でいられるのも今のうちだから特に注意する気がないがな。

「う、うむ。『ペルセウス』の不法侵入に所有物であるヴァンパイアを捕獲する際における数々の暴挙と暴言。そして、無関係な人間ごと捕獲するという浅さかさ。確かに受け取った」

「それでこれが本題なんだがこちらの要求はレティシアの身柄を俺達の所有物に。後は……………金貨50枚ぐらい貰おうかな？」

俺の要求にここにいる全員が驚愕の表情を浮かべる。まあ、それはそうだろうな。金貨50枚なんて大金の上に既に買取り先が決まっているレティシアを渡せって言っているんだからな。そんなことをすれば『ペルセウス』の信頼は急激に下がるし、金欠状

態になるのだからだ。先程まで余裕そうに詳細を聞いていたルイオスが慌てて異議を唱える。

「ふ、ふぎけんな！そんな要求、通すはずがないだろ！」

「そ、そうじゃぞおんし！流石に欲深すぎるぞ!？」

「白夜又は黙ってくれ。これは俺達『ノーネーム』と『ペルセウス』の問題だ。『サウザンドアイズ』には立会人として見届けてくれないか？」

白夜又は俺の言葉に一瞬、考察している素振りを見せると俺の狙いを察したのか面白そうに笑みを浮かべる。俺はそれを確認してから更に話し続ける。

「まあ、金貨は後日に払ってもらおうとしてレティシアはこの場で貰うから」

「しよ、証拠は!?ウチのコミュニティがそれをやったという証拠を出せ!そもそも、あの吸血鬼が逃げ出した原因はお前達だろ!実は盗んだんじゃないのか!？」

ルイオスの往生際の悪さと暴言に黒ウサギと飛鳥が激昂しそうになるが俺が右手で制し、おとなしくさせた。ルイオス、俺が証拠も無しにそんな要求をするわけないだろ？ さあ、絶望しな…… “ノーネーム” を見下していた分の利子をたっぷり返してやるよ。

俺は左手に巻いていた黒布を解く。そして、此処にいる全員が俺の左手を見て絶句する。まあ、予想通りの反応だな。そりゃあ、俺の左手が…… 石化なんてしていたら誰でも驚くだろうな。

「確か…… ゴーゴンの威光だっけ？ 必死に避けたんだが左手は間に合わなくてな…… さてと、 “ペルセウス” のリーダーさん。反論があれば聞きますが？」

嫌味つぼく笑みを浮かべる。だが、ルイオスは顔を蒼白にさせ、俺を気にする余裕はなさそうだ。俺の証拠を認めたくないのかルイオスは声を荒げる。

「レ、レプリカだ！ それでゴーゴンの威光に見せかけるための」

「じゃあ、中立である白夜叉に鑑定してもらおうか？それが嫌なら違うコミュニティに鑑定してもらおうという手もあるが……俺はどっちでもいいぜ？」

ルイオスの異議を一刀両断する。押し黙るルイオスだが必死に反論材料を考える素振りをして、未だ認めようとしめない気だ。こいつに時間を掛ける気はないので俺は止めの一撃を放つことにした。

「なら、『サウザンドアイズ』のリーダーから取り立てに行きますか。傘下である『ペルセウス』が起こした暴挙を貴方が責任取ってくださいって」

「なっ!？」

俺の言葉に再度絶句するルイオス。もし、今の俺の姿……ゴーンの威光によって石化した左手に血で染まったブレザーで経緯を説明でもすれば当然『ペルセウス』は『サウザンドアイズ』から要求を受けるように命令し、その後は追放されるだろう。そうなれば『ペルセウス』は後ろ盾は消える上に活動が不可能になる可能性が高い。ル

イオスの最善の道は俺の要求を受け入れるのが最小限の損害なのだ。

「悪いけど白夜叉。今から『サウザンドアイズ』のリーダーの下まで案内してくれないか？」

「……………仕方がないのう。夜分だがこの話は今するべきじやろうし、早速」

「……………わ、分かった！お前達の要求を全て呑む……………！」

悔しそうに俺を睨みつけながら要求を呑むことを認めるルイオス。俺はそんなの気にせずに話を進める。

「OK。じゃあ、白夜叉。何度も悪いが紙と書く物ないか？こいつに契約書を書かせるからさ」

「良からう。口約束では破られる可能性があるかもしれないのう」

満面の笑みを浮かべながら了承してくれた白夜又は柏手を打ち、紙とペンがルイオスの眼前に発現される。ルイオスは屈辱に表情を歪めながらペンを手に持ち、紙に字を書いていく。暫く字を書く音だけが家屋に響き渡る。ルイオスが書き終わつたのかペンを置くと、俺はルイオスが書いた契約書を強引に奪い取りどこか細工してないか確認する。

「……………ん、おかしいところはないしこれで契約成立だな。一応、俺達 “ノーネーム” からは “サウザンドアイズ” に報告しないでおこう」

そう言いながら俺は立ち上がり、この場を後にするためルイオスに背を向ける。俺の交渉という名の脅迫を呆然と見ていた十六夜を除く皆も慌てて立ち上がり、家屋から出て行く。ちなみに十六夜は必死に笑いを耐えるように堪えていました。俺もさつさと家屋から出ようと足に力を入れ歩んでいこうとするが、更に屈辱を与えたいと思いつき、後ろを振り返ることをせずに最後にルイオスに一言。

「Good—bye, in—fer—ri—o—ri—ty.
It was a petty match.」
じやあな、名前前負け
つまんない勝負だっただぜ

そう言い残し、俺は
“サウザンドアイズ” 二一〇五三八〇支店から出ていく為に歩き
だしたのだった。

第十四章

「凄いのです！あの『ペルセウス』のリーダーに一泡吹かせるだけでなく、レティシア様を取り返して頂くなんて……！本当に、本当にありがとうございます！」

「わ、分かった！嬉しいのは分かったからその手を離してくれ！さっきから後ろから冷たい視線を向けられてるんだから！」

あの後、『サウンドアイズ』二一〇五三八〇外門支店から退出していき俺達の本拠の談話室まで戻ると、帰り道は始終無言だった黒ウサギがダムが決壊したかのように歓喜し俺に抱きついてきたのだ。最初は俺も抱きつかれた時に感じた柔らかな感触に役得だと思っていたのだが後ろから飛鳥とレティシアが冷たい視線を俺に向けられている事に気づき、離れるよう黒ウサギを説得しているんだがその視線に気付かない程喜んでいのか俺の声が全く届いていなく更に強く抱きついてきたのだ。

そして、更に寒さが増す二人の視線。……………天国と地獄とはこのことなのか。そんなくだらないことを考え現実逃避を試みるが事態が変わる様子もない。このままでまた不名誉な称号を付けられる恐れがあるため俺はこの状況を変える為、はしやいでいる黒ウサギが冷静になるように口を開く。

「く、黒ウサギ、喜ぶのは早いって！まだ全部終わったわけじゃないんだからさー！」

「……………えっ？それはどういうことですか？」

黒ウサギが俺の言葉に少し驚いた顔で俺を見つめてくる。当然、抱きつかれたままで見つめられると上目遣いになる訳で……………かなりグツとくるものがある。抱きつきたい衝動に駆られるが、俺は離れるよう黒ウサギを促す。俺に促されて落ち着いた黒ウサギは今の自分の体勢に気付いたのか頬とウサ耳を真っ赤に染めながら慌てて俺から離れていった。その様子を見て少し勿体無いことをしたと残念に思いながらも話を続けることにした。

「確かにあの名前負けからレティシアを奪回することに成功したが、プライドを粉々に

されたあいつがおとなしく黙っていると思うか？」

その言葉に皆がハツと気付いたのか思案顔になり重苦しい雰囲気が漂わせる。

「……………高い確率で報復しにまた本拠を侵入してくるだろう。私を取り返すためにな」

「いくら契約書を書かせたからといっても、あの人柄を見ると『ノーネーム』だからだと契約を無視するのは目に見えているわ」

「もし成功すれば、報復だけではなく商談も成立する上に『サウザンドアイズ』と外部に失態を漏れる恐れがなくなる……………一石二鳥ならぬ一石三鳥ですね」

三人は『ペルセウス』がやりかねない行動を口にしていく。最悪の展開を避けた『ペルセウス』だが、それでも大打撃を受けることには変わりようはないのだ。多額の金額を見逃すどころか失う上に信頼まで失う……………それは商業コミュニティとして絶対してはいけない禁忌なのだ。

それをあのリーダーがそう簡単に反省して受け入れるはずがない。必ず妨害や奪回

による侵入、最悪は子供達を誘拐する可能性もある。あの交渉で見極めた結果、あいつは己の私腹を肥やすなら平気で言うことだろう。

「そういうことだ。既に十六夜が行動しているがまだ安心していい段階ではない。俺達は十六夜の準備が完了するまで自分達が出来る範囲で“ペルセウス”の妨害を耐えなければならぬんだ」

「……………そういえばいつの間にか十六夜君がいないわね。また面白い事を企んでいるのかしら?」

黒ウサギとレティシアも今気付いたのか周囲を見回す。飛鳥の言う通り、この場には十六夜はいない。この事態を事前に察知していた俺と十六夜は支店から出て行った時にアイコンタクトで役割を分担したのだ。アイコンタクトの結果、俺はコミユニティの護衛、十六夜はこの事態を打破する方法を探るという事に決定したのだ。

「面白いかどうかは分からんが十六夜は守るより攻める方が得意そうだしな。その方が効率が良いと思っただ」

「なるほどね。大体理解したわ……………だけどねえ龍騎君」

少し拗ねたような表情を浮かべ、俺の耳を引っ張る。飛鳥が不機嫌そうな声音で呟いた。

「こういう面白い事を企むなら……………次からは一声かける事。私達は仲間で……………その友達なんだから」

少し恥ずかしそうに頬を赤く染めながら俯く飛鳥。……………そういえばこういうトラブル事には俺と十六夜だけで解決していて飛鳥と耀には直接関わっていないなかったな。いくら二人が日常では経験しない事に慣れていないからって、相談も無しはやり過ぎだったな。仲間に頼らないで一人で解決するということとは後でどうしようにもならない事を引き起こすとこの身で経験して分かっていたはずなんだが……………俺もまだまだ甘いつてことか。内心、苦笑しながら俺は俯いている飛鳥の肩に手を乗せ謝罪する。

「悪い飛鳥。俺の勝手な行動で不機嫌にさせて……………今度からは一声かけるようにする

よ」

「わ、分かればいいのよ……………」

更に顔を赤く染めて俯く飛鳥。おそろくこういうことに慣れていなくて恥ずかしいんだらう。そう解釈するとレティシアがわざとらしく咳き込み、それを聞いた飛鳥は素早く後ろへと下がった。

「それで十六夜が何をやる気なんだ？まさか『ペルセウス』の殴り込みか？」

今の一連を何もなかったようにレティシアが十六夜の企みは何かと問いだしてきた。流星にここで誤魔化しても意味がないし、たつた今相談するって決めたばかりなので俺は応えることにした。

「まあ、当たらず遠からずってことかな？俺と十六夜が考えた作戦は——」

俺は対策の詳細を説明していく。最初は三人共、驚愕していたが話を続けていくうち

に得心がいったのか喜々とした表情を浮かべる。

「……………なるほど。確かにそれは良い手だ」

「それが成功することが出来たなら今後 “ペルセウス” の妨害に恐る必要がないですね
！」

「だとしたら私達がする事は」

「ああ。十六夜が帰ってくると思われる期間は五日間。その間は俺、耀が周囲の警戒。黒ウサギと飛鳥は子供達の護衛。レティシアは悪いが俺か黒ウサギの傍にいてくれ」

俺の指示に三人は頷く。まだ飛鳥と黒ウサギは二日間、レティシアなんて先程会ったばかりの俺を信用してくれることに嬉しく思う。心の中に込み上げるものを抑えながら俺は皆を扇動する。

「非常時は俺か黒ウサギが駆けつける！この程度で躓いていたら “打倒魔王” など不可

能だ！コミュニティ復興の為に絶対成功させるぞ！！」

「了解した」

「はい！」

「ええ！」

三人の返事に俺は強く頷き、俺と部屋が用意されていないレティシアは見張りに他の二人は睡眠を取るため各自に自分の部屋に戻っていた。

☆

夜が明け、ジンや耀、子供達が起床していく時間からしばし過ぎた時間になると俺とレティシアは談話室に戻ることにした。レティシアは扉の前に残り、俺だけ談話室に入ると既に十六夜を除く「ノーネーム」に所属する全員が集まっていたのだ。……うん、改めて見ると圧巻するほどの人数だよな。ちなみに何故此処に皆が集まっているかというと飛鳥と黒ウサギと別れる前にサプライズを仕掛けたいと考え頼んでいたことで、その時の二人もノリノリだったのでちゃんとこなしてくれたみたいだ。部屋に入っ

た時、子供達の元気の良い挨拶が談話室に響き渡り、少し頬を緩めながら挨拶を返す。その時に三つほどの冷たい視線を感じたが気のせいだよな、うん。

それより俺は何も知らない皆がこちらに集中してる間にレティシアに入ってくるように促すことにした。レティシアが入ってきてきて皆がその姿を見た時、昨日のメンバーと耀以外の全員は一瞬驚愕した表情を浮かべ、瞬間歓声を上げてレティシアに群がっていった。俺はその波に巻き込まれないように飛鳥と黒ウサギの下に向かうとしようとするがその前にジンと耀に止められてしまった。ジンは興奮したように耀は何故か冷たい視線と共に——って、耀！お前まだ俺をロリコンと思ってるだろう！?だからあれは誤解だって何回言ったら分かるんだよ!……ごほん。と、ともかく二人には昨日の出来事を説明するとジンは啞然として固まりだし、耀が不機嫌そうな表情で俺を睨みつけてきた。

どうやら昨日の飛鳥と一緒に耀も仲間外れにされたことに不満を感じているらしい。とりあえず耀に謝罪し、昨日のギフトゲームの件をこれで帳消しにすると言ったら何故か思いつきり弁慶の泣き所を蹴られた。……俺が何をしたというんだ!?!激痛に耐えながら耀が更に不機嫌になった理由を飛鳥と黒ウサギに聞いてみると呆れたように溜

息を吐かただけで自分で考えるべきと言われて教えてくれなかった。……一応、俺はレティシアを取り返してあげたんだよ？なのにこの扱いは酷くねえ？

現実の理不尽さに内心嘆いていると、黒ウサギが子供達を落ち着かせ自分の持ち場に戻るように指示していた。元気良く返事をしてレティシアに手を振りながら談話室から退出していった子供達を見送った俺は気を取り直して耀とジンに作戦内容を伝えることにした。二人は作戦に特に異論はなく了承してくれたので、そのまま取り掛かることにした。基本的には俺、耀、黒ウサギは別々に子供達の傍にいて、飛鳥とジンは黒ウサギと耀のサポートとして周囲を警戒していく。そしてレティシアは経験が豊富な俺が箱庭に詳しい黒ウサギと一緒に行動することになっている……はずなんだったが、何故かレティシアは俺と一緒に行動する事が大半で黒ウサギとは少ししか行動していないのだ。

俺は黒ウサギと行動した方が気楽でいいんじゃないかと、聞いたのだがこの中で一番実力が高そうな俺という方が安全そうだからそうだ。まあ、それはレティシアの判断なのだから別に文句を言う筋合いはないから特に気にしないようにすることにした。それよりか黒ウサギ、飛鳥、耀……俺、そんなに信用できないか？確か別々に別れる

手筈のはずだったんだが何故交代で俺の傍にいる？

あれか？まだロリコン容疑が解けていないのか？……………俺ってそんなに犯罪臭でもするのかな？ははは……………もうどうにでもなれ……………。三人の俺に対する評価に肩を落としながら警戒を続けるのであった。

そんなこんなで護衛から三日経ったある日。十六夜が本拠に帰ってきたのだ。

「おっ、思ったより早かったな十六夜」

「まあな。出来るだけ早く終われるように行動したら予定より早めに帰って来れたんだよ」

主力メンバーが揃った談話室で俺と十六夜は悪戯っぽく笑みを交わしながら十六夜が脇に抱えていた大風呂敷をテーブルに置き、結び目を解き戦利品を見せつけてきた。その戦利品は俺が求めていた物であったので思わずニヤニヤと笑みを浮かべてしまった。これさえあれば「ペルセウス」からの妨害を気にせず済むことができる。俺は必ず作戦を成功させると改めて決心する。心の中で強くそう思っていると十六夜が何

気ない疑問を問いかけきた。

「それで俺がいない間に受けた『ペルセウス』による妨害の被害はどうなんだ？」

その疑問に俺達は一斉に十六夜から視線を逸らす。当然、十六夜はその行動に不審に思ったのか眉を顰める。

「ああ？どうしたんだお前ら？何で気まずそうに俺から視線を逸らす？」

「ええと……………非常に言いにくい事なんです」

黒ウサギがどう説明したらいいのか悩みなながら十六夜に報告しようとする。……………
まあ、仕方ないよな。これは俺も予想外だったしな。

「何だ？そんなにでっかい被害があったのか？」

「いえ……………その……………被害は一切なかったんですよ」

「つまり、この三日間普通に平和に暮らしていたの私達」

あつ、十六夜の顔が無表情になった。だが、流石に信じられないのか再度問いかけてきた。

「……………それってマジで言ってるのか？」

「残念ながら」

俺がそう応えると十六夜が呆れたように肩を落とす。その気持ち凄く分かる。モチベーションを下がらないように黙っていたんだが、この三日間は刺客らしき人物どころか本拠に侵入した形跡すらないのだ。最初は俺達も屈辱を受けてで怒りに荒れているんじゃないかと、笑っていたんだが、いくら時間が経っても来る気配がないので最終的なんてわざと警戒を止めて自由行動してたくらいだ。あらゆる侵入方法を考えて警備体制を敷いたのだが結局全て無駄に終わってしまったのだ。

それを十六夜に説明すると呆れ果てた表情に変わり、俺達同様やる気をゴツソリと削り取られたようだ。肩透かしを喰らい微妙な雰囲気にも包まれる。

「と、とりあえず “ペルセウス” 本拠に向かいませんか？」

ジンの提案に俺達は頷き、“ペルセウス” の本拠に向かうために重い腰を上げるのだった。

………はあ、やる気がでねえ。

☆

——二六七四五外門・“ペルセウス” 本拠。

俺達は“ペルセウス”の本拠に着き、白亜の宮殿の門を叩いた。出迎えたのは下つ端のようでこの前の件でやって来たと言ったら睨まれながらも謁見の間まで案内されたのだった。謁見の間の扉を開けそこで待っていたのは不機嫌を隠そうとしようとした

「ルイオスと仇を見る瞳……それでいてどこか疲れていそうな表情を浮かべる側近達に迎えられたのであった。……おそらくルイオスの八つ当たりの対象となったんだろう。まあ、同情する気は一切ないがな。」

「………何の用だい？こちらは『名無し』に構っている暇なんてないんだけど？」

ルイオスのいきなりの暴言に俺と十六夜、レティシア以外の四人が激昂しそうになるが俺が右手で制すると冷静になったのか落ち着いたようだ。四人が冷静になったのを確認すると俺が代表として口を開く。

「お前達から要求した金貨が届けられる様子がないからわざわざこちらから取りに来たんだよ」

「………ふん。あの多額な金額を簡単に用意出来るはずないだろ」

「それでも詫びの一つでも言いに来るのが筋じゃないのか？ええ、『ペルセウス』のリーダーさんよ？」

「貴様っ！こちらが下手に出れば調子に乗りおつて！」

ルイオスの側近の一人が怒号を上げる。だが、ルイオスがそれを制し止めさせる。

「……………あのさ、お前達さあ？もしかして僕が誰だと分かっているか？とつているのか？僕がその気になればお前ら“名無し”を潰すなんて赤子の手を捻るぐらい簡単なことだけどそれを分かってんの？」

華美な外套を翻して獐猛な笑みを浮かべるルイオス。どうやら本性をさらけ出したようだな。

まだちゃんと契約を果たす気があるのならば見逃してやろうかと思つたがそれは必要がないようだな。俺は後ろで大風呂敷を持つている黒ウサギを呼びかける。

「黒ウサギ。例の物を」

「はい、分かりました」

俺の言葉に黒ウサギは手に持っていた大風呂敷をレイオスの眼前に広げる。風呂敷の中には「ゴーゴンの首」の印がある紅と蒼の二つの宝玉が入っていた。傍で控えていた「ペルセウス」の側近達はそれを見て驚愕に満ちた表情で叫び声を上げる。

「ハ、これは!？」

「「ペルセウス」への挑戦権を示すギフト……!?まさか名無し風情が、クラーク海魔とグライアイを打倒したというのか!？」

困惑する「ペルセウス」一同。これが俺達「ノーネーム」が考えた作戦——それ
はギフトゲームを挑むという事だ。ギフトゲームに勝利し、旗と名を奪えば「ペルセウス」は俺達と同じ「ノーネーム」として活動していくことになる。それを材料として妨害禁止を突きつけたらおとなしく言う事を聞くしかないだろう。例えば旗と名を奪わない選択にしても「ノーネーム」に敗北したコミュニティなど「サウザンドアイズ」が見逃すはずがない。必ず傘下から追放され今までのように自由に行動することはできない。それを見越して俺と十六夜は瞬時に考えついたのだ。

「ああ、あの太タコとババアか。そこそこ面白くはあつたけど、あれじゃヘビの方がマシだ」

そう言つて首を竦める十六夜。ちなみにギフトゲームに挑む方法と宝玉を手に入れる方法は十六夜が白夜叉に聞いたのだ。話によるとこの宝玉はペルセウスの伝説に出てくる怪物達をギフトゲームで打倒することにより得られるギフトで、このゲームは力のない最下層のコミュニティにのみ常時開放されている試練で、元々は下層のコミュニティの向上心を育てる為のものらしいのだがルイオスにそんな志などなく廃止しようとしていたらしい。それを行う前にこの事態が起こつてしまったことによりルイオスの不快感が絶頂に達したのか憤りだしながら俺達を睨みつけてくる。

「ハッ………いいさ、相手してやるよ。元々このゲームは思いあがつたコミュニティに身の程を知らせてやる為のもの。二度と逆らう気が無くなるぐらい徹底的に………徹底的に潰してやる」

だが、黒ウサギはそれを睨み返し宣戦布告する。

「我々のコミュニケーションを踏みにじった数々の無礼。最早言葉は不要でしょう。〃ノー
ネーム」と〃ペルセウス〃。ギフトゲームにて決着をつけさせていただきます」

このギフトゲーム、仲間の為に必ず勝ってみせる——例えあの力を使うことになつたとしても。

第十五章

『ギフトゲーム名 “FAIRY TALE in PERSEUS”

・プレイヤー一覧 神崎 龍騎

逆廻 十六夜

久遠 飛鳥

春日部 耀

・ “ノーネーム” ゲームマスター ジンIIラッセル

・ “ペルセウス” ゲームマスター ルイオスIIペルセウス

・ クリア条件 ホスト側のゲームマスターを打倒

・ 敗北条件 プレイヤー側のゲームマスターによる降伏。

プレイヤー側のゲームマスターの失格。

プレイヤー側が上記の勝利条件を満たせなくなった場合。

・舞台詳細・ルール

*ホスト側のゲームマスターは本拠・白亜の宮殿の最奥から出てはならない。

*ホスト側の参加者は最奥に入ってはいけない。

*プレイヤー達はホスト側の（ゲームマスターを除く）人間に姿を見られてはいけない。

*姿を見られたプレイヤー達は失格となり、ゲームマスターへの挑戦資格を失う。

*失格となったプレイヤーは挑戦資格を失うだけでゲームを続行する事ができる。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗の下、“ノーネーム”はギフトゲームに参加します。

“ペルセウ

ス”印』

“契約書類”に承諾した直後、俺達六人は光に呑み込まれ視界が回復し次に瞳の中に移されたのは未知の空域に浮かぶ宮殿であった。此処は白夜叉が出したゲーム盤と同じ原理で出来てある場所だと考察しながらも今回のゲームについて皆と談論する。ちなみにレティシアは本拠の護衛を頼んだので此処にはいない。

「姿を見られれば失格、か。つまりペルセウスを暗殺しろってことか？」

白亜の宮殿を見上げ、胸を躍らせるように呟く十六夜。その呟きにジンが応えた。

「それならルイオスも伝説に倣って睡眠中だという事になりますよ。流石にそこまで甘くは無いです」

「YES。そのルイオスは最奥で待ち構えているはずデス。それにまずは宮殿の攻略が先でございます。伝説のペルセウスと違い、黒ウサギ達はハデスのギフトを持っておりません。不可視のギフトを持たない黒ウサギ達には綿密な作戦が必要です」

黒ウサギが人差し指を立ててそう説明する。確かに俺も書庫でペルセウスについて調べた結果、今回のギフトゲームは、ギリシャ神話に出てくるペルセウスの伝説の一部を倣ったものだと思う。俺達は暗殺者として「主催者」側に気付かれずに宮殿の最奥までたどり着かなければならない。もし、見つかりでもしたらそこで失格となりルイオスを打倒する挑戦権を失うことになる。……このギフトゲーム、経験が少ない皆

にとつて少し厳しいな。

「見つかった者はゲームマスターへの挑戦資格を失つてしまふ。同じく私達のゲームマスター——ジン君が最奥にたどり着けずに失格の場合、プレイヤー側の敗北。なら大きく分けて三つの役割分担が必要になるわ」

飛鳥の隣で耀が頷いている。本来はこのギフトゲームは百人、少なくとも十人単位でゲームに挑み、その一握りだけがゲームマスターに辿り着けるといふものらしい。そんなゲームを俺達は五人で挑まなければならないのだ。役割分担は必須だ。

「うん。まず、ジン君と一緒にゲームマスターを倒す役割。次に索敵、見えない敵を感知して撃退する役割。最期に、失格覚悟で囷と露払いをする役割」

「春日部は鼻が利く。耳も眼もいい。不可視の敵は任せるぜ」

十六夜の提案に黒ウサギが続く。

「黒ウサギは審判としてしかゲームに参加することができません。ですからゲームマスターを倒す役割は、十六夜さんをお願いします」

「あら、じゃあ私は囷と露払い役なのかしら？」

少し不満そう声を漏らす飛鳥。だが、名前負けのルイオスであるが腐つても「ペルセウス」のリーダーであるのは変わりない。人間の域から超えていない飛鳥ではルイオスに効く可能性が低いのだ。それに今回、飛鳥は水樹を持参してきている。それを最大限に發揮するならば不特定多数を相手にする方がいい。それは飛鳥自身も分かっているはずなんだが不満なのは不満らしい。俺は少し拗ねている飛鳥を説得することにした。

「まあまあ。前回のギフトゲームでは飛鳥が大活躍だったじゃないか。今回は前回、参加していなかった十六夜に花を持たせてもいいと思うけど？」

「……………分かったわ。今回は譲ってあげる。ただし負けたら承知しないから」

飛鳥の言葉に飄々と肩を竦める十六夜。これで丸く収まったと内心安堵する俺だが、黒ウサギがやや神秘的な表情を浮かべながら不安を口にする。

「残念ですが、必ず勝てるとは限りません。油断しているうちに倒せねば、非常に厳しい戦いになると思います」

俺達の視線が一斉に黒ウサギに集中する。その言葉を聞いた飛鳥がやや緊張した面持ちで黒ウサギに問いだす。

「……………あの無能、それほどまで強いのか？」

「いえ、ルイオスさんご自身の力はさほど。問題は彼が所持しているギフトなのです。もし黒ウサギの推測が外れていなければ、彼のギフトは——」

「隷属させた元・魔王様」

「そう、元・魔王の……………え？」

俺と十六夜の補足に黒ウサギが一瞬、言葉を失った。だが、俺と十六夜は素知らぬ顔で俺から補足を続ける。

「もしペルセウスの神話通りなら、ゴーゴンの生首がこの世界にあるはずがないから、ペルセウス”に石化のギフトを持つているのはおかしいんだ。ゴーゴンの生首は戦神に献上されているからな。………なのに奴らは強力な石化のギフトを使用している」

「だとすると、奴ら”ペルセウス”は星座として招かれたと推測できる。ならさしずめ、奴の首にぶら下がっているのは、アルゴルの悪魔ってところか？」

「……………アルゴルの悪魔？」

俺達の話が分からないのか飛鳥達は顔を見合わせながら小首を傾げる。しかし黒ウサギだけは驚愕したまま固まっていた。そして黒ウサギは信じられないものを見る目で首を振りながら俺達に問いかけてくる。

「龍騎さん、十六夜さん……まさか、箱庭の星々の秘密に……？」

「まあな。この前、星を見上げた時に推測して、ルイオスを見た時にほぼ確信した。後は手が空いた時にアルゴルの星を観測して、答えを固めたつとところだ。まあ、機材は白夜叉が貸してくれたし、難なく調べる事が出来たぜ。龍騎はどうなんだ？」

「俺もほぼ同じ。違いは確信を得た時に書庫で答え合わせしていたつとところかな。てか、お前すげえな。俺はこういうの疎いから書庫で調べてでた答えだったんだが……十六夜つて意外と頭脳派なんだな？」

「何を今更。俺は生粋の知能派だぞ。あんなの俺にとつちや朝飯前だつての」

自慢げに笑う十六夜。その余裕そうな俺達に皆も緊張していた表情が和らいできた。……うん、これなら心配する必要はなさそうだ。

「では、ゲーム開始はこの門を開けてから始まります。ご健闘をお祈りします」

黒ウサギに声援を受けながら俺達は白亜の宮殿の門を開けに行くので………ん？そ
ういえば、

「ちよつと待て。俺はどの役割につけばいいんだ？」

俺の疑問を口にする、皆が今思い出したのか少し気まずそうに表情を歪める。
………まさか忘れられていた？な、ないよね？流星にコミュニテイに貢献してきた俺を
皆が忘れるはずが、

「……………龍騎君はどの役割がいいのかしら？」

飛鳥の質問に目の汗で視界がぼやけてきそうだ。………俺ってそんなに存在感薄い
かな？露骨に肩を落として落ち込むと十六夜以外の全員が慌てて弁解を口にしていく。

「べ、別に龍騎君を忘れていた訳ではないわ！丁度、役割に適している人材がいただけで
龍騎君を蔑ろにしていることなんて!!」

飛鳥。それって暗に俺は必要ないと言っていないか？

「そ、そうだよ！それに龍騎は交渉で頑張ってくれたんだから今回は隅でゆっくり休んでもいいと思うよ？」

耀。それは遠まわしに俺が邪魔だから端にいろと？

「り、龍騎さんは守る戦いに慣れていてるそうですし、性格上このような潜入には向いていないかと」

ジン。何気にお前が一番酷いな。俺はそんなに落ち着きがない人間に見えるのか？

飛鳥達の弁解という名の追い打ちに心が折れそうだ。陰気な雰囲気は漂いだし、更に落ち込む俺に最後の砦として黒ウサギが弁解を口にする。

「そ、それに龍騎さんの左手は石化したままです！その状態では」

「うん?.....ああ、それってこれのこと?」

そう言いながら俺は左手に力を入れ、石化を砕く。粉々になつて地面に落ちていく石だったものを見て驚愕して呆然とする黒ウサギ達。十六夜だけは興味深そうに観察するように見つめているが。皆が言葉を失っているが俺は特に気にせず左手を広げたり閉じたりする。うん、暫く動かしていなかったが感覚は大丈夫みたいだな。そうやって左手の状態を確認していると黒ウサギが慌てて問いだしてきた。

「い、いつの間にゴーゴンの石化を解いていたのですか!?それは一応強力なギフトなんですよ!」

「何時って今見せたばっかじゃん」

「そ、それはそうですが.....もしかして石化はいつでも解かすことは出来たのですか?」

「当然だろう?そうじゃなかったら、こんな馬鹿な事はしないって。今までルイオスを

脅すために放置してただけでその気になれば喰らった段階でも壊すことは出来たよ。俺ってこういう呪い系は効きにくいしな」

まあ、それでも左手を動かさないのはかなり辛かったな。苦笑しながら内心愚痴っていると途端に俺の背筋が凍りだした。な、なんだこの寒気は？ 思わず飛鳥、耀、黒ウサギがいる方向に視線を移す。そこには無表情なのに般若のような表情を浮かべる阿修羅像を背負っている三人がいた。

「あ、あれ？三人共、どうしたんだ？」

あまりのプレッシャーに俺は怖気づきながら三人に喋りかけるが三人は無言のまま俺に近づいてくる。え？えっ!?俺なんかした!?てか、いつの間にか十六夜とジンが安全なところまで移動しているんですけど!?俺は十六夜に助けを求めているように視線を向ける。すると、十六夜に届いたのか溜息をつきながらアイコンタクトを送ってきた。えっと、なにになに？『骨は拾ってやるから安心して逝け』って、裏切り者オオオオオオオオオオオオオオオオオッ!?

「龍騎さん……………」

「龍騎君……………」

「龍騎……………」

「は、はいっ！」

少し目線を逸してただけで俺の目の前まで近寄ってきていた三人。黒ウサギは黒い髪が淡い緋色に染まつており、飛鳥は何故かギフトカードを手に何かを発現させようと、耀の周辺では風が吹き荒れている。

……………何でだろう。今、おれの脳内に『BAD END』という単語が浮かび上がったんだが……………。そして、耀と黒ウサギが俺の懐まで近づき戦闘態勢に入る。俺は必死に弁明しようとするが聞く耳を持たない二人には無駄となり、耀と黒ウサギの重い一撃が解き放たれる。

「『そういう話は……………っ！』」

黒ウサギの蹴りと耀の強烈な風のギフトが俺の腹に打ち込まれ、門の方向へと飛ばされていく。一瞬、意識が途切れかけるが齒を食いしぼり何とか耐え抜く。だが、飛ばされる途中、飛鳥が水樹を発現させている光景を目にした。……俺、死ぬんじやね？ 出来れば手加減してほしいなあ、と軽く現実逃避をするが俺の願いは叶うことなく、

「早く言いなさい、この馬鹿アツ!!」

飛鳥の怒号と共に水樹から水の激流を放出し、俺は飲み込まれていくと同時に門を突き破って「ペルセウス」の本拠へと侵入する事だったのである。

☆

「し、死ぬかと思った……。あいつらもうちよつと加減しろよ」

びしょ濡れになった服を御札の力を使って乾かしていく間、先程の手加減無用の一撃に愚痴る。あの後、俺は奇跡的に腹が少し痛い程度で白亜の宮殿の奥まで流されてきたのである。流されている間に悲鳴や助けを求める声が聞こえてきたのだが、おそらく中

で待機していた敵が俺と一緒に巻き込まれたのであろう。まあ、多少同情するが、敵だしあまり気にしないことにしておこう。

それよりかこれからどうしたものか……。確かに奥の方にへと流されてきたのであるが今の俺は現在位置が分かっていない状態なのだ。この状況で取れる手は二つ。一つはこのまま一人でルイオスがいる宮殿の奥に行くこと。これは気配が読めるので敵に見つかることなく、その上ルイオスに勝てる自信もあるのでそこそ良い手段なのだ。それはあまりにも面白くない。それに俺は十六夜の実力を良く知らない。今回は実力を測らせてもらうため、十六夜にルイオスを当たらせたいのだ。ルイオス自身は期待出来ないがゴーゴンには期待出来そうだしな。

なら、もう一つの手段……。皆と合流する事にしますか。方針を決めた俺は服が乾いたのを確認し、十六夜達の気配を探るために集中して気配頼りに歩んでいく。

暫く歩いていくと耀の姿を目視することが出来た。ジンと十六夜の姿は見えないが、ジンは適当なところに隠れており、十六夜の気配が耀の傍から感じる。ことから多分ペルセウスの伝説に出てくる防具の一つ『ハデスの隠れ兜』のレプリカを奪取したのである。

う。

とりあえず俺は三人と行動を共にするため声をかけようとする。だが、見えないが妙な気配が耀に向かつて駆け寄っている。おそらく本物の『ハデスの隠れ兜』を装着している敵だろう。このままだと耀が吹き飛ばされ壁に叩きつけられるのが容易に予想が出来るので、俺は右腕に淡い紅蓮色の霊力を纏わせながら地面を蹴り込む。そして、妙な気配の眼前まで瞬時に移動し、右腕で力一杯殴りつける。鎧を砕く手応えを感じながら腕を振り切ると壁が何かを叩きつけられた跡が出来上り、その衝撃で兜が外れたのか騎士の姿が現れた。一連の流れに騎士の存在を感知出来なかった耀が驚愕とした表情を浮かべる。姿は見えないが十六夜も同じ表情をしているだろう。

俺は騎士の傍まで近寄り、落ちている兜を回収する。騎士の顔を一瞥するとその騎士はルイオスの傍にいた側近の男だった。側近は苦痛の声を漏らしながら俺に疑問を問いかけてくる。

「な、何故バレた………?」

「例え姿や物音を完全に消したとしても気配はだだ漏れなんだよ。それよりか手加減したとはいえ、よく耐えたな。自慢の鎧もボロボロになっているのに」

俺が言った通り、騎士の鎧は大破しており原型を留めていないのだ。俺が称賛を口にするると騎士は頬を緩め、

「……………ふん。ならば、我等の鎧が優れていたのだろう」

遠まわしの称賛が送られたのであった。騎士は更に口を開き、

「だが、ギフトを真正面から打ち破り、鎧も砕く一撃——見事だ。お前達には、ルイオス様に挑むだけの資格がある」

そう言い終わると騎士はガクツと気絶したのだった。俺はそれに気に留めることもなく兜を手に呆然としている耀の下に駆け寄る。耀の傍には十六夜が立っており、面白そうに口を歪めていた。兜を持っていないことから既にジンに渡したんだろう。そう推察しながら目の前まで移動した俺は兜を十六夜に手渡すと耀が話しかけてきた。

「……………凄いな。私、全然気が付かなかった」

「右に同じだ。つたく、お前いつから此処に来たんだ？」

「本当について先程だ。何処かの誰かさんらのおかげでこんな奥まで来ることになったがな」

そう言いながら耀を軽く睨むと耀は無関心を装いながら視線を逸らす。耀の態度に溜息がつきたくなるが今はそれどころではないので堪えることにする。

「まあ、詳しい事は後にして……………これを持って兜の効果で隠れているジンと一緒にルイオスの下に向かえ」

「お前はどうすんだ？」

「俺は此処に残って雑魚退治。一応、保険として隠れながらだけだな」

無いと思うが万が一、十六夜がクリア不可能となったらこっちに勝ち目がなくなるかな。それだけは避けたい。

「……………分かった。じゃあ、俺は先行つとくわ。御チビ、ついてこい！」

俺の言葉に少し不機嫌になりながらも十六夜は先を急ぐため宮殿の奥へと進んでいったのであった。ジンの気配も十六夜の後を追いかけていたので此処には俺と耀だけとなった。

「……………それで？何で俺をぶっ飛ばしたんだ、耀？」

十六夜達がこの場を去ったのを確認すると俺は再度、耀に先程の出来事について追求する。だが、耀は未だに俺から視線を逸らしたまま無関心を装う。

「……………教えるつもりはない」

「どうやら本当に言うつもりはないらしい。なら、こちらも切り札を使って聞き出すことにしよう。」

「ガルドの件」

「それを使うのは狡いと思う」

何とでも言うがいい。俺としては今一番気になる事なんだ。それを聞き出すためなら何でもするさ。しばし沈黙が続く中、俺の執念に観念したのか耀は何故か少し頬を赤く染めながら口にするのだった。

「……………心配だったから」

「へ？」

「龍騎の左手、石化が悪化して進行する恐れがあるからって黒ウサギが言ってた」

「……………もしかして護衛中にお前らが傍にいたのもそのせい？」

俺の問いに耀は僅かに首を縦に振った。……………ああ、確かに知らない人からしたら心配だよな。それでいて知らん顔されて無事ですよと言われたらそれは憤るよな……………あれ？普通に俺が悪くね？今更湧いてくる罪悪感に俺は苦笑いを浮かべるしか出来なかった。再度沈黙が包み込み、その雰囲気には耐えられなかった俺は少し拗ねている耀の頭に手を乗せ撫で始める。

「すまん、いらん心配掛けさせた。今度、何か埋め合わせするからさ」

「……………分かれればいい。でも、次はちゃんと伝えといてほしい」

先程より耀の頬が赤く染まっていくのが分かる。……………後で飛鳥と黒ウサギにも謝らなくてはな。自分の役割があるのに俺を心配して俺の傍に来てくれたわけだしな。だとすると、もしかしてレティシアもそうなのだろうか？そうなると四人に何か埋め合わせしなくちゃな。内心、心配掛けたことに反省しながら埋め合わせの事を考えると近くで気配を感じた。

「……………どうやらお出ましつてとこだな」

「人数は多くない。二人だけでも十分だと思う」

耀の頭を撫でていた手を下ろし、その時、耀が少し残念そうにしていたのは何故だろうと思いつながら周囲を警戒する。……………数は少ないし、これなら耀だけでもいけるかな？

「さて、俺は保険の為に隠れながら援護させてもらうけどそれでいいよな？」

「大丈夫。多分、私だけでも倒せる」

それは心強いことで。そう思いつながら俺達二人でこちらにやって来る敵を撃退するため待ち構えるのであった。

第十六章

「これで最後だったみたいだな」

「おつかれ、龍騎」

十六夜達と別行動を取った後、すぐに敵の団体がこちらにやってきたので耀が前衛、俺が隠れながら援護することで死体の山を築き上げたのであった。……殺してはいないけどね？流石に耀の前でそれをやる訳にはいかないし。

「それにしてもあれだけ敵が来たのに不可視の兜はたった一つだけしか手に入れなかったな。やっぱり、安易に奪われないようにするための処置か？」

まあ、当然ちや当然だけどな。レプリカとはいえ今回のギフトゲームでは絶大な効果を発揮する物を俺達のように奪われては自分の首を締める行為に繋がる。それも知ら

ずにレプリカを量産してゲームを開始するというそんな馬鹿なことを名前負けだとは
いえするはずがないだろう。思考に耽けながら兜を器用に回して思ったことを口にす
ると何故か耀がクスツと笑った。

「それ十六夜も言っていた。龍騎と十六夜って意外と似たもの同士かも」

「えっ？それマジで言ってる？」

「……………そんな露骨に嫌そうな顔をしなくても」

確かに自分の顔が酷く歪んでいる事は自覚している。いや、だってね？あれほどの問
題児と同じ扱いされたら誰でも嫌そうな顔一つぐらい浮かべてもおかしくないと思う
けど？俺としてはその事実を認めたくないんで耀に俺と十六夜の何処が似ているかを
聞き出すことにした。

「じゃあさ、耀は俺と十六夜の共通点は何だと思ってるんだ？もし、違ったら速攻で拒
否らせてもらうからな」

「頭がキレるところ、面白い事には目にならないところ……他にも強引ところや私達の知らないところで勝手に解決したりとか」

「……………」

あまりにも即答で多く共通点らしきものを言われた俺は思わず口が引き攣る。ひ、否定出来るところが……だと……つ！た、確かに思い返せば十六夜と似ているところがあるような気が……いや、きつと気のせいだ。あいつと同じ扱いなんか認めたくねえし、少なくとも俺はコミュニケーションを第一に考えて行動してきたんだ。……ちよつと面白そうとかルイオスの悔し顔を見たかったとかそんな疚しいことなんて考えてないよ？

「無言は肯定と同じ」

「グッ……………!?!」

何時ぞやにジンに言った事を今度は耀に言われ俺は押し黙ってしまう。その様子を
見た耀が勝ち誇った表情を浮かべ、少しイラつとしたので何とか反論しようと考えてるが
—— また背筋が凍る感覚に襲われる。しかも先程とは比べにもならない程の悪寒で
あり、俺はその感覚を信じてすぐさま庇う様に耀を抱き寄せる。だがこれだけでは耀を
救うことが出来ないと思い、急なことに驚いて呆然とする耀が目の前にいるのにも関わ
らず俺は隠していた力の一部を使用することにした。

力を放出した瞬間、見覚えのある褐色の光が俺の視界を遮り、俺と耀は光に包まれて
いく。暫くすると次第に光が収まっていき、視界が回復して周囲を見渡し再発がないか
を確認してから力の放出を止めて俺の腕の中にいる耀を解放する。安否を確かめるた
め解放した耀の顔を覗き込んでみると、トマトのように真っ赤になっていた。暫くの間
惚けていた耀は我を取り戻したのか慌てて俺から距離を取り、未だに頬を染めて俺を警
戒しながら睨みつけてくる。耀の様子を見るから一言も言わずに抱き寄せたことに
憤っているんだろう。その証拠として耀が俺を睨みつけながら低い声音で問いかけて
くる。

「……………今の何？ 答えて」

「……………周りを見てみたら分かるぜ」

怒っているであろう耀に俺は周囲の現状を見るように促す。その言葉に耀は周囲を見渡すと真つ赤になっていた顔がみるみると青ざめていく。神秘が漂う造りをしていた宮殿が灰色一色となり、近くで死体の山となっていた「ペルセウス」の騎士達も石像のようになっていた。この異様な光景に俺は舌打ちを打ちながら今起こっている現状の原因を口にしていく。

「どうやら隷属した元・魔王……………ゴーゴンを呼び出したようだな。さつきから禍々しい気配が宮殿の奥から感じ取るぜ」

……………それにしても仲間ごと石化にするか。おそらくルイオスは自分さえ入れれば敗けないと考えてこの惨状を起こしたのであろう。そう考えついた俺は自然と手に力が入る。

気に食わない……………ルイオスがやらかしたこの手段が気に食わないのだ。例えどんな存在だろうと一人では限界がある。それを痛いほど身に染みている俺としては仲間

がいるありがたさを知らないレイオスを考えただけでも原型が無くなるまで殴り倒したくなるのだ。……………だが、ここで怒りに身を任せても意味がないので俺は頭を冷やして冷静になろうとする。幾分か落ち着いた俺はこの光景に顔を蒼白している耀に話しかける。

「大丈夫か耀？」

「……………うん、大丈夫。心配かけてゴメン」

まだ少し顔色が悪いが、さつきよりかは落ち着いたようだ。とりあえずは一安心だな。

「気にすんな……………落ち着いたばつかのところで悪いが飛鳥がいる場所まで行って待機しててくれないか？多分、飛鳥も今の光で石化した可能性が高いからな」

「……………別にいいけど龍騎は？」

「俺は十六夜達の下に向かう……………必要ないと思うけどな」

『あいつなら俺が辿り着いた時には全て終わらせていそうだしな』と言い、少し苦笑しながら耀を庇う時に邪魔で投げ捨てた兜を拾い上げる。

「分かった……………でも、無茶はしないで」

「りよくかい。じゃあ、飛鳥のこと頼むな！」

兜を被り耀の視界から俺の姿が消え失せる。そして、俺は再度気配頼りに十六夜達の下へと目指すのであった。

☆

「……………どうやらこの先みたいだな」

十六夜達の気配を追って真っ直ぐ突き進んで走り続けると、最上階へと続く道を見つ

けたのだった。移動中、何度も地響きがしていたがおそらく十六夜とゴーゴンとの戦闘で鳴り響いたものだろう。

俺は急いで最奥へと走り出すと、そこには薄気味悪いが荒れまくった闘技場のような場所に軽薄な笑みを浮かべる十六夜と驚愕し過ぎて唾然としている黒ウサギにジン、そして、戦意が枯れ果てたルイオスが地面に膝をつけて立ち尽くしていた。ルイオスの後ろにいる灰色の翼に体中に拘束具と捕縛用のようなベルトを巻いており、乱れた灰色の髪を逆立たせている怪物は元・魔王のゴーゴンだろう。……どうやら俺の出番はなかったようだ。俺は被っていた兜を脱ぎ、十六夜に話しかけることにした。

「よう！終わったみたいだな十六夜。少しぐらい俺にも残しといてくれよ」

「無茶言うなって。俺も拍子抜けで困っていたところなんだ」

軽口を言い合いながら闘技場を見回す。魔宮とも言える闘技場全体に亀裂が発生しており、瓦礫が周囲に散らばっている。……これは相当派手に暴れたみたいだな。まあ、大半は十六夜が破壊したんだろうし、ゴーゴンの伝説では様々な魔獣を生み出した

というのもあった。それならこの薄気味悪い闘技場も十六夜がこんなに荒らしたのも得心がいく。俺はそう推測しゴーゴンに視線を向けると、ゴーゴンの様子がおかしいのに気が付いた。体を痙攣させ、何かを耐えるかのように唸り声を上げる。十六夜も異変に気が付いたのか不敵な笑みを浮かべ、ルイオスに問いかける。

「へえ……………まだやる気なのか？その根性だけは認めてやるぜ？」

「ち、違う！僕は何もしていない!？」

問われたルイオスもこの異変には何も手を加えていないようだ。あの必死な形相を見るからに嘘を付いていないようだし、俺はもう一度ゴーゴンに視線を向けると未だに唸り声を上げ、何かから逃げるように暴れ始めた。その様子に俺は段々と嫌な予感が強まっていく。この感じ何処かで……………しかもごく最近に目の当たりにしたはずだ。記憶を辿っているとゴーゴンの体から瘴気が発生するのを視認することが出来た。

「……………っ!?!お前ら、ゴーゴンから今すぐに離れる!!」

その見覚えがありすぎる瘴気に俺は焦りだし、ルイオスを含めた全員に対して叫喚を上げる。だが、皆が行動を起こす前にゴーゴンから放出された黒い波動によつてこの場にいる全員が吹き飛ばされる。俺はすぐさま体勢を戻し、ゴーゴンを取り巻く瘴気を振り払う為行動を起こそうとするがその前にゴーゴンは瘴気に包み込まれてしまった。瘴気に包み込まれたゴーゴンは次第に形を変えていき、違う存在へと成り代わる。その姿に俺は思わず頭を抱え呟いてしまった。

「何でコレまで箱庭にいるんだよ……………」

それは俺の世界で暴れていた怪物——通称「影」と呼ばれた存在が俺達の前に立ち塞がったのだった。

☆

アルゴールドだったもの——「影」は異様であった。体の全ては闇に染まり、乱れた灰色の髪も下半身も全て蛇へと変わり果てている。しかし異様と感じる要素はその姿ではなく、影がそこにいるだけで此処にいる全員が拒絶反応を起こすという……………その

存在感だった。「影」によって漂う重苦しい空気の一部を除く全員は恐怖という感情が込み上がり立ち竦んでしまう。だが、十六夜だけは冷や汗を流しながらであるが嬉々とした表情で「影」を睨みつける。

「いいぜいいぜいいなオイ！面白い展開になってきたぜ！！」

「待て十六夜！不用意に近づくな！！」

「R a A A a a !!」

龍騎の制止の声は虚しく、十六夜は地面を蹴り上げ影に向かって接近しようとする。だが十六夜の存在を認知した影は怪しく瞳を輝かせ謳うような不協和音を響かせた。すると途端に荒れていた白亜の宮殿の大地が奈落の深さを彷彿させる漆黒の泥へと変わり果てる。突然現れた漆黒の泥に十六夜達は驚愕しながらも泥が及ばない場所へと移動しようとするが凄まじい早さで下半身が飲み込まれていく。泥から脱出しようとして藻掻くが底なし沼のようにどんどんと体が沈んでいく。このままでは不味いと思いつつ十六夜は泥に向けて拳を振り落とす。しかしその拳は泥の中へと沈み込み、十六

影が恐怖を植え付けるかのような叫声を上げながら、蛇となった下半身で十六夜を叩きつけるように振り下ろす。手足が封じられた十六夜は躲すどころか防ぐ事も出来ず、にその重たい一撃を喰らい、全身が漆黒の泥へと沈み込んでしまった。

「十六夜さん!?!」

泥に沈んでしまった仲間を目の前で目撃してしまい悲鳴を上げながら仲間の名前を叫ぶジン。黒ウサギも絶対の強さがあつた十六夜が敗けた事に動揺を隠せないでいる。だが、影は動揺している黒ウサギを待つはずもなく次の標的……黒ウサギへと視線を向ける。

「黒ウサギ!?!逃げて!!」

いち早く影の次の標的に気付いたジンは必死な叫び声を上げ、黒ウサギはその声で我を取り戻す。

ゆっくりと接近してくる影に怖気づきながらも泥から抜け出そうと藻掻く。迎撃するという一手もあつたのだが今はギフトゲーム中であり、姿が変わったとは言えルイオ

スのギフトであるゴーゴンに攻撃するということは審判としてあるまじき行動であり
“ノーネーム”の反則負けに繋がってしまう。

結果、黒ウサギは逃げるという選択しかないのだ。しかし、この泥は十六夜でも脱出
が出来なかつた底なし沼……………そう簡単に脱出が出来るはずもなく徐々に体が沈んで
いく。下半身が泥に吞まれるが諦めることなく必死に藻掻く黒ウサギに影が差す。黒
ウサギは目線を上げると眼前には影が蛇と化した髪が黒ウサギに目掛けて漆黒な高密
なエネルギーを無数に収縮させながら立ち尽くしていた。遠くからジンの叫び声が聞
こえてくる。だが、身動き出来ない黒ウサギは抗う術もなく諦めたかのように瞳を閉ざ
す。

「……………すみません、ジン坊っちゃん」

ジンに向けて謝罪の言葉を呟きながら静かに涙を流す黒ウサギ。コミュニティ再建
を共に心したのにこんな形で脱落してしまう無念さ、自分の同士を死に繋がる目に遭わ
してしまった後悔、抗うこと出来ず無力感。そんな感情が黒ウサギの心情を駆け巡って
いく。涙する黒ウサギを更に追い打ちかけるように影は全ての高密度エネルギーを放出

させようと黒ウサギを囲むように蛇を移動させようとする。

「俺の仲間を何泣かしてんだよ、蛇女」

冷徹でそれでいて怒りを含んだ声音が黒ウサギのウサ耳から聞こえてきたと同時に凄まじい衝撃波が黒ウサギの体を襲う。衝撃波に耐えながらも瞳を開けると、目の前にいるのは今にも攻撃してきそうだった影ではなく漆黒の泥に沈むことなく立っている龍騎の後ろ姿だった。

だが、その後ろ姿は今まで見てきた背中とは大きくかけ離れていた。綺麗とは程遠すぎる靈力で作り出した無骨な黒翼。黒を主軸として赤のラインが龍騎を蝕むように模様された籠手とグリーブ。見たことのないその姿に黒ウサギは呆然と見つめながら龍騎の名を口にする。

「——龍騎さん？」

「悪い、黒ウサギ。封印を解くのに時間が掛かって遅くなってしまった」

先程の冷徹な声音とは違い、安心させるかのように優しい声音で黒ウサギに喋りかける龍騎。黒ウサギは普段とは何処か違う龍騎に少し戸惑いながらも恐怖で張り詰めていた表情が安心したような表情に変わっていく。その表情を見た龍騎は一瞬だけ口元を緩め、すぐに影に視線を移す。

影は壁に張り付いており、衝撃が強すぎたのか大きな亀裂が無数に入っている。黒ウサギが瞳を閉ざしていた間、龍騎は影の眼前まで瞬時に移動し拳を腹に叩き込んでいたのだ。余程の威力だったのか影は激しく痙攣しておりすぐに体を動かす事が出来ないでいる。それを確認した龍騎は再度拳を構える。しかしその拳の先は影ではなく漆黒の泥に狙いを定めていて、龍騎はいつものように腕に靈力を纏わせる。その靈力はこれまで五行を示していた輝きではなくどす黒い——足元にある漆黒の泥が可愛く見えるほどの濁りきった輝きを発現させていた。そして、龍騎は十六夜が沈んでいった場所

を睨みながら霊力を纏った腕を泥に目掛けて振り下ろし十六夜の名を叫ぶ。

「いい加減寝てないで起きろ！十六夜!!」

龍騎の腕が泥に触れた瞬間、黒ウサギ達の身動きを封じていた泥が消滅していく。それはまるで最初からなかったかのように……その存在を認めないかのように。泥が消滅すると呑み込まれていた下半身はしっかりと大地を踏み締める事が出来るようになり、黒ウサギは今の現象に啞然として立ち尽くす。龍騎はそんな黒ウサギを視界に移すと、黒ウサギの額に向けてデコピンを放つ。

「あいたつ!?!な、何をするんですか!?!」

「こんなところで突っ立ってるお前が悪い。そんなことしている暇があるんだつたらジンの護衛に向かえ」

黒ウサギの抗議を一刀両断する龍騎。キツパリと言われた黒ウサギは狼狽える。龍騎の言っていることは正しい。影に痛手を負わせたからといってまだ戦闘が終わった

わけではないので油断してはいけない。だが、黒ウサギはこれ以上仲間を危険な目に遭わせたくはなく必死に反論をしようとする。

「で、ですが！龍騎さん一人では!!」

「俺はあんな奴よりも強い……それに俺一人で倒す事を面白く思わない問題児もいるわけだしな」

そう言つて龍騎はある場所に視線を向ける。黒ウサギも釣られて追うように視線を向けるとそこには泥に沈み込んでいた十六夜が尻餅をついたように座り込んでいた。その姿を見た黒ウサギは仲間が無事だった事に胸をなでおろす。

「い、十六夜さん!?!よ、良かった………」

「アレの相手は俺と十六夜がやる。黒ウサギは高みの見物でもしていてくれ」

龍騎は黒ウサギの返答を待つ事なく十六夜の下に駆け寄る。ゆっくりと立ち上がり

ながらイラついた表情で頭を掻く十六夜に龍騎は嫌味っぽい顔で話しかける。

「随分とあつきりやられたじゃねえか十六夜君？」

「うるせえ！………チツ、少し油断しただけだ」

「あつそう。でも、油断しながら勝てるほど甘くないぜアレは」

「………お前アレが何なのか知っているのか？」

「………まあな。だけどそれは後にしてくれ………来るぞ」

刹那、龍騎と十六夜に向かって無数の漆黒の光線が襲いかかる。龍騎と十六夜は難なくそれを躲し、光線を放った元凶を睨みつける。そこには既に起き上がっているゴーゴンが今まで以上に怪しく瞳を輝かせていた。しかし明らかに凶暴さが増したのにも関わらず龍騎と十六夜は不敵に笑みを浮かべるのだった。

「……………で、どうするんだ？ どうやってあいつを倒す？」

「俺と十六夜で奴が倒れるまで殴るのみ」

「ハッ！ シンプルでいいじゃねえか！！」

十六夜がそう言葉を放つと同時に龍騎と十六夜は影に向かって地面を蹴り上げる。影も迎え撃とうと再度下半身を使い鞭のように薙ぎ払う。その攻撃に龍騎は十六夜の一步手前に躍り出し、籠手に少し濁りを含んだ輝きを放つ紅蓮色の靈力を纏わせ反撃する。

「遅いんだよ、『火烧連滅却』!!」
かしょうれんめつせきやく

影の下半身と龍騎の拳が激突する。しかし均衡するのは一瞬だけであり打ち勝ったのは龍騎だった。龍騎の籠手が下半身に触れたと瞬間、強烈な爆発と轟音が影を襲いかかる。だが、龍騎の一撃はこれで終わることはなかった。時間差で二発目、三発目の爆発が影の下半身から発生する。

『火焼連滅却』。殴った相手を連続で爆発を喰らわす技の一つ。

今まで龍騎が言葉を放つと言葉次第でそれ相応の威力を發揮していたが、この技はそれらとは異なり威力も段違いに強いのだ。龍騎はそういった技は全て名をつけていることにしているのだ。

影から苦悶に満ちた叫び声を上げる。龍騎の一撃により隙だらけとなった影に十六夜が更に追撃を行う。

「喰らえやつ！蛇女!!」

十六夜の重たい蹴りの一撃を影の脇腹に打ち込み、その威力に押され影は数m程弾け飛ぶ。そして、影が吹き飛んだ方向には既に龍騎が掌を大地につけて待ち構えていた。

「更におまけだ！『地層砕き』!!」

濁った輝きを放つ赤銅色の靈力を大地に流し込む。すると、影が吹き飛んでいる先に

ある大地に亀裂が入り大きな穴が出来るように崩壊していき、それによって砕かれた鋭利な岩が影に目掛けて放出される。

『地層砕き』。これも『火烧連滅却』かしょうれんめつせきやくと同じ技の一つ。

相手の周囲にある地面を崩壊させ、体勢を崩させると同時に鋭利な岩が相手に向かって放たれるのだ。

岩は次々と影の体に突き刺さり、その度に影は悲鳴を上げていく。その間に龍騎は影の真上に跳躍して渾身の蹴りを放つ。防ぐ事も出来ず、影は大きな穴に向かって吹き飛んでいき、影の巨体と龍騎の一撃の威力によって穴の中に更に小さいクレーターが出来上がった。一撃を加えさせた龍騎はそのまま十六夜の横に着地し警戒しながらクレーターの方へと視線を向ける。

「す、凄………！」

ジンが今の一連の流れに感嘆の声を上げる。さつきまでは苦戦していた相手だったのだが龍騎が参戦しただけで圧倒的に影を追い詰めたのだ。瀕死目前となった影を見

てこれで終わりかと思った黒ウサギとジン……だったのだが、影は体をふらつかせながら立ち上がり雄叫びを上げた。

「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■!!」

流石は元・魔王である星霊・アルゴール。元々、格が強いおかげか龍騎と十六夜の連続攻撃を耐え抜いたようだ。影は雄叫びを上げながら蛇となった髪を操り高密度のエネルギーを収縮させる。しかし、今までとは違い一点に集中させて大きなエネルギーの集合体を球体状に作り出した。段々と肥大化していく球体に黒ウサギ達はあのエネルギーは危険だと感じ取る。だが、龍騎と十六夜は余裕そうな笑みを浮かべながら大きくなっていく球体を見つめる。

「さてと、奴さんが本気になって切り札を切ろうとしてるぜ？」

「別にそれがどうしたってんだ？俺達が切り札を破った上で奴を倒せばいい話だろう？」

「ハハツ、違いねえ」

重々しい雰囲気の中、軽口を言い合う龍騎と十六夜。黒ウサギとジンは隙だらけの影に攻撃しない龍騎と十六夜を心配そうに見つめる。そして、溜め終わったのか影は龍騎達に目掛けて高密度エネルギーを——全てを拒絶するかのような漆黒の砲撃が空間を歪ませながら放たれる。砲撃が通過しただけで大地が削り取られていく威力——なのだが、それを目の前にしても龍騎は不敵な笑みを浮かべるだけだった。龍騎は無骨な黒翼を展開させ、砲撃に向かって地面から飛び出す。

「龍騎さん!？」

明らかに自殺行為であるその行動に黒ウサギとジンは悲鳴に近い声音で叫ぶ。そんな声を無視するかのように龍騎は腕に今までとは比べ物にもならない程の濁りきった輝きを放つ霊力を纏わせ、影が放った砲撃に拳を打ち込んだ。今度は突進の勢いも加えた龍騎の拳と漆黒の砲撃が均衡する——ことはなかった。

「いんなのいらなから返す……せつ!!」

死となっている元の姿となったアルゴールだけだった。

「う、嘘だ!?!こんなことが……こんな馬鹿なことが!?!」

一部始終を見ていたルイオスが狼狽える。暴走したアルゴールを制御する事が出来なかったがその力は絶大だったので形勢逆転となると思い、今まで静観していたのだが……結果は惨敗。あまりの結果に膝から崩れ去るルイオスに軽薄そうな笑みを浮かべた龍騎が近寄り勝利宣言を口に出す。

「残念だがこのギフトゲーム……俺達 “ノーネーム” の勝ちだ」